

軽音×恋愛の奏者 巻頭に参戦
初恋とともに **春屋アロツ**

Lagado Fukapon 川鵜鶏肋 なぎ

祝1周年 特大ボリュームで贈る合同コピー誌
深夜3時間で印刷/製本できるパートナー募集中

mnfikmyhk/**CREATURE MIXING 3**
Five S

「さようなら、五月病」
彼女はきっと、泣いていた

5分待つ勇氣もないくせに――

彼女は笑って、待っていた。

僕は単純に、凄いなって思った。

CONTENTS

初恋とともに	春屋アロツ	03
伍人死んだらまたおいで	Lagado	11
珠坂の女神	川鵜鶏肋	15
東雲家五兄弟記録簿	なぎ	70
こんメイ!	Fukapon	76
難解辛苦		99

CREATURE MIXING
mnfikmyhk/3/five

初恋とともに

春屋アロツ

高校に入ってから一人暮らしをしている雅の家に美紀が来るのは珍しいことではない。お互いの家が近いこともあって、宿題を片付けたり、並んで映画を観たり、漫画を読んだり、と、放課後の何もないひとときをここで過ごすことはむしろ多い。

とはいえ、独りで住むには少々広い、家族用のマンションに暮らしている雅にとって、友人が遊びに来るのは嬉しいことだ。特にそれが美紀であれば、それ以上喜ばしいことはない。

「そいやうちの母親が最近多いって文句言ってたな」

年が明けてまだそれほど経っていないある日、夕飯の準備が済んで手を合わせるや、美紀がそんなことを言い出した。

「何がだ？」

「ここで飯食ったり泊めてもらったりするのが。入り浸ったら迷惑だろうって」

美紀の母親が気にするのはわからないでもない。確かに秋頃からは二週間に一度は泊まっていくから、普通に考えたら明らかに多い。美紀も親の言うことだから、みたいな口調だが、自分自身も少なからず雅の反応を気にしているのが見て取れた。雅は表情を変えずに、静かに答えた。

「迷惑なわけではないだろう。今日みたいに夕飯の買い物手伝ってくれば十分だ」

だよなあ、なんて言いながら、ほっとした顔でシチューにスプーンを突っ込む。それを見て付け加えた。

「ああ、それから失敗作を片付ける手伝いもしてほしいな」

美紀の手がぴたりと止まる。

「……コレ、失敗作か？」

「食べればわかる」

わざわざそう言って、食べてみせた。そこその味だが、雅としては充分合格だ。だが、普段から表情をほとんど変えないせいで、いくら付き合いが長いといっても、美紀には我慢しているかどうかまではわからないだろう。不安げに、それでも思い切ってスプーンをがばっと口に入れた。

「……なんだ美味しいじゃん。変な前置きするなよ！」

「私がそもそも料理下手なのは知ってるだろう。今日のはともかく、また失敗しないとも限らんから、その時は頑張れということだ」

「わかりづれーよ！」

「そうかもしれないな」

平然と言い放つと、美紀はじろりと雅を睨みつけてから、表情を緩めて食べ始めた。雅もそれを見て、自分も二口目を口にした。

中学生の時、美紀と知り合ったばかりの頃は、まさかこんな関係になるとは思わなかった。勉強は得意だが無口で感情表現に乏しい雅と、頭よりも体が動くタイプで口は悪いがよく笑う美紀とは、クラスと身長が平均より高いことくらいしか共通点がない。

それが、ちょっとした口論から美紀と同じクラスの男子とが教室でケンカを始めた時に縁が繋がった。相手は他の男子に任せ、暴れる美紀を強引に引きはがしてそのまま教室の外に連れ出したのだ。それまで一度も口を利いたことのなかった相手の突然の乱入に、その時の美紀は哑然としていた。

それ以来、お互い何とはなしに言葉を交わす機会が増え、進級する頃にはお互い親友と言ってはばからないくらいに親しくなった。その頃の美紀は今よりずっと不安定で、女子の友だちがほとんどいなかった。その時に支えになれたことが、今の関係に繋がっていると思う。

当時は雅の両親もこの家に住んでいたから今のよう泊まりに来ることはほとんどなく、代わりに美紀の家で、時には美紀の兄も巻き込んで遊ぶことが多かった。

高校に入る間際に父親の転勤が決まった時、雅は頑として両親についていくことを拒み、三人で住んでいた家に一人残ることになった。一人で暮らしていると少々の不便や煩わしさはあるが、それでも自分の決断は正しかったと思う。こうして美紀と二人で過ごす機会を簡単に得ることができるのだから。

不意に雅の携帯が鳴った。邪魔が入った、という不満は液晶に表示された名前を見たらすぐに消えた。美紀にもそれが伝わったらしい。

「誰？」

「綾乃だ。——もしもし？」

『あ、ミヤちゃん？ 今大丈夫？』

「ああ」

電話口から聞こえてきたのは、川合綾乃のかわいらしい声だった。高校で出会った、二人の大切な友だちだ。

『あのね、ミヤちゃん明日時間ある？ 今度カナちゃんの誕生日だから、プレゼント見に行きたいなって』

「わかった。ちょっと待って」

美紀に綾乃の言葉をそのまま伝えると、美紀は自分の携帯を取った。

「明日は……五時半から練習だから、五時くらいまでなら大丈夫だろ」

「もしもし。昼間なら私も美紀も大丈夫だ。夕方からは用事があるんだが」

『うん、よかった。……もしかして、ミキちゃんそこにいるの？』

「ああ。代わろうか？」

『うん、じゃちょっと代わって？』

美紀に携帯を渡すと、美紀は満面の笑みを浮かべて話し始めた。小柄で華奢な彼女は、物腰が穏やかでいつも笑顔を浮かべているような子だ。彼女と話している時の美紀は頬が緩みっぱなしで、人目もはばからずに撫でたり抱きしめたり、と大騒ぎだ。雅が彼女と仲良くなったのも、そもそものは美紀が彼女と仲良くなったからだ。

正直に言うてうらやましいことこの上ないのだが、雅の目から見ても、綾乃は理想的な「かわいい女の子」だ。そばにいて嫌な気分になったことなんて一度もないし、美紀のメロメロっぷりもよくわかる。だから美紀と引き離そうなどと考えたこともない。

「雅、代わるか？」

「いや、もうそのまま切っている」

「ん。……大丈夫だってさ。じゃあまた明日な。——うん、お休み」

手元に戻ってきた携帯を畳んで食卓の隅に追いやった。もう誰からもかかってくることはないだろう。

「綾乃がお休み、だってさ」

「ああ」

幸せの余韻が残った表情で伝えてくれる。それを受け取って、シチューの最後の一口を飲み込んだ。

「うちそうさま」

食器を流しに置きに行こうと立ち上がると、美紀が自分の分の皿を取って言った。

「洗っとくから先に風呂入って来いよ」

「いや、自分でやるからいい」

「いいから。それぐらいオレにも手伝わせろ」

返事を聞かずにさっさと流しに食器を運んでしまった美紀の背中に礼を言って、先に入浴を済ませてしまうことにした。

「そうだ、鍋はまだ洗うな。まだ少し残ってるから明日食べよう」

「おう。食パンあるか？」

「確かあったはずだ。左の棚の下の方にないか？」

「んー……ああ、あったあった。あと三枚残ってる」

パジャマを持って美紀のそばを通り過ぎる。腕まくりをして流しに向かう彼女の姿に、ふと不埒な想像をしてしまった。

「ん？」

「いや、なんでもない」

雅と入れ替わりに浴室に入った美紀は、あっという間に戻ってきた。Tシャツにジャージ姿の彼女は、雅が用意していた紅茶とお茶請けを興味津々でのぞき込んできた。

「お前そっちのクッキー持って、ドア開けてくれ」

「あいよ」

美紀はクッキーの入った皿を持って、寝室のドアを開けてくれた。そのまま先に入って、小さなテーブルを部屋の隅から持って

きて、片手で脚を引き出して、部屋の真ん中に置いた。そこに紅茶を載せると、美紀もクッキーの皿を隣に置いて、ドアを閉めた。暖房は入れておいたから、寒さは感じない。

美紀は入り浸るようになってから持ち込んだビーズクッションを定位置に並べてそこに腰を下ろす。ベッドに背中を預けてうーんと伸びをした。その左隣に雅も自分の座布団を置いて腰を下ろす。

「はい」

「お、サンキュ」

揃って紅茶を一口。

「明日の話だけど、別にお前まで五時に付き合わなくてもいいんだぞ？」

「何、そう言っておけば夕方には用事が済むように動けるだろう。気が向いたら明日その場で綾乃を誘えばいい」

クッキーに手を伸ばす。一口かじってから、思い出したように付け加えた。

「それに久し振りに挨拶に行くのも悪くないだろう。この間の学祭ライブ以来だから、もう三ヶ月近く会ってないしな」

「冬場は大学の方が忙しいとかでライブしづらいからな。三月末にどっかでやるっていつてたけど」

「大学生は大変だな」

「どーだか。どうせサボりまくってたツケだろう。オレらの方がよっぽど大変だよ。期末もあるし」

美紀はぼっそり切り捨てた。こうも遠慮がないのは、話題に出た美紀のバンドのリーダーが美紀の兄だからだ。

そのバンド「カルマ式」は、美紀の兄の井上浩太がリーダーを

務め、美紀はベースを担当している。他にギターとドラムを加えた四人編成で、美紀を除く全員が大学一年生だ。コピーやロック・

アレンジがメインで、時々ライブハウスで演奏している。

雅はライブには毎回のように顔を出しているし、そもそも浩太とは中学生の頃からの知り合いだから、二人としゃべっているうちに他の二人とも仲良くなった。

「三月末か。四人の演奏を聴くのは少し先になるな」

雅は何気なくそう言ったのだが、不意に美紀が顔を曇らせた。

「……どうした」

つい今し方までの表情との落差に、雅は戸惑った。雅の視線に、美紀は少し逡巡してから説明した。

「いや、兄貴がさ。カルマ式のメンバー増やすとか言い出して」

「ほう」

意外な言葉に、雅は目を丸くした。これまで二年近く聴いているが、いろいろな曲をギター二本とドラム以外の三人のボーカルとで演奏してきた。音楽は素人の雅には、これ以上のメンバーが必要だとは思えなかった。だが、浩太は五人目を入れると言う。

「ボーカルを入れるのか？」

「いや、キーボード。別のバンドでも弾いてる人で、実際すげー

巧いんだけどさ」

「納得いかないのか」

美紀は小さく頷いた。

美紀がカルマ式というバンドを大切に思っていることは、バンドに入る前から美紀と一緒にいた雅にはよくわかってる。美紀と話をしている、バンドの話が出ないことはほとんどない。ベイスは楽だと思ってる、とかあんなの弾けるか、とか愚痴も多いが、

本気で嫌がっているように見えたことはない。

自分の兄がリーダーで、自分以外全員が年上、という構成であれば、そもそも入ることもためらいそうなものだが、美紀は自分より三歳年上のメンバーと仲良く、また対等にやってきた。

「確かに巧いし、コピーとかアレンジとかしやすくなるけどさ。いなくても何とかなってたし、何とかするだろ」

拗ねた口調で言った。唇を尖らせたその様子はいつもの男っぽい言動とはまったく違って、まるで子供だ。雅は思わず抱きしめたい衝動に駆られ、ぐっと我慢した。代わりに右手で柔らく頭を撫でてやる。

「もう会ったのか？」

「会ったっーか、その人のバンドのライブ聴きに行ったんだよ、先週。終わってから兄貴とか金やんとしゃべってたけど、まあフツーにいい人っぽかった」

雅の手を振り払おうとはせず、そのままの口調で答えた。

「他の二人はなんて？」

「金やんは賛成、寛美さんは保留」

「寛美さんがすぐに賛成しなかったのか。てっきり逆だと思ってたが」

雅は理由を想像してみた。

ギタリストの寛美は浩太の恋人で、うらやましいを通り越して少々呆れるくらい仲がいい。特に理由もなく反対するようなことはなさそうだ。あるいは寛美はギタリストだから、自分一人ではないの、と知っているのかもかもしれない。ただ、それを言うなら寛美や美紀が歌う時は浩太もギターを弾くのだから、その代わりだと思えばそれほど反対しなさそうに思える。

一方の金やん、ドラマーの金田はラグビーでもやっていそうながっちりした体格の男だが、見た目に似合わず素直で人当たりがいい。その上、気配りのできる人だから、美紀が嫌そうな顔をしているのに気付いて止めそうな気がするのだ。

「金やんは反対しねーよ。そもそもその人、金やんの彼女だし」「なるほど。それなら反対しないだろうな。……というか、その人は女性なのか」

「あー、うん。もうじき三十一だって」

「三十一？ ……ずいぶんとまた年の離れたカップルだな」

金田は今二十歳だから、ちょうど十歳差がある。それで付き合い合っているのもすごいが、そもそもよくそんな出会いがあったものだ。

「近所に住んでて子供の頃から面倒見てもらったりなんざで付き合いがあったんだってさ。金やんずっと実家暮らしだから」

「なるほど。近所のお姉さんだった訳か」

「しかも初恋の相手なんだと」

雅は思わず手を止めて、感嘆の声を上げた。

「レアだな。そんなに長い間想い続けられるものか」

「そこはちょっと金やん尊敬した。けどそれとこれとは違う話だろ」クッキーをつまんで一口で食べて、紅茶を飲む。雅もクッキーを取った。かじりながら考える。美紀はどうしたいのか。どうすればいいのか。

ふと思いついたのは、自分たちのことだ。美紀が綾乃と仲良くなってすぐの頃、雅も含めた三人ですっと一緒にいる時期があった。その三人の中から入ってきたのが、明日選ぶプレゼントを贈る相手、佳奈だ。その時は佳奈と多少でも話したことがある

のが綾乃だけだったのだが、美紀も雅も、フレンドリーでおしゃべりな彼女とすぐに仲良くなった。

元々の三人で何かを作っていたわけではないが、佳奈が輪に加わる前と後とで空気が変わったのは間違いない。それでも美紀は大した抵抗もせずにその変化を受け入れられた。

少なくとも音楽のことが絡まなければ、同じことのはずだ。

「お前はその人自体ダメなのか」

「いや、その人だからっつーわけじゃないんだけど」

「バンド云々がなくてただ金田さんの彼女というだけなら、仲良くできそうか」

「たぶんな」

断定はしないが、ほとんど考えずに頷いたことを考えると、少し話した限りではその人には好感を持っているのだろう。単にバンドのメンバー構成が変わって、音なり空気なりが変わるのが嫌なのだ。

「それなら、バンドの中でもうまくやれるんじゃないか？」

「単におしゃべりするだけならそうだろうけどさ」

「……お前は本当にかわいいな」

思わず本音が口をついて出た。美紀は雅をじろっと睨みつけた。

「女々しいって言いたいのかよ」

「そうじゃない。言葉どおりの意味だ。気にするな」

また手を動かし始めると、視線は多少緩んだ。短い髪を梳きながら、少し言葉を選んで口にした。

「音楽的にどうなるかはもう浩太さんが考えてるだろう。最初は試運転だろうし」

「だろうな」

「それなら、その人が入って音が変わるのは、浩太さんの狙いどおりだろう。私にわかることじゃないかもしれないが、お前にならわかるんじゃないか？」

今度は返事がなかった。頷きたくないだけだ。雅はなんとなくそう思った。

「お前がその人と人間的に合わないならまた別だが、そうじゃなければ、まずは受け入れてみたらいいんじゃないか？　それでやっぱりダメだと思ったんなら、そう言えばいい」

「んー」

美紀はやはりすぐには頷かなかった。雅の手のひらの感触を味わうように目を閉じた。

「それしかないよなあ」

そう呟いたのは、しばらく経ってからだ。

「とりあえず五人でやってみて、やりづらかったら兄貴に文句言う」

そう宣言して顔を上げると、すっかり冷めてしまった紅茶を一息に飲み干した。ふう、と息を吐いた美紀は、幾分すっきりした顔をしていた。

「ありがとな、雅」

「どういたしまして」

雅も紅茶を飲み干して、お代わりを入れるために、ポットを手元に立ち上がった。

時計の針がこちこちと音を立てる。ベッドのすぐ下に敷いた布団からは、美紀の寝息が聞こえてくる。その他にはほとんど音がしない。そんな静けさの中でずっと目を閉じているのだが、いつ

もより遅くまで起きていたのに、眠気が来ない。時折寝返りを打ちながら、美紀の寝息を聞いていた。

ふと美紀の寝息が止まり、むくりと起き上がった気配がした。

そのまま部屋を出て行く。面倒なのか音が出ないように気遣ってか、ドアは閉めないまま。遠くからドアの閉まる音がして、雅はほっと息を吐いた。思わず息を詰めていた自分に苦笑して、時計を見る。午前三時を過ぎたところだ。

しばらくしてトイレの水を流す音がして、美紀が部屋に戻ってきた。雅は気付かれないよう、また目を閉じた。起こしたと思わせてはいけない。

美紀は布団のそばに歩いてくると、やや間があって、ベッドに手をつけて、そのまま腰を下ろしたようだった。おそらくは、雅の寝顔をのぞき込むような姿勢。

そのまま時間が過ぎる。布団に戻るでもなく、ベッドにそのまま寝転がるでもなく。目を閉じていては状況がまるでわからない。なかなか難しいとは思いますが、もし手をつけて座ったまま寝てしまったのならちゃんと寝かせてやらないと、起きる頃には体の節々が痛いに違いない。

自分にそう言い訳をして、雅はそっと目を開けた。

翌朝。雅は美紀が起きるよりも早く目を覚ますと、顔を洗って朝食の準備を始めた。と言ってもシチューの残りがあるから、鍋を火にかけてトーストの準備をするだけだ。ついでに、昨日美紀に買わせたバナナを切って、ヨーグルトを入れた深皿に半分ずつ入れた。美紀は真夏だろうが真冬だろうが朝は冷たい飲み物を口にする。雅は特に決めているわけではないから、美紀と同じもの

でいい。オレンジジュースがあったから、二人分コップに空けた。食卓の上は片付いたので、新聞を取ってきて食卓に放り投げてから美紀の様子を見に行く。美紀は目を薄く開いて、ベッドに寝転がったままぼーっとしていた。ドアの音に気付いて、入ってきた雅に視線を向ける。

「おはよう」

「おはよ……あふ。あれ、オレなんでベッドの上にいるんだ？」

眠そうに身を起こして、ようやく気付いたようだった。当惑顔の美紀を見ていた雅は、ふとした衝動の指し示すとおりに美紀の隣に腰を下ろして、彼女をふわりと抱きしめた。美紀はあっさりと雅の腕の中に収まり、自分も雅の背中に腕を回した。

「……どうしたよ、急に」

「お前、昨日のことは覚えてないんだな」

「昨日のことって？」

「なんでベッドで寝てるのか、だ」

「いや、全然……」

狐につままれたような顔の美紀の頬に自分の頬を当てた。抱きしめるくらいならまだしも、雅がこんなにあからさまに甘やかな仕草をしたことは、美紀の記憶にはない。美紀はいよいよ困惑した。

「何があったんだ？」

「ん？」

「昨日の晩。オレ覚えてないんだけど、お前は覚えてるんだろ？」

「もちろんだ」

「教えろ」

「自分で思い出せ」

「無茶言うなよ」

「私から言わせるな、そんなこと」

「いや、言えって」

美紀の頬から顔を離すと、美紀は真っ赤な顔でこちらを睨みつけていた。かわいい。心の底からそう思って、もう一度ぎゅっと抱きしめた。

「だっ……だーかーらー」

「朝食の支度はもうできてる。顔を洗ってこい」

耳元でそうささやいて、ぱっと身を離れた。そのまま立ち去ろうとした雅の腰に、美紀の腕が巻き付いていた。動きが止まったときには、ぱっとベッドから起き上がって首にも腕が巻き付く。抱きついているのでなく捕まえにかかっているのは、入っている力でわかる。雅は肩と腰をがっちり固められたまま、平然と尋ねた。

「どうした」

「どうしたもこうしたも……」

「覚えてないのなら気にすることはないだろう」

「お前の態度が気になるんだよ。なんでそんなに……」

「そんなに？」

「……そんなに……その」

言いよどむ姿もかわいらしい。雅は美紀のそんな姿も好きなのだ。教室で見せるがさつで開けっぴろげな表情も、時折見せる真剣そのものの横顔も、ステージ上で見せる上気した笑顔も、雅に甘えたりからかわれたりする時のふくれっ面も。

「私がお前に甘えるのは不自然か？」

「嫌じゃねーけど、急にどうしたんだろうって思うだろ」

「ふふふ」

「だからなんだその意味ありげな笑いはっ！」

「だから意味はないと言ってるだろう？ 単にお前の反応が面白いだけだ」

「くあーっ！」

こんなに頬が緩むのは久しぶりだ。結局美紀は雅に半ば引きずられるようにして洗面所に連れて行かれた。不承不承顔を洗って歯を磨く間に、トースターのスイッチを入れてシチューをよそった。トーストが焼ける前に現れた不満げな美紀を椅子に座らせて、雅は後ろから耳元にささやいた。

「昨日はお前が寝ぼけてベッドに入ってきたんだ。自分の部屋と勘違いしたんじゃないか？」

「……そんだけか？」

「一晩中しがみついておいてそれだけはないだろう。おかげで寝不足だ」

「あー……それは悪かったよ」

「ついには食べてから少し寝るから、出かける時間になったら起こしてくれ。十一時だったよな？」

雅はそう言って身を離すと、二人分のトーストを取りに行った。

「ああ。それくらいは構わねーけど……」

トーストとシチュー皿を並べて置いて、隣の椅子に雅も腰を下ろした。

「なーんか隠されてる気がする」

「だとしても寝ている間のことだ。そもそも私しかないんだし」

「だからそういうことをだな——」

「そんなに気になるなら、私が寝ている間に仕返しの一つもすればいい」

雅がにやりと笑ってそう提案すると、美紀はぴたりと口を閉ざした。

骸に群がり其の死を告げる



はい
祀神に捧げる靈魂を
五体集めて戻ります

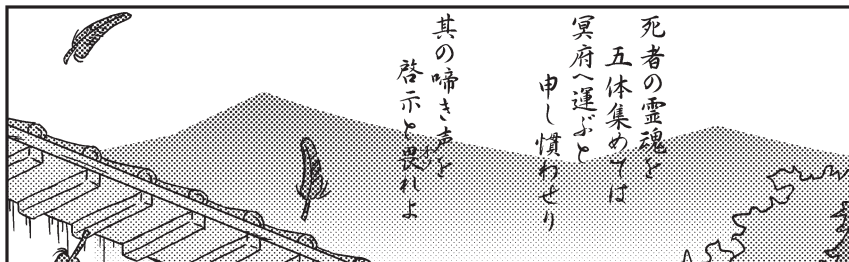
漆黒の翼を掲げ
醜き声で啼き

現世に漂う靈魂が
導かれることを
待っています
伍人死んだらまたおいで



高皇産靈尊の御先に
八咫鳥と呼ばれる者あり

其の啼き声を
啓示と畏れよ



死者の靈魂を
五体集めれば
冥府へ還ぶと
申し慣れせり
其の啼き声を
啓示と畏れよ

伍人死んだらまたおいで

ラガードー
著: Lagado



下界では戦争でも
起きてるのか??

もう帰ってきたの?
もう死者を五人
集めたの?



伍人死んだら
またおいで:
そう送り出したのが
半刻前のことだが

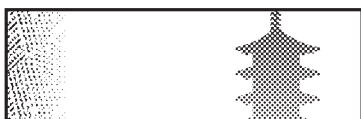
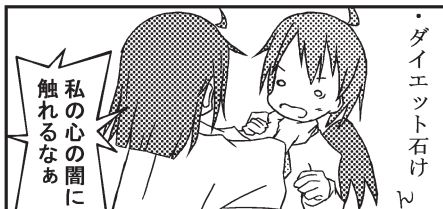
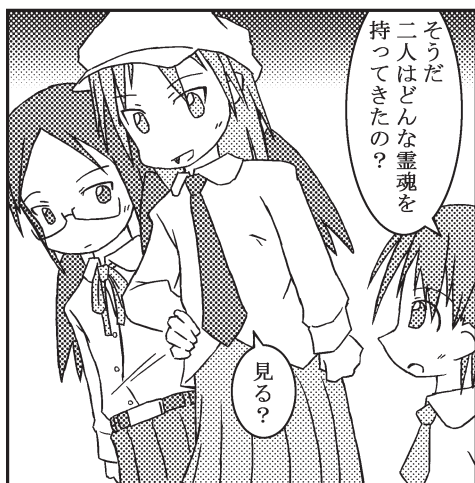
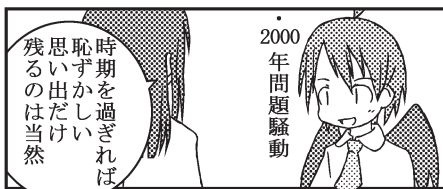


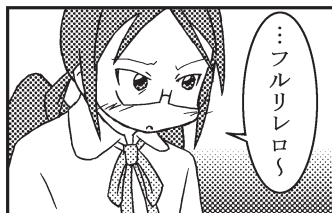
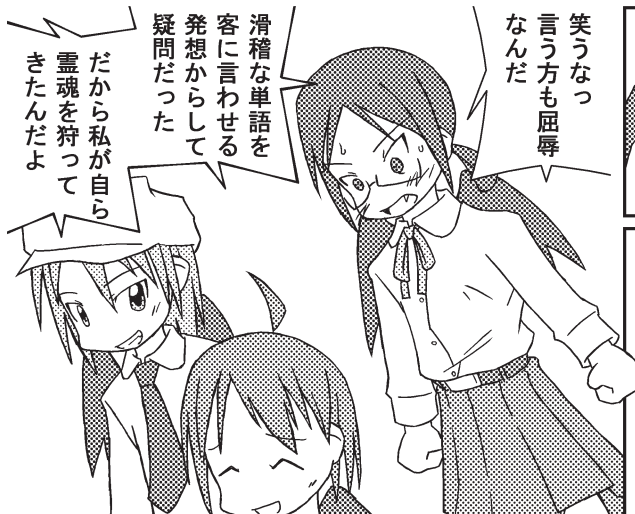
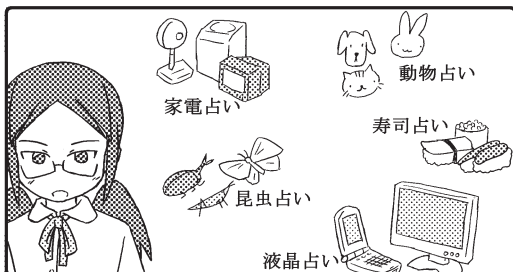
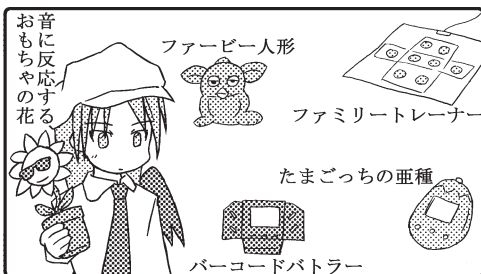
貳千円札

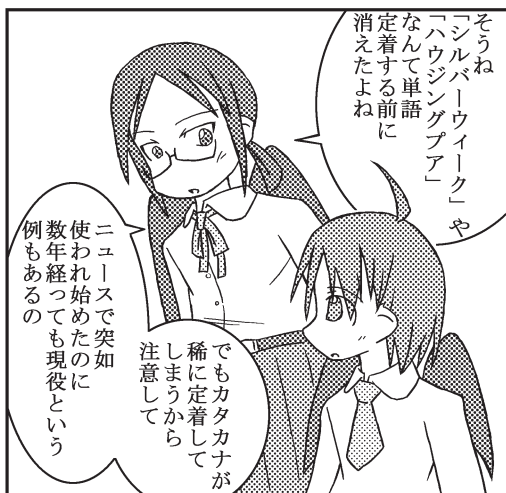
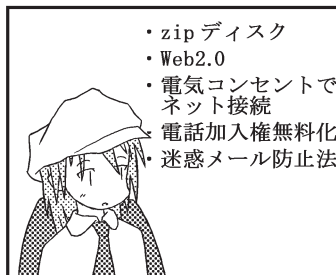


簡単ですよ
下界を見渡せば
死者五人くらい
すぐ集まりました

例えば







珠坂の女神

川鷄鷄肋

4/2 月曜日

ポケットの財布と文庫本を何冊かおさめたリュックだけを荷物に、浮きまくったデザインの無駄に大きい駅ビルを出て。

「変わらないね、ここは」

そんなことを言ってみた。

お約束もお約束の台詞。

十年を経過した今でもこのカラッとした大気の肌触りははつきりと覚えている。

が、この地にまつわる忌まわしい記憶が、心地よかったはずの涼風をねっとりとしたものへと変えていくこうとする。

だからもう一つお約束。

「珠坂よ、私は帰ってきた！」

ぐっと拳に力をこめて叫んでみる。

「よおしっ……はあ」

が、すぐのため息にかわった。

気を抜けばたちまち脳内を埋め尽くすあの光景。増殖するウィルスのように思考へとまとわりつき、妨害し、停止させようとする。

思考の泥沼は浮力に乏しい。多少気合いを入れてみたところでは、気分は浮かび上がらない。

でも立ち止まれば、それこそずぶずぶと沈み込む一方。動かなければ動けなくなる。

動け、動け。

動け！動け！動け！

勢いをつけて辺りを見渡す。

案内板の類はない。

交番もない。

人通りもいかにも少ない。人の出入りの少ない珠坂市の中心は駅前ではないのだ。

そしてこの場所にして携帯圏外。場所がダメかキャリアがダメか。

まいった。

かつて知ったる土地というのにこの不安感。

どこを見ても知らない人々。

やば。また沈む。

あー、ここなら二・三年は停滞とかいうやつ出来ちゃいそうな気もする。

「ナナちゃん？」

「うわー！」

背後からの声に反射的に振り向き、当然のようにバランスを崩した。

ここは結構急角度の階段。しかもデザイン優先で滑りやすい御影石製。段差も大きく、どうなってるのバリアフリー。いやむしろバリアフル状態。

お父さんお母さん先立つ不幸を以下略。

「よっ」

のびてきた手に腕をつかまれたおかげで、爪先との絶妙な三点

バランスで静止。

「ナナちゃんでしょう？」

たすけてくれた栗色ロングヘアのえらい綺麗なお嬢さん（思いっきり元凶でもある）は、お日様のような満面の笑みを浮かべ、そう言った。

「そうです七夏です五ヶ瀬七夏ですその通りです認めます」
半ばヤケでまぐし立てる。

何が何だかわからんが、救いの手を握る事に成功した途端、顔まで漬かっていた沼地から一気に空中へと引き抜かれたような気分。

「やっぱりナナちゃんなんだね。面影あるもん。すぐに分かったよ」

しかし、状況の理解が進むにつれ、とびっきりの美少女に微笑まれているにもかかわらず背筋が凍るような恐怖心が沸き上がってくる。

というか明らかに物理的な危険を感じていますよ。

「認めます、認めますから。どなたか存じませんが早く降ろしてください。いやむしろ怖いですこれ。せめて半端な怪我は勘弁。ダメならダメでいっそひと思いにお願いします」

ガテン系のごついオッサンならここまで怖くないんだらうけど。いかにも華奢なお嬢さんに命を預けるのはちょっと。

「大丈夫、まかせて。私、結構力強いんだから」

この不安定な状況で会話を続けるんだから実にマイペースな人である。

たっぷり二分はバランス状態を保った後、ようやく解放された。

「覚えてない？ 遠野結香です。さおりさんの代理の篤史ちゃん
のさらに代理で来たんだけど」

ちょい待ち。

整理しよう。

サオリさんってのは、海外の学校に通っていたが珠坂で就職した、新川分家のさおり姉さんだろう。アツシちゃんってのは新川本家の篤史兄さんか。

その使いを名乗るという事は、この結香さんという人も関係者なのだろう。

とすれば、この人とも会っても良さそうなもの。

綺麗な人だがいやに親しみやすい、いわゆる癒し系。多分に天然ボケが入っている気もあり。こんな人物はとんと記憶にない。

しかし、さすがに十年も経てば容姿も変わる。現に彼女は七夏の事を知っていたのだし。

あの頃の七夏はほんの子供だった。全てを覚えていたとは限らない。

でもアレだけは忘れられない。いや、忘れてはいけない。

「ナナちゃん？ どしたの？ 行くよー」

「あ、いえ。ちょっと考え事してました」

人の声があると、戻ってこられるのまでが早い。

でも、だからといって考えなくていいわけじゃない。それは七夏が背負っていかねばならないこと。その重みに耐えかねて底なし沼へと引き込まれようとも。

結香と名乗る少女は、フロアライト・コーポなるけったいな名前のついた小綺麗なアパート（別に透明ではない）へと七夏を案内してくれた。

そのまま連れてこられた三号室のダイニングでは、

「悪かったなナナ。今日はどうしても手が離せない用事があつてな」

引き締まった長身・筋肉質の少年が、見覚えのある柄の家庭用ゲームチェーン店の袋を手からから笑った。

全然変わらない。この脳天気な態度は篤史兄さんだ。

「篤史ちゃんに身体は一つしか無いから。そのために私がいるの」と、お茶を入れてくれる結香さんの健気な発言。きつとカノジヨなんだろう。

「ども」

天然っぽいけど、明るくて優しくいい人だな。

上手いこと使われてる感がアリアリだけど。

「ナナは五号室使ってくれ。俺はこれから忙しいけど、荷物の搬入とかはきつとこいつら手伝うから」

女の子に力仕事か。

で、篤史兄さんはゲームやるんだろな、きつと。

「いや、昔住んでた家に戻る予定なんですけど。引っ越し屋が別便で荷物を……」

「あー、さおり姉の指図だから逆らうだけ無駄。あとたぶん御両親も周知」

あのお姉さんって、今は斗流宗家代理なんだっけ。

ここだと学校から近くなるのは都合いいんだけど、一人でやっていける自信はないなあ。

「家事のことなら心配するな。ゆっかの飯は美味いぞ。このアパートのお袋さんだって、さおり姉もお墨付きた」

つまり篤史兄さんもさおりさんも家事しないで結香さんに頼りつきり、と。

って、

「ゆっか？ ゆっか、ユッカ……」

聞き覚えのある音節に、古い記憶が刺激された。

日焼けした顔、ばさばさの髪の毛、半ズボンと剥き出しの足。

ユッカと呼ばれていた年上の子が、確か……

「!?」

「あー、気づいてなかったか。無理もないよな。俺も小学校入るまで男だとばかり思ってたぐらいだし」

たっぷり三十秒は経ってから、ようやく一言絞り出せた。

「……詐欺だ」

僕の知ってる人物と、共通するパーツが全く無いような気もするんですけど。もっと大雑把だったよな。

「いやまったくごもつとも」

篤史兄さんの衝撃発言はさらに続く。

「ちなみに、一号室はさおり姉と詩紀しのり、二号室はさおり姉の荷物置き場、六号室は陸奥十悟兄、七号室は七瀬姉妹、九号室は宮藤姉妹だ」

どくん。

耳から飛び込んできた単語をきっかけに、あの光景がフラッシュバックする。

「なな、せ？」

そんなことはあり得ない。

七瀬の双子がこんな所にいるはずがない。

「とっても可愛くなったよ。撫菜ちゃんと鈴菜ちゃん」
あり得ないはずだ。

あの光景を見た者ならそう思って当然だろう。

「誰か一緒に住んでるんですか？」

「いや、二人っきりだよ」

そんな。どうやって？

「さおり姉や俺たちと共同生活に近いけど。ここは事実上の学園寮だしな」

「うそだっ！」

強い口調に驚いたか、篤史兄さんが苦笑する。

「おいおいどの竜宮さんだ。ナナに嘘ついて俺に何の得があるよ」

「いや、そういう意味じゃないけど、でも」

本当なら、どんなにか嬉しいことか。

そんな夢を何度見た事か。何度目覚めてから泣いたことか。
そしてきつとまた。

「でも、そんな」

乱暴にドアを開く音が、空転する思考を遮った。

「たっだいまぁ！」

続いて、自己の存在を宣言するかのようなソプラノが高らかに響き渡った。

何かに突き動かされるように玄関へと急ぐ。

買い物袋をさげた二人の姿。

「ただいま」

その片割れの口から、いかにもローテンションな声で先程と同じ台詞が紡ぎ出された。

一目で分かった。

でも直に見たところで信じられる光景じゃない。

記憶と現実との不整合に折り合いをつけるためにはある程度の時間が必要だった。

具体的にはただただ放心。

「おーい、ナナ？」

「大丈夫？」

篤史兄さんと結香さんの二人がかりで肩を揺すられ、ようやく我にかえることができた。

後から聞いたところによると、復活まで三分かかったような。

なぜなら七夏の中では二人の時間はあの光景のまま止まっていたから。

だからきつと、夢の二人はいつも小さな少女のままだった。

でも目の前に立つ少女達は、小さく華奢な方とはいええ中学三年という年齢相応の姿。

頭の両側でくくった、色素の薄いふわふわの猫っ毛。

砂糖菓子のような、フランス人形のような、甘やかさと繊細さと愛らしさ。

子供では持ち合わせぬ華やかさを身につけた二人の姿は、七夏の貧弱な想像力などほるかに超えた現実感をもって、これが真実であると訴えかけてきていた。

「おー！　すごくナナちゃんっぽい！　ナナちゃんでしょうね？」

「なるほど」

瓜二つ。だが間違いようのない二人。

ペンギン柄の可愛らしい眼帯をつけてる無愛想な方が撫菜だとすれば。きゃらきゃら明るく笑っている方が鈴菜って事になる。

こんな事があるんだ。

目の前で起こったあの事故からすれば、奇跡としか思えない光景。

医学的にどうだったのかまでは知るよしもなかったけど。虫や小動物の命をいくつか見送ってきた子供のわずかな経験からは、あの時点で二人は終わっていたはずだった。

それきり彼女たちと会うことは出来なかったが。悪ければあのまま命を落とし、よくても一生涯厳重介護下は間違いないと信じていた。

しかし今、鈴菜は立って歩いているし、撫菜はちゃんと僕の目を見て会話している。

「わ」「きゃ」

双子に歩み寄り、一度に抱きしめる。

買い物袋が落ちた。

撫菜と鈴菜の、身体を、実体を感じる。幻覚でも幽霊でもない。

二人をすぐった現代の医学に。いや、神でも悪魔でも。僕から送れる最高の感謝を。

「泣いてる」

「そんなにも私たちに会いたかったんか。うむうむ、愛い奴め」
どちらの反応も七夏の予想外。つまりは現実だ。

「ごめん、ごめん、ごめん」

「うわ、泣き虫だね、ナナちゃんは」

「ごめん、撫菜。ごめん、鈴菜」

「あいたた。イタ、痛い！ 痛いってば！」

「あうち、あうち」

「あ、ごめん」

意外なぐらい強い力で、僕の両腕はふりほどかれた。

「や・り・す・ぎ！」

鈴菜は両腕を腰に当ててぶんむくれる。

「ナナさん、あたしら抱き潰す気ですかい？」

「ごめん」

「なぜナナはそんなに謝るの？」

ハイテンションな鈴菜とは対照的に平静に尋ねてくる撫菜。その眼帯がどうしても目に入ってしまう。

あの事故が幻ではなく、現実の出来事であったという、今となつてはただ一つの確かな証拠。

「……君らを苦しめたのは僕だし」

「ナナに謝られる筋合いはないから」

「謝らせてもくれないっていうのか。」

「ご、ごめ……ごめ……くっ」

「こりゃ、ペンペン」

鈴菜は姉のおでこをべちん。とはいたした。

「あうち」

「泣くなナナ。おねいちは言葉足らずだ。気に病むなって言ってるの」

なでりなでり。

鈴菜の言葉に応えるように、撫菜は無表情で僕の頭を撫でた。
「でも」

女の子の顔に一生モノの傷。あの右目もきつと。

例え二人が許してくれても、僕は自分を許せない。

「……もう二度と無いと思っていたはずのチャンスが得られたんだから……少しでも借りを返させてよ」

「期待しないで待つてゐるナリよ」

「はげどう」

「ありがとう！」

「あうち」

「痛いっつーの！」

思わず抱きついた直後、鈴菜の蹴りに吹き飛ばされた。

鈴菜の怒り顔が、撫菜の無表情が、ちょっとだけ嬉しそうに見えた気がしたのは、気のせいではないと思いたい。

「もしもし、感動の再会はそのぐらいでいいか？」

と、ごく遠慮がちに篤史兄さんが言った。

「あ、すいません」

他人の家の玄関先でとんだ愁嘆場を演じてしまった。恥ずかしい。

「いや、俺は面白いんだがな。せっかく淹れた茶が冷えそうだったゆっかが気を揉んでる」

篤史兄さんが親指で示した背後では、お盆を手にした結香さんがそわそわしている。ああいうところ、見た目にすぐわす子供っぽい。

「しっつれいしやしたー」

鈴菜がびしっと敬礼。撫菜も無言で同じポーズ。

「おう、問題ない」

篤史兄さんが、すばっと答礼。

「んじゃモノはナナの部屋に運んどいてくれ」

「おっけーっす」

「（くくくく）」 by 撫菜

双子は篤史兄さんの投げた鍵を受け取ると、買い物袋を拾って二号室を出ていった。

「はあ」

自然にため息が出た。

「ぐったりしてんな。気が抜けたか？」

「ええ」

感情の振れ幅が大きくて、今になってどっと疲れが出てきた気分。

そう、疲れると言えば。

「あの子達やたら荷物持ってましたけど、何買いに行ってたんですか？」

「ナナの生活用品」

「は？」

「時計とかタオルとか歯ブラシとかだな。あとブリーフ派だって聞いているけど、それで良かったろ？」

「ぎゃーす！」

三十分ばかり後に三号室を訪れた新たな二人は、並んで深々と腰を折った。

「宮藤初、遅参いたしました」

「同じく宮藤終、ここに」

よほど急いできたものと見え二人とも肩で息をしているが、あ

くまでもボーカリエイスを崩さない。

こちらも見ると双子。とは言っても、まだまだ子供っぽい七瀬姉妹とは雰囲気は全く違う。

紫城高の制服である焦げ茶一色のブレザーはいかにも地味で時にチャパネ呼ばわりされたりもするが、すらりとした長身で出るところが出てくる二人が着ればシンプルで格好良く見えるから不思議なものだ。

二人ともストレートのロングヘアをサイドポニーテールにまとめているのだが、初さんは右側で終さんは左側。しかも片手にだけ嵌めた革手袋が初さんは左手で終さんは右手というのが面白い（昔聞いた話だと火傷の痕とかがあるらしいけど、でもきっちりオシャレに見える）。まさに鏡写し。見事なまでのシンメトリー。

いかにも瓜二つな一卵性双生児というのに、まず間違えようがないという点では七瀬姉妹と同じだ。

「申し訳ございません、篤史様」

「お待ちになりましたでしょう」

「ううん、私も今きたところだから」

と、篤史兄さん。

ここ篤史さんの自宅なんだけどね。ていうか、それむしろ女の子の台詞。

「いいからほら、入れ入れ」

「それには及びません。すぐに準備いたしますので。わずかとはいえ主筋をお待たせするなど許されません」

「この埋め合わせはいつか必ず」

とことん真面目にできているのだろう。お姉さん達はギャグとはとらえなかったようだ。

「構うなって。で、こっちが問題のナナ」

いや、別に問題ありませんから。

とは言えない。

「五ヶ瀬です。初さん、終さん、これからよろしく」

「ご無沙汰しております、七夏様」

年下の僕にまでおそろしく丁寧な初さん。

「ますますお綺麗になられましたね」

終さんも目を細めて微笑むが……

そこは、立派になって、と言って欲しかったところで。

どうせ女顔ですよ。青白いですよ。筋肉ありませんよ。

とも言えない。

「あはははは」

曖昧に笑ってごまかす。

我ながら弱い。自覚はあるけど弱気だけはどうしようもないのだ。

わずか三分後。再び三号室に戻ってきた宮藤の双子は、同じワインレッドの、肩の出た膝上丈ワンピースを身にまとっていた。

このお姉さん達は昔から大人っぽかった。ただでさえ制服着てないと高校生にはまず見えないつてのに、それがこんな格好すればそりゃもう色っぽいのなんの。

それが並んで二人。目の毒です。はい。

「おいおい、たかがカラオケ、普段着で十分だろう？」

篤史兄さんの即座ツツコミ。ごもつとも。

さすがに薄手のワンピースだとまだ肌寒いと思うのだが。

「正式の宴だと聞き及んでおりましたので、相応しい装いと思

いまして」

「正式？」

「はい。陸奥先生は、カラオケの盛装はミニスカートと決まってる」と

「言ってた言ってた」

「(くくくく)」

七瀬の双子もお揃いの出で立ち。白のブラウスにチェックの吊りスカート。

当然のようにミニ丈だが、この子達ならカワイイですむ。

「……また十倍^{ちうばい}さんの仕業かよ」

篤史兄さんはでっかいため息一発。

「授業中以外の陸奥先生の発言は一切信じちゃダメですよ」

結香さんも優しい顔して結構きついな。

ちなみに結香さんは同じく白のブラウスに、胸当てのついた黒のスカート（サロペットスカートとかいうやつ）。に、同色のベレー帽。一見フェミニンだが足下がスニーカーだったりして微妙に活動的。

しかし、陸奥のジュウ兄さんは紫城の先生になってたんだ。

ジュウ兄さんは歳の離れた遊び仲間の一人で、あの頃はひとつと背の高い、本ばかり読んでいる飄々とした感じの少年だった。

そのイメージと、皆の会話から想像される陸奥先生像とがいま一つ結びつかない。

まあ、遅くても明日には会えるんだろうけど。

とりあえずの面子が揃ったとのことなので、篤史兄さん主導で商店街のカラオケボックスへと移動の運びとなった。

そう広くもない町でいい感じの快晴もあり、学生らしく健全に徒歩となったのだが。

うーむ。

あまり敏感な方じゃない事を自認する僕でさえ、そこから視線を感じて落ち着かないことこの上ない。

それは無理もない事なのだが。

個性薄めだがえらく綺麗な由香さんは言うに及ばず。

可愛らしいのが一組と色っぽいのが一組で、双子の美少女が都合二組。

そして先頭では、長身イケメン筋肉質の篤史兄さんが周囲を圧倒するような存在感を示している（半袖Tシャツに綿パンという無茶苦茶ラフな格好が寒々しく見えてるせいもあるだろうが）。

一団の最後尾を、目立たないようにこそそこそと追いかける。それでもたじろぐほどの視線を浴びているというのに、篤史さんやお嬢さん連は平然としたものだ。注目されることに慣れているのか、それとも神経の構造が違うのか。

「すげー、女の子あんなに引き連れてるぜ」

聞こえてる聞こえてる。

「俺、最後尾の子が好みだな」

「恥ずかしそうにしてて可愛いじゃん」

どうせそんなことだろうと。

「ナナ、そのカッコむしろ逆効果だ。ボーイッシュな女の子にしか見えないぞ」

篤史兄さんは大爆笑。

「なんで!？」

パーカーにジーンズなんです。

「身体を鍛えなくっちゃな」

結局それか……分かつちやいるんだけど。

連れてこられたのは、城をモチーフにした立派な建物のカラオケボックスだった。

建物の周りには空に向かってライトが多数備えられている。夜はさぞかし派手にライトアップするのだろうが、どうにも締まらない。

昼のカラオケボックスってやつにはどうも違和感というか場末感を感じてしまうが、中に入ってしまうとそうでもないのが不思議だ。

「11号室でお連れがお待ちです」

アルバイトっぽい店員のお兄ちゃんは冷静を装っていたが、頬の紅潮は隠せない。

そのときは結香さん&ツインズズの威力だとばかり思っていたが。

「おー、場所取りご苦労」

11号室の先客は、たった一人で僕ら全員分ぐらいの強烈なインパクトを放っていた。

虚空を見つめていた瞳がすすところらへ向く。

精緻な彫刻を思わせる、一分の隙もない硬質の美貌。

超ロングお姫様カットの下銀髪はボックスの薄暗がりの中でなおキラキラと自己主張し、深い紫の瞳・同色のワンピースと強烈

なコントラストを放っている。

こうなると面影がうんぬんいうレベルではない。こんなあり得ない色合いの人物といえば記憶の中でただ一人。

「やつはーしのりん」「(ぺこり)」

「こんにちは、詩紀様」「本日はよろしくお願ひいたします」

その人物は双子二組に会釈を返しておいて、

「場所取り? 部屋を借りるのには必要ないでしょう?」
と真顔で言った。

新川詩紀嬢。僕と同じ年の、篤史兄さんの妹。

一卵性双生児二組に続いて、今度は全然似てない兄妹が揃ったわけだ。

性別や年齢、目や髪の色が少々(?)違っていたところで、家族には大抵どこか似た雰囲気があるものだが、

「飲み物も注文せずにはただ座ってたんじゃない場所取りと同じだろ」

「外界から遮断された静かな環境を堪能していたの。余計なことを考えずに居られる場所は希少だから」

二人は兄妹といっても血の繋がりがなければかりか、離れて暮らしていた期間も長いとかで、見た目にも行動パターンにも共通点らしい共通点がない。

それでも。

優れているとか劣っているとかではなく、方向性が異なる強い個性を持って並び立っているという点で、二人は確かに兄妹であった。

たとえば二人とも人目を強く惹き付ける優れた容姿の持ち主であるが、篤史兄さんはいわば「ブロンズ像」、詩紀嬢は「氷の結晶」。

獣に例えるなら「獅子」と「鮫」。刃物に例えるなら「鉈」と「剃

刀」。

それらを似ていると言っているのなら、詩紀嬢は篤史兄さんとも結香さんとも同じぐらい似ているとも言える。

この言い方で結香さんを例えて言うところかな。「ドライフラワー」「パンド」。「独逸製高級ハサミ」ってところかな。自分で言っていてわけわからないが、そういう印象を受けるんだから仕方がない。

ともあれ、詩紀嬢の愛想不足&ちょっとズレた感性はあの頃と変わっていないようだった。

「歌っていればよかったのに」

言わずもがなの事をいう結香さん。

「一人で？」

「一人で♡」

案の定というか、詩紀嬢は、はあ、と聞こえよがしにため息をついてみせた。

「この期に及んで何て迂闊な」

「ああ、その辺は自覚してる。俺ら鈍いし」

「だから難しいことはのりちゃんにお任せなんだよ」

「……お二人の息がピッタリで嬉しいです」

皮肉。そしてまたため息。

「ソロあるいはデュエットまで。合唱禁止。私は決して歌わない。

以上の条件で手を打ちましょう」

「なに、しのりんで音痴？ ねえねえ」

「そーいや詩紀の歌、聞いたことないぞ」

食いつく鈴菜。煽る篤史兄さん。

「去年一度聴いたかな。そうそう、あのときはいきなり窓ガラスが割れちゃって、びっくりしたよ」

そして端的に語る結香さん。

誹謗のつもりは、無いんだろうな。きつと。

「うお、まじジャイアンかつ？ ジャイアンなのかつ!!」

鈴菜の命知らずっぷりも立派なもの。僕にはとても無理ですはい。

「確かオザキ唄ってたよね」

それでガラスか。

確かに詩紀嬢は昔つかからそういう偶然を呼ぶタイプだったが、それを理由に歌いたくないとまで言い出すとはちょっと驚いた。まあ、ごらんの通り態度は偉そうだが、見た目相応に繊細なところもあるってことだ。

それにしてもオザキねえ。実は意外と荒んでるんだろうか。

と、ついつい笑ってしまったところで、詩紀嬢と目が合う。

背筋を冷感が走りぬける。

やば。

彼女の視線にこもった迫力は肉食生物同然。しかも獣ではなく、魚類や昆虫のようなハンティングマシーンじみたそれ。

「や、やあ」

相手を知らなければ殺気と勘違いしかねない圧迫感だが、彼女に害意はない……と思う。

思いたい。

思うしかないのだ。

彼女が何考えてるのか全然まるつきり分からない。昔から基本的には落ち着いた少女だったが、表面的な感情の振幅がさらに一層小さくなってしまった感がある。明るさとかわかりやすさとかいう成分が、彼女の中から綺麗さっぱり欠落してしまったようだ。

撫菜とかも確かにわかりにくいけど、猫の気持ち仕草にあらわれるように、何となく通じ合うモノはあるんだよね。

「お帰りなさい、ナナ」

「……ただいま」

詩紀の口から意味のある言葉が紡ぎ出された瞬間、彼女の表情もわずかにほころんだように見えた。感じていた圧迫感が霧散する。

あるいは七夏の錯覚なのかもしれないが……他愛ない会話の最中、大人びた冷たさを帯びた詩紀が年齢相応な隙、子供らしさや人間らしさを見せる瞬間がある。それは子供時代も今も変わらないように、どこかホッとさせられた。

彼女は本来とても優しく繊細なのだ（と信じた）が、表だって示そうとしないゆえそれはひどくわかりにくい。

だからこそ一置かれ、崇拜される事はあっても友人としてつきあおうとする者は多くなかったし、現在も同様であろう事は想像に難くない。何しろ、失われた愛想と磨きの掛かった美貌がさらに近付きがたさを増幅しているのだから。

ここに集まった幼なじみ達はその辺については十分理解しているから、彼女と距離を置いたりはいらない。

歌うつもりもないってのに歓迎カラオケパーティーに来てくれたってのは、この集団にそれなりの親近感、あるいは居心地の良さを感じてくれてるのかな。と、希望混じりに考えてみたりもするわけだ。

「盛り上がっていると申し訳ありませんが、何を注文いたしましたしょうか？」

会話の途切れるタイミングを見計らっていたのだろう。内線電話を手にした初さんが、絶妙のタイミングで軽食のメニューを差し出してきた。

対する終さんはというと、バッグからおもむろにウェットティッシュを取り出すと、テーブルやマイク・リモコン類の清掃作業に入っている。

てきぱきという擬音が聞こえてきそうな手際の良さ。

この人達、気が利くというか、利き過ぎというか。

大人っぽい雰囲気もあいまって、同じ高校生というよりまるで僕らの秘書といった雰囲気だ。

年上の何でもできる人たちが僕らより一歩も二歩もひいた立場に甘んじているというのはどうにも不思議だが、思い出してみれば子供の頃から僕らに対しては遠慮がちだった気がする。

僕にとっては正直どうでもいいけど、うちの親戚達みたいに何百年も前の家の力関係とか格とかいいうのを引っ張ってるんだろうな。外様側からは尚更なのかもしれない。

「俺の歌を聴けえ！」

「かしこまりました」

「拝聴させていただきます」

カラオケのトップバッターは篤史兄さん。

宮藤姉妹の反応はある意味真っ当なものだが、微妙に盛り下がった気がする。

「……ほんじゃ、歌うわ」

意外にもと言ってはなんだが。渋い低音からよく通る高音までばっちり、歌唱力は相当のもの。

マイクを手に斜に構え、足でリズムをとる立ち姿もアイドル顔負けに決まっている。

歌ってるのが古い特撮でなければの話だけど。

ちなみに古いといっても僕らの子供時代ってわけじゃなく、映像の雰囲気からはおおかた数十年は経ってるだろう。

大鉄人とか小さな超人とか、全然しらないのもあれば、見覚えがある蜘蛛男だと思ったらなんか古くさかったり。

僕的にはあきれかえるしかないのだが。結香さんは完璧についていってる様子。さすがは篤史兄さんのカノジョ。

鈴菜は曲にあわせてエンドレスで踊りまくってる。体力あるなあ。

撫菜は最初は部屋のあちこちを子細に観察していたが、一通り調べ終わってからは曲カタログを一ページ目から順番に読んでいく。一見退屈そうだが、密かに靴を鳴らしているところを見ると、少なくとも音楽を楽しんではいるのだろう。

邪魔にならず、かつ、歌をちゃんと聴いていることをアピールするような絶妙な手拍子と合いの手は宮藤姉妹によるものだ。微笑みながらも彼女たちの目は真剣で、楽しみつつもどこか仕事をこなしているような印象がある。こういうところ、つくづく生真面目というか裏方志向のお姉さん達だと思う。

詩紀嬢はいええ。

ソフトに言うなら、目を閉じてじっと瞑想にふけている。歯に衣着せず言えばまるで息をするマネキンといった具合。意識して周囲との関わり合いを断ち、感情を抱くことさえ拒んでいるようにさえ感じられる。

そうは見えても少しぐらいいは楽しんでくれているはず。僕は信

じる事にしていたのだが。

しかし見てしまった。見えてしまった。

視線を感じたのか掻き上げた髪の間からのぞいた可愛らしい耳には、黄色い耳栓。

……やっぱり義理で参加してるだけかな。

「よし、アレだ、ペンペン」

鈴菜が動いた。

「ん」

カルタ取りもかくやという早業でリモコンをゲットするや、マシンガンじみた目にもとまらぬ指捌きで曲番を打ち込む。続いて撫菜からマイクを受け取り、一瞬でデュエットの体勢に。

思考パターンはいかにも違うのに、さすがは双子といったところか。ちゃんと通じ合ってるようで意思統一が早い。

流れ始めたのは映画のサウンドトラックを彷彿とさせるぶ厚いオケのイントロ。

しかしモニターに映る絵面はおもいきりアニメだった。

みんな同じじゃなくいい だけど通じ合いたいから
みつkeyよう さがしだそう みんなの心を閉ざすもの
フタがあったらはずしたい 鍵があったらこわしたい
ハートの檻を解き放て Open Their Mind! チカリカ!

七瀬の双子も上手いなあ。

非対称のややこしい振りと同時に、メインとサブが複雑に入れ替わる複雑な掛け合いを完璧にこなしている。

きつと相当歌い込んでいるんだろう。

しかし、これは……

もとめよう 広げよう みんなの心は一続き

生け垣なんて丸坊主 高い塀でも大爆破

ハートの境取り払え Open Their Heart! チカリカ!

ノリノリだけど凄い歌詞。

モニター上では二人のツインテール少女がモンスターの群れを蹴散らしている。

一人の得物は巨大な釘抜き、もう一人はばかでかい電動ドリル。

次々にシルエットとなって爆発、滅びていくモンスター達（察するに露骨に描写するに忍びなかったんだろう）。

ひっぱがせ 破りとれ みんなの心は丸裸

重い鎖もひきちぎり 鋼の壁も叩き割り

ハートに開ける風穴を Open Their Brain! チカリカ!

「凄いですね、これ。いろんな意味で」

「だろ?」

なんで篤史兄さんが威張るのだろう。偉そうな似合ってるのは否定しないけど。

「子供向けのアニメなんですよね??」

そうは思えない要素がずいぶん多い気が。

「大きなお友達にも大人気だぞ。子供向けには複雑すぎる話とか、分かる人にはわかる古典を下敷きにした高度なネタも多いし

な」

そういう意味じゃなくて。

「いや、理解できるとかじゃなくて、教育的にどうかと言ってるんですが」

「暴力的私的制裁を牧歌的な擬人化のオペラートにくるんで文部科学省推薦とかもらってるような偽善アニメを基準にするなよ。

殴った方も痛いし、ちゃんと血も飛び散るし、特別な理由がかければ次の回に怪我が治ったりもしない。ダメージ表現も医学的に正確を期してる、ってこれはさおり姉の弁だけだな」

つまり、非リアル系のきゃらきゃらした絵柄でそういう生々しいのをやってると。

「それに心情描写も相当深いぞ」

「そんなのゴールデンで放送してるんですか?」

「いや、深夜だよ」

「子供みれないじゃないですか」

「これだけ録画が発達してるのに、放送時間なんて意味無いだろ」

「ターゲット年齢層がビデオ使いこなすとは思えません」

つまり、事実上は完全なオタク向け番組なわけね。

「さすが七夏、なかなか素質あるな。熱い語りが期待できそうだな」

何をでしょうか。

「うちにボックスがあるぞ。続編『チカリカ5』のブルーレイも4巻まで入手済みだし、録画も欠かしてない。明日はマラソン上映会決定だな」

「炭酸とポテチだね」

篤史兄さんの宣言に、結香さんは相変わらずのツーカーぶりだった。

その後七瀬姉妹はアニソンを乱発、宮藤姉妹は女性デュオの有名曲を一通り押さえた（選曲も含め、上手いのは上手いが、むしろ危なげなさの方が強く感じられたのがいかにも彼女たちらしい）。

僕も何曲か披露させられ、

「七夏は言葉に情感をこめるのだけは上手い」（篤史兄さん）とか

「光景が目には浮かびます」（初さん）とか

肯定的だか否定的かわからないコメントをもらった。

そして詩紀嬢はいえ、宣言通りついに最後までマイクを手にすることはなかった。

さて、これは十悟兄さんから後に聞かされた話だが。

僕らがカラオケに盛り上がって（一部を除く）いた頃、市庁舎の一室で別の集まりがもたれていたのだそうだ。

とはいっても、人数もずっと多く、出席者の年齢もずっと高い。

なぜか中でも最も若い人物が一番上座の椅子に掛けており、またその脇に立っていた。ボブカットにオシャレメガネ・パンツルックの女性が新川さおり、脇に控えるひょうりとした長身に丸めがねのヌーボーとした若者が陸奥十悟。すなわち、篤史兄さんや詩紀嬢の姉であるさおり姉さん、そして僕らの幼なじみである十悟兄さんだった。

五ヶ瀬分家男A「その七夏君の姿が見えないようだ」

十悟「ああ、彼なら歓迎会っすよ。年の近い幼なじみ達が企画し

たんだそうで」

五ヶ瀬分家男A「はあ？ 七家会議をさしおいてまでの用かね？」

古老・重鎮達が居並ぶ中。十悟は若輩としては無礼とさえ言える態度を続けつつ、それを咎めようとする空気をすいすいと受け流している。

十悟「十家会議っすよ、今は八家でも」

二百年をおいても新参扱いされ続けている宮藤の当主が、予想外の援護射撃に頭を下げた。

陸奥分家男「遠野もすでに滅びた。やはり七家でよからうよ、本家の坊」

陸奥分家筋の男が苦々しげに言った。

十家の末席であった遠野家の最後の一人はこの場に呼ばれていない。

十悟「俺の教え子を見殺ししないでくださいよ、おじさん」

男は嫌悪感をこらえきれぬ様子で、ふん、と鼻を鳴らす。

陸奥分家男「人ですらないあんなモノを十家とは認められんよ」

十悟「俺もさおりも似たようなもんだ。血が出なかった。あんたは只人かもしれないけどな」

十悟は意識して口調を崩し、露骨に挑発する態度をとる。

陸奥分家男「何だと？」

そのとき、沈黙を守っていたさおりがようやく口を開いた。陸奥家内での小競り合いを完全に無視して、強引に話題を戻した形だ。

さおり「七夏君を珠坂に呼んだのは『両親が長期出張中の彼に一人暮らしをさせておくのは忍びなかったから』でしたわね、確か。ご両親の意志に反して未成年に五ヶ瀬家の看板を背負わせるわけ

にもいかないでしょう」

裏から手を回してその長期出張を仕組んだのもここにいる誰かなのだろうか。

五ヶ瀬分家男B「とは言ってもなあ。彼は」

十悟「何も知らないうちに珠坂を離れたんだ。彼にとってここは、ただの懐かしい故郷でしかないんすよ」

五ヶ瀬分家男A「ではなおさらだ。多大な犠牲と引き替えに、血の出る“榮譽に与りながら、何も知らずにのうのうと過ぐすなど”というのは、我ら斗流全体に対する裏切り行為とは言えないか。何なら儂があの小僧に自分の立場というものを……」

本音を口に出しかけた古老の一人が、さおりの一瞥で口をつぐまされる。

第一位新川家の当主という立場や家の格からくる発言力だけで黙らせたのではない。

新川家は前々当主時代に序列二位の仁藤家からその地位を禅譲されており、八葉・宮藤・遠野と比べてもさらに新参の家だ。表向きの序列はともかく、このような場では旧家の重鎮達には軽んじられてもおかしくない立場と言えるし、前々当主引退後の前当主（篤史の父親）の時代には実際そうであった。

しかし、現在さおりが斗流宗家代行をつとめているのは純粹に実力によるものだ。

かつて米国学時代「ハートの女王」の異名をとった彼女がその気になれば、屋敷の広間に詰める五十人弱を一人で斬り伏せられるだろう。“血が出なかった”故に健在で勢力争いにうつつを抜かしていられるような彼らでは、“血の出た”本物の斗流継承者にならうべくもない。

しかも斗流に与えられた『ライセンス』は内部の肅正についても機能するものであるから、要するに生殺与奪は彼女の気分次第なわけである。

たちまちすくみ上がる老人達を見て、十悟は肩をすくめてみせる。実際には彼女ほど理性的な人間もそうはいないので、無闇に恐れても仕方ないのだが……さおりの化け物っぷりを理解しつつ、しっかりと疎まれるような真似をするような連中の感性は理解できない。

七瀬家古老「まあまあ、五ヶ瀬さんのお気持ちはありがたいが、抑えてくだされ」

ややあって、別の方向から取りなしが入った。柔和な顔の老人である。

七瀬家古老「あれは誰を責めることもできん不幸な事故だった。幸いうちの曾孫達は命はとりとめてくれたし、不幸中の幸いか、血も出て“くれた”」

さおりは一見落ち着いた表情を崩さないが、幼なじみの目が笑っていない事に気づいた十悟は思わず身震いする。他の誰も気づいていないが、さおりは猛烈に機嫌を損ねているようだった。

七瀬家古老「時に、七夏くんもそろそろいい歳じゃないかね？」

さおり「とおっしゃいますと？」

七瀬家女A「いやですわね、結婚ですよ、結婚」

七夏は当年とって十七才である。

さおり「……いかに我々でも学校に通ってしまっている人間の年齢まではごまかせませんが。関係者全員消すにもちょっと数が多すぎませんか」

発言内容が洒落になっていない。これはやはり相当怒っている。

七瀬家古老「いや何もすぐには。ほれ、篤史くんと同じですわい」

あわてずあわてず、と老人は両掌をあげた。

七瀬家古老「七夏くんからしてみれば、言葉は悪いがうちの曾孫達を傷物にして、両親まで奪ってしまった事になるわけだし、きつと責任を感じておるじやろう。どちらか一人引き受けていただけという約束だけでもできれば、彼の気も少しでも晴れるかもしれないし、このじじいも安心してお迎えを待てるのじゃが」

言葉は柔らかいが脅迫意外の何者でもない。

五ヶ瀬家一同がざわつく。

……このじいさん絶対百才まで生き残るタイプだ。この場でさおりに首刎ねられなければ。

十悟は落雷を恐れるかのように長身を縮こまらせ、おそろのおそろの表情をうかがった。

しかし、さおりはむしろ上機嫌そうに笑っていたし、その返答は意外なものだった。

さおり「篤史ちゃんは責任のために彼女と一緒にいる訳じゃありませんし、ペンペンやリンリンにもいつかそいうい相手が見つかりますよ」

七瀬家古老「じじいの目から見ると、あれらも七夏くんを憎からず思っていると思いますのう」

さおり「そういった好感なら私も十分抱えていますよ。ただ、結婚相手となると七夏くんは詩紀ちゃんの子約済みらしいですから」

ファッショングラスの奥の目が、子供のような悪戯っぽい笑みを見せる。

宗家の資格を持つ詩紀（現在はさおりが代行）の婚約に関する

突然の発表である。自分で振ったのだから責任を果たしたのみとはいえ、当然のように大混乱となった会議を一喝でおさめてのけたのは、流石さおりというところであった。

つきあいの長い十悟とはいえ、さおりの真意を量りかねることも多い。考えるだけ無駄なのだから大抵は聞き流すのだが、さすがにこれは捨て置けず、会議がハケてから個人的に質問してみた。さおり「推理よ推理。七夏くんが告ってる可能性、八割はくだらないと思うし、詩紀ちゃんが断る可能性はほとんど無いから」

十悟の目から見ても幼い頃の七夏が詩紀をお気に入りだったのは確かだし、詩紀は自分自身にも他人にもとんと興味を示さないが、七夏相手の時だけは比較的愛想があった（ように見えた）。あり得る話だった。

十悟「って言ってもな、お前。公式の場でぶっぱなして、後で違ってたら冗談ですまないだろうに」

さおり「あの頃とは違う。選択はなされるわ。ちゃんと成長してると、善悪の基準も好悪の感情も学んでる。あとはヒトとしての自分との折り合いの付け方だけ」

十悟「はあ？」

さおりは眉をひそめた。意外につぶらな瞳にはあきれたような色がある。

さおり「あきれた。鈍い鈍いとは思ってたけど。この期に及んでまだ気づいてなかったの？」

十悟「何のことだよ」

この女、核心の周りをくるくる回るような説明しかせずに相手の困惑を楽しむようなところがある。十悟がむっとしたのも無理

なからう。

さおり「望みは現実となるのよ。きまぐれな女神のお眼鏡にさえかなえば」

そう言って、さおりは意味ありげに笑った。

さおり「だってここは珠坂なんだから」

4/3 火曜日

三号室の洋間の一つはシアター化していた。

壁の一面はびっしりとDVDが埋め尽くしている。

僕と篤史兄さん・結香さんの三人は、六畳一間で大型テレビと大型スピーカー六本に囲まれ、アニメ鑑賞会の真っ最中であつた。

朝食をお呼ばれしたらそのままとつかまつてしまい、昨日の篤史兄さんの宣言通りこの部屋に引っ張り込まれたのだ。

「正確には『指定侵入少女チカリカ』。医師の資格を持つ新進気鋭の天才亀丸監督が弱小アニメスタジオ『AMIG』を率いて生み出した奇跡のオリジナル作品、テレビアニメ界に打ち立てた金字塔だ。作画のクオリティーは当然として、動画枚数の割に緩急のある動きや、芸術のレベルに達した塗りや背景、異常なまでの音声の作り込みと、尋常でないこだわりの塊だ。完全プレスコつて事も含めると、スタッフの手間という観点においては劇場版並みの努力が払われていると考えていいだろう。すなわち、これは制作に関わった者すべての魂の結晶。心して鑑賞するように」

「は、はあ」

「俺たちこつち寄るから、ナナはしっかりセンターに座れよ。そ

の方が音像がおちつくだろう」

落ち着けと言われましても。

結香さんは篤史兄さんの足の間に移動して体育座り。小さな子供が父親の膝に抱かれるような具合だ。

「ふふふ」

「ご機嫌だな、ゆっか」

座る場所が足りないのは確かだし、二人にとっては特別なことではないんだろうけど。ねえ。年頃の男女が人目はばからず密着されちゃこつちがいたたまれない。

と思いきや。

「えへへ」

長い長いログラッシュの間、音楽に合わせてゆらゆらと揺れる結香さんの頭を、篤史兄さんがぐりぐりと撫で続けている。

二人の様子はむつみ合う恋人同士というよりは、まるで小さな少女が大好きな兄にじゃれついているかのよう。色っぽい雰囲気なんてまるで無い。僕が七瀬姉妹に飛びつかれるのと同じようなもの。

なにしろ結香さんの態度や仕草は見た目よりはるかに子供っぽいし、篤史兄さんと一緒の時には特に極端だ。彼女の中身は記憶の中にある男の子じみた少女と大差ないのかもしれない。

ああ、この雰囲気はゆっかと篤史兄さんだ。と納得できてしまった。

こうなると、子供時代とは大きく変わった人間関係にどこか身構えていた自分に気づいてしまい、ばかばかしくなってくる。

「ほら見ろ。いきなりチカリカの変身・戦闘シーンから始まるってのには度肝抜かれた。説明とか後回しで全開バリバリだ」

篤史兄さんもうこういうところ変わらないな。

千佳穂『皆の願いをこの身に受けて、人の手助け当てにせず』
理佳穂『頼れる者がいないのなら、自分でやるが少女の意気地』

二人『「Let's do it ourselves!」』

指を鳴らす彼女たちに応え、虚空を割って出現する巨大な工具箱二つ。

招き入れるように開く工具箱の中へと飛び込む二人。

少女達を取り込んだ工具箱はそのまま宙に舞い上がると、怪物達のただ中へと落下、アスファルトに突き立つ。

「指定侵入少女ちかぼー参上」

「同じくりかぼー、参ります」

開いた工具箱から現れた二人は、すでに改造制服じみたコスチュームに身を固めている。

『マジカル☆クロバー!』

ちかぼーがセーラー服の胸元の四つ葉型のペンダントをつかみ、何かを抜きはなつた。

『マジカル★ボールバンク、トゥーインチドリルソー』

りかぼーがブレザーの胸ポケットから抜いたボールペンはたちまち両手持ちの大型電動ドリルに形を変える。

「ちかぼーの“マジカル☆クロバー”は抜きはなつただけの未確定形態では不可視だが、状況に応じて数々の手持ち工具へと実体化する魔法の万能ツールだ。そのものずばりの大ボール形態の使用頻度が高いし、チカリカのシンボルとも言える。りかぼーが常に多数のツールを持ち歩いては細かく使い分けているのは対照的だな」

文字通り『ボールのようなもの』ってわけか。確かに一振りで大ボールに変化している。

でもってその後は虐殺モード。

なまじっか愛玩動物の形を残して見て見た目可愛らしいモンスター達を殺して殺して殺しまくる。それはもうものすごい勢いで。殴ってえぐって貫いて引き裂いてたたき割る。画像はシルエツトでも、ぐしゃりべちゃりという音声は妙に生々しい。

「しっかし、えげつない武器ですよ」

「ファンの前で武器とか言ったら殺されるぞ。ツールだ、ツール。それより良く見ろよ」

時折描写される二人の表情は戦いに望む戦士らしい真剣なものであるが、同時に苦渋の色も宿している。

怪物に一打ちを加えるごとに、ちかぼーは露骨に泣きそうな表情を浮かべ、一見無表情なりかぼーの眉が小さく歪む。彼女らの気合いの声もまた、戸惑いと震えを帯びている（さらっと演技してしまふ声優さんも上手い）。

そしていくつのかのすり傷と引き替えにすべての怪物を倒し尽くした二人は、巨大な除草バーナーで淡々と死体を焼き払ってから工具箱の中に消えていった。

その夜、二人きりで傷を治療し合い、それから抱き合って泣くシーンで、最初のパートが終わっていた。

そこで一端、ポーズ。

「感想、いいですか?」

「おう」

「これ、痛すぎるんですが、いろんな意味で」

「だよなあ」

と篤史兄さんは苦笑する。

「身につまされるよなあ」

「いや、つまされはしません」

「……Bパート行くか」

後半のパートでは、千佳穂と理佳穂は双子の小学生で家業はホームセンターであること。エイリアン同士の戦闘に巻き込まれて重傷を負ったが、彼らと同化する事で命を取り留めたこと。地球に逃げ込んだエイリアンの逃亡犯罪者達を追跡し、倒し尽くす使命を受け継いだという説明がなされていた。

こちらへの設定自体はわりにありふれたものだが、中身といえは前述の通りであり……。

その後昼も結香さんのサンドイッチですまし、夕方までぶっ通しで全二十四話マラソンとあいなったのだが。肉体的以上に精神的な疲労が大きい。子供向けにこんな痛々しい作品を作ってしまう人たちはどういう脳みそをしてるんだろう。

「明日の午後はチカリカ5いぐぞ。もうすぐ最終回なんだから、新学期前に一気に放送まで追いつくからな」
うわあ。

「覚悟しときます」

「ああ、確かに結構覚悟いる。俺も一人じゃちょっと見る気になれん」

いつも由香さんと一緒に見てるわけね。

「……ごちそうさまです」

「ごちそうさまついでに晩飯も食ってけよ」

「食べてってね」

4 / 4 水曜日

一昨日の再会劇に続き昨日のチカリカ三昧と精神的に緩急がきつかったので、今日は昼までしっかり眠るつもりだったのだが。

すっかり七時過ぎから叩き起こされた。

「やほーナナちゃん、遊びに来たよん」

「おなじく」

「うわっ」

七瀬の双子は、ドアが開くやいなやいきなり抱きついてきた。

「まずはエネルギーよこせ〜！」

「充電です」

「何々、何、どしたの？」

この娘ら、見た目ちっこいのに力あるなあ。全然動けない。特に鈴菜は強烈すぎ。

「あーやっぱ落ち着くわコレ」

こくこく。

彼女らが飽きるまで、女関先でたっぷり五分は拘束されていた。

「昨日は篤史兄ちゃんたちと一緒にだったじゃん」

「今日はつきあって」

この間のカラオケボックスにほど近いボーリング場に引っぱり出された。

そこで、口数が少なくおとなしうに見える撫菜が意外とアクティブな事に驚かされる。単純な腕力では鈴菜に一步譲るが、読みの正確さや動きの精密さで言えば上回ってるかもしれない。

ことに、このボーリングという競技は撫菜向けだったようで、第一ゲームは姉妹揃って二百点台後半をマークしていた。遠近感

をつかみきたい片目のハンデを考えると、撫葉はほぼパーフェクトに近い。

あの時は二人がここまで運動できるようになるなんて夢にも思わなかったな、と感慨にふけていると、歓声に意識を引き戻された。

「うぉー」

「すっげー」

双子の美少女がえらいパワーと精度でばかンぱかとストライクを連発しているのだから、ギャラリーが集まること集まること。

「可愛い。持って帰りたい」

若い女性にも大人気な様子。もう少し年上の、たとえば結香さんや宮藤姉妹あたりなら嫉妬の対象になるんだろうけど。

詩紀嬢なら……嫉妬するにせよ持って帰るにせよ、相当な強心臓が必要だろうな。

「眼帯、眼帯少女ハァハァ」

その大学生風。聞こえるようにハァハァしないでほしい。なんか危ない。

「うーん、俺はあのぼーっとした背の高い娘が好きだなー」

ああ、どうせそういうオチでしょうともよ。

しかしこう連日遊んでばかりじゃ全然荷物整理が進まない。楽しくないとは言わないけど、ちょっと心配かも。

午後からは篤史兄さんのところで現在放送中の続編であるチカリカ5の鑑賞会。

前作のラストで逃亡エイリアンは滅びているのだが、今度の敵は仮面の御同類。

しかも、前作の敵であったエイリアン達は悪名を擦り付けられ追放された者達であつたらしいとか、追跡者達もそうと知らず任務に就いていたらしいとか示唆されている。

というわけで、相も変わらず見た目にそぐわぬ鬱成分がびっしり。

「これ、どのへんがファイブなんですか？ 仲間が三人増えるとか？」

当然の疑問を口に出してみた。

「そういう意見が大半だったが、最終回まであと少しの本放送でも増えてないからな」

確かに。

今までやらかした事を考えると、僕に予想が付く程度の展開ですむとは思えない。

「チカリカは二人で完成してる。それを崩しても薄まってポイントがボケるだけだ。もし増員があるとすると新キャラクターとあわせて関連グッズを増やしたいスポンサーからの圧力だろうが、実際ウケてるんだから妥協する必要はないだろう。これまで無理を通し続けてきたんだから、変な物を作るぐらいなら打ち切りを選ぶだろうな」

嬉々として語る篤史兄さん。

でも個人的には業界側の事情から物語を先読みするってのは風情がない行為だと思ってしまう。このへんオタクと一般人の違いなのだろうか。

「そういえば」

「うん？」

「今朝七瀬姉妹と遊びに行ったとき、何となく思ったんですね」

「何を？」

篤史兄さんはリモコンで再生を一時停止すると、こちらに向き直った。膝の上に結香さんが乗ってなければ、真剣に話を聞く体制に見えなくもない。

「いや、そんな真面目な話じゃないんですが。ただ、撫菜と鈴菜ってなんかチャリカっぽいなあ。髪型とか、イメージとか。

りかぼーの網膜投影ディスプレイ（スカ●ターみたいやつ）と撫菜の眼帯とかかぶりますよね」

「逆よ逆」

予想外の方からの声。

「七瀬姉妹の方がオリジナリティなもの」

振り向くと、ボブカットにファッショングラス、パンツスーツのお姉さんが腕組みして仁王立ちしていた。

これは新川さおりさん。篤史兄さんや詩紀嬢の従姉に当たる人。ハーフだそうだが見た目はまるきり日本人で、詩紀嬢の方が遥かに外国人っぽい容姿だった。

いつの間に襖を開けて入ってきたのか全然分からなかった。が、それを考えても無駄だと言うことはよく分かっている。なにせ相手はさおりさんなのだ。年に一度と会わなくとも、この人の規格外っぷりは痛感している。

「や、ナナちゃん。おひさ」

ウインク。この辺は帰国子女っぽい。

「お久しぶりです。それはともかく、今聞き捨てならない事を」

「感動の再会をさらっと流したわね。はい、これ」

「うおっと」

さおりさんはちょっと不満げ。

渡されたでかい紙袋の中身は教科書類だった。さおりさんがいかにも軽々持ってたので重さを読み違い、あやうく足の上に落しかけた。

「さおり姉、勝手に入ってくるなよ」

「私は管理人よ」

話がどんどん逸れていく。

「いや、管理人でもまずいだろ」

「うーん、管理人さんって言えばすごい美人の未亡人がお約束だ。ほれナナ、差し入れ」

こちらは重ねた紙箱。中身は10インチのピザ三枚だった。

「わざわざしません、ジュウ兄さん」

入ってくるやいなやかみ合わない事を言い出した、ひょろりと背の高いこちらは陸奥十悟さん。さおりさんと同じ歳で、彼女が日本にいる間は影のように付き添っては目付役をつとめていた人だ。温厚そうに見えるがこれで意外とノリノリで、結構一緒にあって暴走していたので人選としては微妙なのかもしれない。

この二人、今では揃って紫城高等部の教師の職にあるとのこと。

「五号室に五ヶ瀬が入っていいいよどこぞのアパート化してきたしな」

「いやそれ、かなり古いから」

古い特撮を歌ってた人の台詞とは思えない。

「十悟、私が美人じゃないって言ってる？」

「未亡人じゃないと言ったんだ。別に他意はない」

「そんなに未亡人が良ければ、籍入れてすぐに葬式挙げてあげましょうか？」

と、さおりさんは腰を落として蠟螋拳の構えをとってみせる。

「謹んで遠慮させていただきます」

ジュウ兄さんでなくても引くよなあ。

「これ、美人でキボウジンで管理人見習いみたいもん」

今度は、篤史兄さんが結香さんを指さして訳の分からないことを言い出す。流れからすると何かの冗談なのだろうが。

「うわ」

ジュウ兄さんが引きつった笑みを浮かべる一方、さおりさんは膝を打って笑う。

「あはは、そりゃいいわ」

「お上手だね、篤史ちゃん」

「だろ？」

「……だから誰が上手いこと言えと」

上手い、のだろうか。僕にはいまい意味が分からない。凄い

美人になる希望があるってことかな？

一部にはあまりウケなかったようだが。

「深入りするな。俺にも聞くな」

解説希望で視線を送っていると、ジュウ兄さんに釘を刺されてしまった。

「了解」

ずっと年上の十悟さんはあの頃は僕らとは少し距離を置いていたものだが、今になってみれば僕らをいつも見守っていてくれたと思うし、彼の忠告に逆らってもあまり愉快な事にはならなかった。気にならないと言えば嘘だが、今回もそれに従う事にしよう。

「話戻していいですか？ さおりさん」

「ああ、七瀬姉妹の話ね」

こともなげに、言った。

「モデルなのよ」

「はい？」

「だから、鈴菜が千佳穂、撫菜が理佳穂のモデル」

「はあ？」

篤史兄さんも首をかしげている。

「飲み込み悪いわね、あなたたち」

不満そうな口調とは裏腹に、さおりさんの表情はしてやったりといった様子で。

「亀丸監督、友達だし」

こんなところに黒幕がいました。

かくして、ずいぶん人口密度の高いチカリカ鑑賞会になってしまった。

しかも教師二人が後ろで立ち見状態。

「僕、抜けましょうか？」

「ナナちゃんが抜けてどうするの？」

確かに結香さんの言うとおりです。

しかも監督のブレーンによる生コメントありつき。

「見た目と口だけのお調子者で、大学時代にはモックタートルとか呼ばれてたのよ。プロデューサーの前で吹きまくったら企画が通っちゃったでしょう、って泣きついてきたから、思いつきを話してやったってわけ」

「アメリカ帰りで医師免許持っていると聞いてたが、まさかそんなとこでつながってるとは……」

コアなファンだけあって、篤史兄さんのショックは半端でなさそうだ。

「あいつ、雰囲気を盛り上げて引っ張ってく能力はあるからね。ネタさえ与えてやればいい仕事するだろうってのは分かったわ」

「つまり、事実上はこいつの作品でことだよ」

あまり嬉しそうなジュウ兄さん。

「ってことは、もしかして敵方の二人もモデルいる？」

「いるけど今は秘密」

「やっぱり」

「じきナナちゃんも出てくるから楽しみにしてなさい」

「うわあ」

「何よその顔」

とっても複雑な気分です。

どう扱われてるのかだいたい検討つくから。

「ふいー」

終わった。

実に長かった。

昨日から同じ作品をぶっ続け。食事の時間も惜しんでピザつきながら。しかも頻繁に一時停止しては細かい解説が入るものだから、今日も午後全部つぶした事になる。

確かに面白かったけど。

「よし、それじゃあ二次創作もいくか」

「へ？」

篤史兄さんが段ボール箱を持ってきた。

「これとかお勧めだぞ。作者のヘンプコードさんってリア中らしいけど、構成も画力も相当のものだ。何より複雑で悪趣味な設定

にがつつりと食らいついてきて、それを消化・再構成できているのが凄い」

渡された薄い冊子はいわゆる同人誌だろう。

「へえ」

生き生きとしたちかばーの一枚絵は鋭く繊細な描線で表現され、それだけでも非凡な画才を示していた。表紙の端にはデフォルメされた竜のマスコットキャラクターと、スタジオヒナ Pressの文字が記されている。

「でも、中学生が理解できて褒められる子供向けアニメって一体」

「あの娘は特別。詩紀ちゃんと同じ」

「うわ、中学生でも分からないの前提ですか……詩紀嬢と同じ？」

「え、そうなん？」

意外そうに、篤史兄さん。そして十悟兄さんもまた、意外なほど真剣な目でさおりさんを見た。

「俺も初耳だぞ。あんな他にもいるってのか？」

「厳密には違うけどね。詩紀ちゃんは『集めて』『届けられる』けど、彼女は相棒に望まれて『そこにいる』んだから」

「お前さんは、まあたはぐらかすようなことを」

ジュウ兄さんはため息をつき、

篤史兄さんの表情も懐疑的になる。

それに応えるように、さおりさんは何故か上機嫌に微笑んだ。

「ご先祖が珠坂という結果と七つの一族の血と北斗の鬼の力をそろえてようやく不完全になしたっていうのに、個人の意思の力だけでちょいちょいと世界を書き換えてしまえるようなバケモノってのがいるってこと。そういうのが集まってくるのも、ご先祖が描いた青写真には含まれていたのかもしれないけど」

いつも冷静沈着なさおりさんの口から、すらすらと電波チックな言葉が紡ぎ出される。

突然のらしからぬ奇行に、二人のお兄さん達はさぞや引いてるかと思いきや。

「……ここと言うか？ よりによってナナに？」

「あーあ、俺も知らなかった秘中の秘までぶっちゃけちゃって」意外にも、困惑はあっても否定はなかった。

「はぐらかすなって言ったのはあんたでしょうに」

あくまでも得意げなさおりさんには悪びれた様子はない。

「態度の一貫しない奴だな。遠ざけておきたいのか引っ張り込みたいのかどっちだよ」

「外部からの干渉を退けただけ。決めるのは七夏君だからね。私はそれを尊重して判断材料だけ提供するわ」

細かいことはよくわからないが、ここにいる僕以外の人たちは、どうやら本気でそれを信じているらしいという事だけはわかった。

とまどう僕にさおりさんはにっこり笑って見せ、

「それこそ生死に関わる話だし。何も知らずに死にたくないでしょ？七夏君」

と物騒な台詞を宣わった。

知っても死にたくありません。

その後も続いたさおりさんの電波話によれば、

珠坂は『神』の、正確には『救世主』の能力を模した街なのだそうです。

人の魂ごときがなせる事はたかがしれている。自己の脳内にお

ける量子論的確率に偏りを生じさせる事で、魂の望む方向性を思考・行動に反映させる程度だ。

しかし、『救世主』は人々の信仰を集めるハブとして働くことで魂を群体化して一つの回路となし、より強力に世界へと干渉するため、個人に比べて遙かに広範に、強引に、偶然の偏りを生じさせる事ができる。

その『救世主』を人工的に作りだそうと考えた者達がおり、僕ら斗流十家の祖となった。

ある翫王と北面の侍の一派は、信仰の核となる存在とそれを守る存在達を用意し、日本の要とすべく霊的に適した優れた土地に町を興し、術式を敷いた。

という事なのだが……

またなんと電波な。

「現在の宗家は詩紀ちゃんよ。表向きの仕事は私が肩代わりしてるけど、真の支配者は彼女」

その言葉が本当なら、詩紀嬢に頼めば何でも願いが叶うとでもいうのだろうか。

『救世主』ってことだから、要はキリストの奇跡みたいのだろう。

もしや、オザキ歌ったらガラスが割れたとかいうのもそれか？確かに、昔から彼女が出した話題が直後に現実になった例は枚

挙にいとまがない。

いやいや、そりゃいくら何でもこじつけすぎだろう。偶然だよ

偶然。

でもさおりさんは、“偶然を偏らせる”って言ったよな。

起こるのが偶然でも起こりうる内容ばかりじゃあ、彼女が関係してるなんて証明しようがないんじゃないや。

たとえば詩紀嬢に頼んで宝くじ十回連続で二等当たったとして、それが奇跡の証拠になるか？

「おいおい、ナナのやつ悩みこんじまったぞ」

「さおりが話をややこしくするからだ。せめてもう少し落ち着いてからにすれば」

「ここまで完璧に隠し通してきた挙げ句、証拠も無しに信じられる話じゃないだろ」

「篤史の言うとおりだ」

男性陣二人の突っ込みに、さおりさんはこともなげに言った。

「実演しよか？」

「そいつはカンベン」

間髪を置かず、期せずして答えがハモる。

「論より証拠って言うわよ」

具体的に何をするのか分からないが（指をコキコキ鳴らしているあたりがそこはかとなく気になる）、さおりさんはその実演とやらをやりたくて仕方ないらしい。

篤史・ジュウ兄さんがそれを歓迎していないのは言うまでもなく。

実演とやらは見たい。でも危ないのは困る。そして先輩方の様子を引くまでもなく、とても危険そうな雰囲気がある。

妙な風に緊迫した雰囲気を持ったのは、のんびりほっこりした声だった。

「実演もいいですけど」

篤史兄さんの膝の上で目を糸みたいにして大きなおせんべいをかじっていた結香さんは、のんきな口調で提案した。

「今日はもう遅いからお開きにしたほうがよくないですか？ よ

い子はお休みの時間ですよ」
時計を見ると8時半すぎ。

あなた、小学生ですか。

いかにも空気が読めてない発言だが、男性先輩連は渡りに船とばかり賛成する。

「今ゆっかがいいこと言った！」

「そうそう！ 俺たちも明日の準備終わってないんだぞ。分かっているか？」

さおりさんはちょっと考えていたが、

「一理ある。じゃ、今日のところはこのぐらいにしておいてあげましようか」

と納得してくれた。

よくある捨て台詞みたいに聞こえるが、さおりさん相手だと本当に情けをかけられた気がする。きつと勘違いじゃないだろう。

そんな経緯でなんだか危なそうな事には巻き込まれずにすんだが、詩紀嬢勇者様疑惑（女神様だっけ？）についてはうやむやになったわけで。残念だったような、ホッとしたような。

「それじゃあなたたち、くれぐれも始業式に遅れないように」

そうそう、明日から新しい学校で新学期なんだから。

新学期？

「あーっ！」

「なに？ 疑問なら明日にして。今日はもう飽きちゃったから」
飽きたって。

「そうじゃなくて。電波話に振り回されて、結局荷物整理できなかったじゃないですか！」

「電波で」

「言う言う」

「大丈夫じゃないのー？　ねえ結香ちゃん」

「ええ、そう言うこともあろうかと」

結香さんが人差し指を立てて見せた。

「荷物整理なら初さん終さんをお願いしておいたから」

「はい？」

「午前のうちに合鍵預けておいたから、もうとつくに終わってると思うよ」

「え、えええええっ!？」

すぐさま五号室に向かったが時すでに遅く。

宮藤姉妹はまさに撤収の真っ最中だった。

初「七夏さま、お疲れ様です」

終「早速で申し訳ありませんが、作業内容をご確認いただけませんか？」

初「至らぬところなどございましたらお叱りは甘んじて」

相変わらずのばか丁寧さと、おそろいのなぜかメイド服については突っ込まないでおくとして。

居間を占拠していた段ボールの山は綺麗に消え去り、殺風景な部屋は完璧な居住空間に姿を変えていた。

この人ら仕事できすぎ！

っていうか、どうやって動かしたのブラウン管アナログハイビジョン（お隣のＡＶマニアな兄ちゃんのお下がりをもったものだった）。

初「書物・記録メディア類は作者・作品ごとに分類しておきました」「うん。ありがとう」

気が利くなあ。さすがに。

終「ある種の娯楽メディアに関しては特に慎重に扱い、簡単には目につかないようにカモフラージュ性も考慮しました。分類はジャンルと出演者ごとで実用性を重視してあります」

「……」

もともと丁寧な話し方の二人なのだが、一語一語をはっきりとくぎってことさらにゆっくり噛んで含めるような口調に、ただならぬ雰囲気を感じた。

ある種？

ある種で。

血の気が引く。

お隣さんの餞別。あの段ボールって、もしかして。

初「シリーズの抜けやタマゾンのお薦め商品もリストアップ済みです。内訳はこちらにまとめてございますが、必要なら読み上げましょうか？」

二人とも態度がほとんど変わらないんですが。

「い、いえ、そこまでしてもらうわけには」

終「ご心配には及びません。七夏様のご趣味については心の内にとどめ、決して口外いたしませんのでご安心を」

この人らデリカシーなさ過ぎ！

てか、これ、もしかしてもしかしなくても嫌がらせ？

初「ただ、老婆心ながら一言だけ言わせていただくと、お楽しみは想像の中だけにしておいていただきますと、不名誉な罪状で手が後ろに回りかねません」

「そ、それはもう、十分に理解しております」

終「そうですね、自製の如何によっては、七瀬のお嬢様方にも十

分注意なさるようご忠告差し上げる必要があるかもしれないし」

っていうか一体何入れたんだ、あの人はっ！

「許して！ ごめんなさい！ 僕が悪うございました！」

初「ねえ終、七夏様は何を謝っていらっしやるのです？」

終「わたくしにもとんと見当が付きませんけれど」

にっこり。

「カンベンしてくれ〜！」

「怖っ！ お姉さんズ、怖っ！」

「怖いだろ？ しかもしつこいんだよあいつら。しかしあそこまで怒らせたってのは、よっぽど何つうか、ええと、そう、とんがった内容だったんだろ？」

「エッジなのはいけないと思います、ってか？」

「だからだれが上手いこと言えと！ ……やべ、こっち見た。くわばらくわばら」

篤史兄さん・ジュウ兄さんもまた、僕が脂汗を絞られる様子を離れて見守りつつ、飛び火を恐れてガクブルしていたそう。僕はそれどころじゃなかったただけだ。

4 / 5 木曜日

一晩明けて。

朝日を浴びつつ布団の中で思う。

一眠りして冷静に考え直してみても、昨日のさおりさんの話に

はやっぱりいかにも現実味がない。

篤史兄さんにしてもジュウ兄さんにしても反応が大袈裟すぎた気がするし。

「三人がかりでかつがれたのかなあ……」

チカリカマラソンからの流れで感覚が麻痺してるところにかぶせるようにアレだから。

二日ばかりでじっくり仕込んだ、さおりさん一流の手の込んだジョークかもしれない。

ありうる。

ちなみに、餓別の中身の件はお二人に処分を任せた（ああ、あるいはあれも一連の流れかも）。なんか裏庭で盛大に火柱が上がってた気もするけど。深入りしたくないので何もかも綺麗に忘れる事にする。

篤史兄さんのところで朝食をごちそうになり、フロアライト・コーポ在住の皆（教師連除く）と一団で初登校。

だと思ってたんだけど。

自室で着替えて鞆持ってきたら誰も居ない。三号室だけでなく、七号室も九号室ももぬけの殻。

「ありゃ？」

早速置いてけぼりですか。

仕方ないので時計を再確認。

迷わなければ何とかなる、ぐらいの時間じゃないかと見当をつける。

一応、道は分かっているつもり。ここならろうじて携帯電話も圏内だし（相変わらず電波状況が微妙な携帯だ）、地図も見られ

るだろう。

「ナナ」

背後から声をかけられた。

「こんな時間に何をしているの?」

それはこちらの言葉です。

と言い返したかったのだが。

振り向いた途端眼前に飛び込んできた光景に魅入られてしまい、声が出せなかった。

全方位型ソフトクロスフィルタ常備ですかこの人は。

朝日を浴びてキラキラと輝く銀髪が、可愛いとか綺麗とか通越して、もう神々しいとしか言いようがない。相変わらずの仏頂面さえ、神々しさに一役買っているように思える。

言わずとした、詩紀嬢であった。

「あ、ええと」

「私は起きたいときに起きて、食べたいときに食べて、寝たいときに寝るの」

質問に先回りするように、適切な答えが返ってきた。高校生として正しい答えではないところが何とも。

女神様じみた容姿に相応しい答えでないの言うまでもないが、これでうまいことが抜けた。

「あ、あはは。置いてかれちゃって」

「兄さん達を基準にしているのは遅刻してしまうわ。毎日全力ダッシュで競争だもの」

結香さん、坂ばっかりの2キロ弱を篤史兄さんについていけるのか。

その光景はちょっと想像しがたい。まさか篤史兄さんまで全力

という事はないと思うが、結香さんは本当に中身変わってない感じだな。

「さあ、行くわよ」

そう宣言した詩紀嬢は無造作に僕の手首をつかむと、そのしなやかな指からは想像もつかない力でぐいぐいと引っ張り始めた。

「うわっと」

「私が最終ラインだから、離れないようになさい。初日から生徒指導の世話になりたくなければ」

相変わらず無愛想だが、遅刻しないように気を遣ってくれているようだ。

「ええと、もしかして……待っててくれたんだ?ありがとう」

「別にあなたを待ってたわけではないから。偶然一緒になっただけ、勘違いしないで」

「へ?」

顔を赤らめてのあり得ない発言。おおよそ詩紀嬢らしからぬ態度。

これっていわゆるツンデレ系? (篤史兄さんの薫陶によりここ数日でえらい詳しくなりましたよ、ええ)

とか思ったりもしたけれど。

「……とでも言えば満足かしら」

と、一瞬で元の無愛想に戻ってしまい、先ほどの可愛らしさは微塵もない。

ギャグか?

いや、ギャグなんだろうなあ。彼女なりの。

とにかくとてつもなくレアなものを見てしまったのは確かなので、なんとなく拝んでしまった。

それにしても、あんな表情ができるとは。

見事な演技力だけど、それなら普段もうちょっと愛想良くして
もよさそうなもの。

これで近づきたい感じさえ払拭されれば、さぞや人気が出る
だろうに。

そう忠告しようと思ったが、やめておいた。モテモテの彼女が
想像しがいというのもあるが。そういう気分にはなれなかった。

しかし、慣れているのだから悠々と歩いているものだ。
表情が乏しいこともあるが、急いでいる感が全く感じられない。

ちょっと心配になってきて、先行しようとしてみたら、手首に
激痛が走った。

「イタっ!」

思わず立ち止まり、彼女の隣に戻ると嘘のように痛みがなくな
る。

あんまり力を入れているようには見えないが、詩紀嬢につかま
れた手首は曲げもひねりも利かないようにがっしりと固定されて
ていた。

これじゃ前に出ることも下がることもできない。

てか、気づかないうちに関節極められて連行されていますよ。

ああ、こういうやり方、確かにさおりさんの従姉妹だ。血のつ
ながりがなくてもそっくり。

「あー、詩紀様だ」

後ろで声。

首をひねってみると、同じ焦げ茶のブレザーの女生徒。

「いそげおソメ! もうちょっと!」

さらに後ろに声をかけている。

「ま、待って! はあはあ、待ってたらー、うっきー!」

三十秒後。二人は僕らとほぼ並び、速度を落としていた。

「はあはあ、間に合ったよー。はあはあ」

「もう、おソメが寝坊するからあ」

その後も、同じような様子で、何人かが合流してきた。

ネクタイの色からすると、皆二年生・三年生のようだ。

「なるほど」

自称のみならず、詩紀嬢は多くの学生達に最終ラインとして認
知されているらしい。

しかし、合流したとは言っても一団にはならず、僕らとは少し
距離を置いて固まっている。

ひそひそひそ。

ひそひそひそひそ。

古い推理小説じゃあるまいし。砒素がどうしたと言いたくなっ
てくる。

「声を潜めても聞こえているわ。言いたいことははっきり口にし
たら?」

強い口調ではなかったが、詩紀嬢は良く通る声で誰相手ともな
くそう口にした。

数秒間の沈黙の後。

「お、お似合いですよ。詩紀サマ」

「ほんと、宝塚みたーいですって」

おソメとうっきーと呼ばれていた女生徒二人が言う。

ここでどちらが男役なのか尋ねてみたい衝動に駆られてしま

う、そんな僕はどうすればよいのでしょうか。

それをきっかけに、他の生徒達も次々と発言をはじめる。

「珍しいですね、新川さんにお連れがいるの」

「見かけない顔だけど、転校生？」

「そちら、噂の婚約者さんですよ」

「はい？」

何ですかそれは？

婚約者？ そんなのいるの？

いや、篤史兄さんにいるのだから、詩紀嬢にいてもおかしくない。

でも噂ぐらい聞きそうなもの。

あ、これが噂か。

いやいや、十家の内輪で誰も知らないはずがないと思うんだが。

「そのようね」

混乱する僕とは対照的に、詩紀嬢はこともなげで。

おーっ。と歓声が沸き上がる。続いて拍手。

「お幸せにー」

「そちらこそ」

数々の祝福の声にそう返す彼女の表情は相変わらず能面じみていたが、少しだけ頬が赤くも見えた。

「本当に間に合っちゃったよ」

詩紀嬢のペースにあわせた結果、時刻は完全にオーバー。

昇降口を上った直後に始業式のため講堂へと移動する群れに合流できた。

なんでも、各教室では黒板に講堂への集合時刻だけ書いてあ

たらしい。

なんたる放任主義だろう。

「ナナは同じクラスだから。私と一緒にほぐれた振りをしていれば教師が案内してくれるわ」

なるほど、今日は荷物らしい荷物がなかったのでこういう芸当も可能なわけだ。

ほどなく、

「新川さん、2-Cはそっちよ」

女の先生に声をかけられた。

美人だけど可愛さの方がまさる容姿といい、ほんわり癒し系の雰囲気といい、十年かそこら後の結香さんが、きつとこんな感じに違いない。

もしかして親戚かもしれないな。

「ありがとうございます、野口教諭」

「ほら、君も。五ヶ瀬君だったわね。ちゃんと新川さんについていつて」

「はい」

「慣れてても迷っちゃうこともあるんだもの。転入生じゃ当たり前よ」

なんかとっても自己弁護的に聞こえるんですが。

こうして、僕らを含めた最終登校グループは教室への移動時間を節約できた事になる。

まるでお話のような都合主義だ、と思った。

式典での退屈な挨拶やごく短い伝達の後、僕らはそれぞれの教室へと向かった。

担任はなんとジュウ兄さんだった。当たり前と言っているだろう。何しろお隣の2ーBはさおりさんだそうだから。悪い人じゃないんだけど、きつといういろいろ大変だろう。主に精神的に。

まずはお約束の自己紹介となり、

「新川詩紀。あとは何を言っても蛇足ね」

ジュウ兄さんを含む全員が一斉に頷いた。

さすが、よく分かっている。

「皆さん初めまして。五ヶ瀬七夏、転入生です。得意科目は国語一般。苦手は芸術一般。あと男です、念のため」

別にギャグのつもりはなかったのだが、最後のフレーズでクラスがどっと沸いた。

そしてその直後の、

「知ってる。今噂の、詩紀様の幼なじみで許嫁だよね」

で、教室中上を下への大騒ぎに。

一体どこからそんな話が出てきたかわからないが、僕が珠坂に来てから数日というのにこの状態。

しかも詩紀嬢が否定せずに放置するから、僕がなんと言おうと恥ずかしがっているだけと解釈されてしまい、もう完全に既成事実扱いだった。

尋問モードで囲まれている最中、その詩紀嬢が僕の耳元に口を寄せてささやいた。

「話があるわ。放課後、北棟の屋上で。くれぐれもつけられないようになさい」

詩紀さん。お願いですから余計に騒ぎを大きくするような真似をしないでください。

おかげでジュウ兄さんの手を借りても、全員撤くのにたっぷり

一時間かかってしまった。

屋上とは聞いていたけれど。

まさか給水塔の上になんぞ立つてとは思いませんでした。

これが新川家なんだな、と改めて篤史兄さんやさおりさんとの共通点を感じてしまう。

「引越してしまったナナにはこれまで機会がなかったから。だから、ここできっちり説明しておくことにするわ」

詩紀嬢はいつになく饒舌で、感情的に感じられた。

「まずは、ごめんなさい」

彼女はいきなり深々と。これ以上はないぐらい深々と腰を折った。

「いや、何のこと。いいから頭を上げてよ」

唐突すぎてわけがわからない。

「十年前のこと、ナナには何の責任もないし、とらわれるべきでもない。それだけは知っていて」

十年前、と言えば。

あの事故のこと、知らないだろう。

なら明らかに僕の責任じゃないか。

七瀬姉妹の父親にドライブのコースを委ねられたとき。二人とその母親が海回りを推したのに対し、ただ一人山越えを宣言し主張し貫いて、事故現場へと導いたのは僕だった。

「あなたにペンペン・リンリンを傷つけさせたのは私。二人の両親が亡くなったのも、あなたが言葉を失ったのも、みんな私の」

「わけわかんないよ、君の言うこと」

僕は詩紀嬢の言葉を遮った。

弁護してくれたのは嬉しいけど、僕の逃げを肯定するような言葉をこれ以上聞くに堪えなかった。

「道を決めたのは僕だ。だから僕が悪い。それでどうして君が出てくるのさ」

彼女に罪をかぶせて何になる？ それでは罪を償えるどころか、罪悪感が薄れる事さえない。

「説明するにはちょっと長い話になるわ。ナナらしからず興奮しているけれど、落ち着いて聞けるかしら？」

早速釘を刺された。

彼女は真剣に見える。納得させる説明ができる、と彼女は考えているのだろう。

ならば。

「聞くよ」

詩紀嬢は頷いてみせた。

「私、『樞』もそうだけれど、末位に近い宮藤の『師門』は、斗流の一部には衝撃だったようね。斗流全体としては望むべくもない奇跡だけれど、我が一族の子には何故に血が出ないのか、と思う人々が居ても不思議ではないわ」

「……ええと？ まったく、全然、これっぽっちも意味が分からないのですが」

新川は電波一族でしょうか？

「初さん終さんの長手袋は何か知っているかしら？」

突然話の方向が変わった。

「確か、火傷か何かの痕があるとか」

「ナナにはそう説明されてるのね」

「実際には違うと？」

詩紀嬢は頷く。

「何もないのよ」

「え？」

「無いの。二人はもともと繋がって生まれてきて、初さんの左手、終さんの右手になる部分は最初から足りなかったのだそうよ」

それは、初めて聞いた。

でも、僕らの前で手袋を脱いだ事がないのも頷ける。

「じゃあ、あれは義手なんだ」

嘘みたいに精巧な。

近頃では神経や筋肉の電位を読み取って動く電動の義手があるという話は聞いたことがある。

実際、二人の手の動きは実になめらかで生活に困っている様子はなく、ただ手袋をはめているだけにしか見えない。

「そうね、ある一面ではそう言ってもいいものかもしれないけれど、本質は別だわ」

詩紀嬢の肯定は歯切れが悪い。

「斗流の優れた術者は自らの身体に鬼を降ろしてその能力を使用する事ができる。さおり姉さんが『揺』を喚んで鬼身に変じるようにね」

そしてやっぱりすぐ電波方向に。

また『鬼』だ。

「でも宮藤姉妹は例外。二人は手の形をとった『師門』の一部と常に繋がっている。あれは身体欠損部を介した専属契約のようなもの。さおり姉さんが状況によって『揺』のかわりに『残』を降ろすように自由にはいかなければ、結びつきはずっと強く制御

も容易。さらにそれぞれがずば抜けた天稟を持った双子という要因が加わったことで、不完全ながら『師門』さえコントロールできているのよ」

「あ、えーと」

話はさらにいい方向に向かう一方だ。

しかし、よく知る幼なじみ達の言葉を簡単に切り捨ててはならない、と感情だけでなく理性のどこかが訴えている。

昨日からの一連の電波話が真実であるかを見極めるなら。

彼女たちが前提として語っている内容が事実であると確認することだ。

事情をよく説明して初さん達に手袋を取ってもらえれば。大変失礼とは思うけど、彼女たちなら間違っていたら謝ればすませてもらえるんじゃないか。

いや。思い出せ。

昨日さおりさんは「実演」しようと言っていたじゃないか。

僕がこの結論に達することを予想して、前もって証拠を見せておこうとしていたという事か。

しかし、詩紀嬢の言葉を鵜呑みにするなら、さおりさんは鬼に変身して暴れてみようとしていた、という事になるのではないか。

篤史兄さんやジュウ兄さんが必死で止めるわけだ。

「あはは、は」

どうしてこうも理屈が通るんだろう。

こんな陽気の中だというのに、どこか薄ら寒い。

「信じられないけれど、理解はできなくもない、という顔ね」

おおせの通りです。

でも。

「その鬼の話が真実として、あの事故と何が関係あるっていうのさ」

「ナナはもう大体理解している筈だわ。認めたくないだけ。それでも私に話させたいというのかしら？」

「……お願いするよ」

「なら話すわ。ナナが望むのだから」

あるいは気のせいだったかもしれないが、詩紀嬢には少しだけ躊躇があったように思えた。

「本来鬼は『血の出た』者を介して実体を得ようとするもので、それを逆に制御し返すことで利用し、鬼を倒すために用いるというのが斗流だけれど。宮藤姉妹がヒントになって、宗家に口伝のみ伝えられる禁断の呪法と同じ手段にたどり着いた人々がいたのよ」

「それって、どんな？」

『血が出ていない』者が、本来なら縁遠い鬼と縁を結ぶためには、強引に鬼の下ろしどころを作れば良いのではないかと。例えるなら身体を媒介にした魂の接ぎ木ね」

「つまり」

自分では口にできない事を、冷静な彼女に言わせる僕は卑怯者だろう。

「身体の一部を欠く事で、鬼を呼び込み一体とする」

「でも」

あの日。

幼い鈴菜はただ瞬きする以外はびくりとも動かず。

右目を失った撫菜はただ奇声をあげて笑い続けるのみだった。

頭部に傷を負って身体を自由を失った鈴菜、片目と理性を失っ

た撫菜。

その後二人が、鬼と呼ばれる何らかの超自然的な存在に『憑かれる』ことで健康を取り戻したとすれば、あの回復ぶりも納得できる。

「でも、あの娘達が自分で自分を傷つけたわけじゃない」

「その通りよ。それは別の誰かの望み」

不快な話だった。

「例え他人がそれを狙ったとして、僕がああ道を選ぶのを誰が予測できたって言うのさ。警察もあの落石に不審な点は無いって断言してた」

「そうね。でもここは珠坂だから」

そう言う詩紀嬢は託宣を下す御子のように見えた。

「彼らにだって自分たちの手を汚すなんて考えはなかったし、口に出すこともなく、ただ心の中で想像するだったのよ。もしも、もしもあの娘らあたりが大きな怪我をして、よしんばその拍子に『血が出て』くれるなら、我が一族も安泰となるだろうに、とね。つまり彼らにも罪はないのよ」

「なら、単なる偶然だよ」

起こったのが偶然であったとしても、望んだのが当なら罪がない筈がない。

それほどに一族の栄達を願うなら、自分の目をつぶすべきだった。一か八か命懸けの賭を親戚の小さな子供に押しつけようなんて望むような連中がまともであるはずがない。

「ああ、ナナってつくづくマゾヒストなのね。ここまで言わせようなんて」

そう言うってうつむいた詩紀嬢の口元が、わずかにつり上がった。

顔を上げた彼女の顔は常日頃の能面じみたそれではなかった。

一分の隙もないアルカイックスマイル。

「私は北斗の頭『樞』であり、珠坂の紀（かぶ）として偶然を司る白銀珠比女命。（しろがねのたまのひめのみこと）その私が彼らの願いを聞き届けたのだから。自

らの意思で何も選択していないナナをしてあの出来事に責任があるなんて、甚だしい思いがりではないのよ」

ああ。

これは人の域を超越し、人の感情を捨て去ったものだ。

まだまだ理解が足りなかった。

ここまで聞いてもたとえ話だった。物語だった。他人事だった。

「それから。私の事は天候か何かがうに思っておきなさい。人間新川詩紀としての立場上、ナナが気に病むから頭は下げてみせなければ。私にナナ達の言う善悪の感覚はわからない。そのところを良く理解して。さもなくばきつとまた無駄に悩むことになるから」

さおりさんの話、先ほどの話。それらすべてが真実だと、やっと実感を持って納得できた。

血が強すぎれば。特定の鬼との縁が強すぎれば、どうなるか。

信仰の核としての役割を与えられ、鬼を降ろしっぱなしにした者がどうなるか。

さおりさんが言うように魂が脳の判断に干渉するのなら。鬼の魂に支配された新川詩紀嬢の思考は既にヒトのそれではない。きつとこれが、鬼、なんだ。

変わらない景色。天井。

さえた目に天井がさえる。背筋が凍る。

同じ建物の中にあんなモノが居る。眠れるわけがない。

あんな能力には抵抗しようがない。でも、例え無駄だと分かっているでも無防備な状態をさらせるわけがない。

先人達。斗流十家（ああ、最初は七家か）なんて集団の創始者達。彼らは自分たちが何を生み出したか分かっているんだろうか。

さおりさんの話を思い返してみる。

要するに、神と同じ力をヒトの意思で制御しようとした、って事になるんだろうけど。

そのために、よりにもよって、本来斗流が対抗すべき敵である鬼の力なんでものを使った。

例え鬼が意思らしい意思を示さなかったとしても。ヒトに理解できない意思を持っているかもしれないとは、考えなかったんだろうか。

そんな無茶をやりようとした彼らも、とうに鬼に憑かれていたのかもしれない。

4/6 金曜日

「今日は篤史さん達と一緒に登校しますからね。逃がしませんよ」
珍しく強い口調で宣言した僕に、篤史兄さん達は困惑気味だった。

「なに？　せっかく気を使ってやったのに」

どういうわけか婚約者扱いされてしまっているから、そういう態度に出ても分からなくもないのだが。あれが実は『くるる』と

かいいう鬼であると知ってしまった今では、正直ありがた迷惑。

「まさか？」

篤史兄さんは突然真剣な表情になり、

「詩紀に厭きて、俺の魅力に気づいたのか。はあ、俺って罪作り」

「とっちゃだめ！　篤史ちゃん私の！」

結香さんに威嚇されてしまいました。

「取りません」

「とか言って、油断させようとしてない？」

「ないない。ありませんって」

ううん、今日の結香さんはより一層子供っぽい気が。

「ぐるるるー」

まだ警戒されている様子。せいぜいチワワ程度の迫力しかないけど。

そして今度は背後から忍び寄る気配。

「じゃ私と行こう！」

「以下同文」

左右から飛びついてきた七瀬姉妹を、身を沈めて紙一重で回避成功。

べちっ。

「うわ速っ！　速っ!!」

「まるで別人」

空中衝突した二人が恨めしそうな顔を向けてくる。

「もしかしてわたしら避けられてる？」

「もしかしなくても？」

「あのねえ。僕が中学行ってどうするの。すぐ道分かれちゃうんじゃないの？」

二人の身につけている焦げ茶に白のセーラー服は紫城の中等部のもの。中等部までと高等部・大学は別校舎で、わりと距離があったりする。

「うーん、それも一理あるといえなくもないねっ」

「無念」

鈴菜はともかく、撫菜も一見理知的のだけど意外と考え無しとみた。

「では私たちが」

「お供いたしましょうか？」

宮藤姉妹が申し出てきた。

どうしても手袋に目がいつっちゃうな。

『シモン』だっけか。

「私たちにお任せいただければ、登校中の七夏様を完璧に守りきってご覧に入れます」

「例え暴走戦車が突っ込んでくるような事があってもご心配には及びません」

戦車で。どういうシチュエーションですかそれ。

「いやあ、女の人を守ってもらうのはさすがに」

別にボディガードがほしい訳じゃないんですが。

「出過ぎた事を申し上げました。影風情がお隣に立とうなどと」

「主家の妨げとなるのは本意ではございません。極力目立たぬようあくまで陰よりお守りいたします」

「あーあ、そんなにかしこまらなくても普通で。友達だし、僕の方が年下なんですから」

このお姉さん達も、話をちゃんと聞いてるようで、実は全然さっぱり聞いてないんじゃないだろうか。

これじゃまるで殿様とお庭番だ。

二人ともメイド服は似合ってたけど、きつと網タイツも似合いそうな気がする（偏見）。

少なくとも目立たないように忍べるタイプじゃないのは確かだね。

こうして見るとどちらの双子も変わってはいないが、思考や行動が人間離れているわけじゃない。少なくとも撫菜・鈴菜の性格は事故前からこんなだったし。

鬼が表に出てこない限り、恐れる必要も身構える必要も無いってことだ、と思っていんじゃないか。

むしろ詩紀嬢が特別なんだろう。

その特別な例が二号室のドアから顔を出し、昨日と同じ妖しい薄笑みを貼り付けてこちらを見ている。

てか、なんでまだ寝聞着？

ああ、そうか。昨日と同じ。彼女は必ず『間に合う』んだから。

しかし、ひらひらなネグリジェが似合う。似合いすぎる。

魔性のものとはいっても、詩紀嬢はやっぱりとんでもなく綺麗で。油断すれば目を奪われそうになる。きつとあれは、魔性のもののゆえの美しさなのだろう。

無理矢理に視線を振り切った。

「さ、行きましょう」

篤史さんの手を引っ張って、出発を急がす。

「こっちはわたしの！」

反対側の腕に結香さんがとりつく。

「いやー、もてもてで困るな。男にも女にも」

「そういう意図は毛頭ありませんから」

危険の有無を別にしても、こんな風にはさわりにくいじゃないですか。女の子には。

後ろを極力気にしないようにして、学校への道を急いだ。

「そう、それでいいわ」

そんな声が、聞こえたような気がした。

クジ引きだというのになぜかお隣席に。

代わってくれと言っても誰も交渉には応じてくれず。お幸せにと言われる始末。

左側を極力無視しつつ、せいぜい授業に励む振りをするほかなかった。

でもそれで集中できるわけもなく。

寝不足と空腹の応える四時限目の数学の授業の最中、校内放送のジングルが鳴り響いた。

「3年B組新川篤史、遠野結香、同C組宮藤初・終、2年C組五ヶ瀬七夏。以上の者はただちに化学準備室にまで出頭してください！（ええコレ読むんですかあ？）」なお、黙殺した場合には今学期の成績の保証はおろか明日の朝日を拝める保証もありません。以上です」

このセンスはさおりさんだな。間違いない。

しかしなぜに化学準備室。

……知り合いには仕事を押しつけやすい、って事か。

「遅いよ、七夏くん」

「すいません」

ノックした途端に部屋にさおりさんに引っぱり込まれた。オートロックのドアなので自動的に施錠される。まるで部屋に食われた気分。

部屋にいたのはさおりさんを含めて8名。

篤史兄さんと結香さん、宮藤姉妹までは予定内。さおりさんまでは予測内。

ジュウ兄さんはわからないでもない。

でも。

「やほーナナ兄、元氣そうで何より」

「ごぶさた」

「って、なんで撫菜達が居るんです？」

「猫の手も借りたいからよ」

「はいはい！にくきうレンタルします」

「延滞ゼロ円」

撫菜がギャグとぼした？！

よその学校に来てるせいだろうか。結構ハイになってるとみた。

「鬼の手も、ですか？」

初さん終さんが、手袋をはめた手をひらひらさせる。

「おまえらも、これは上手いこと言った、って顔してるなよ」

ブラック、というか自虐的な発言にジュウ兄さんが頭を抱えている。

ああ、初さんがああ言ってることをみると。本当に本当なんだなあ。信じたくないけど。

「ようし注目。それでは作戦を説明する」

指示棒でべしべしと掌を叩きながら、さおりさんが言った。

「十悟？」

「おう」

ジュウ兄さんは、ホワイトボードに貼られた珠坂市内の地図にマーカーできゅいきゅい音を立てて書き込んでいく。

近くの川に凸マーク。そこからひかれた矢印は、長い長い上り坂を一直線に駆け上る。

矢印の先はここ。紫城高等部。

「ええと、あの」

説明を求める困惑のつぶやきは無視された。

「誰か予知った？ いや、遡上を確認したのか？ 相当規模が大きそうだな」

篤史兄さんの言葉に、さおりさんは頷く。

「敵予想進路はこの通り。不発弾発見の名目で緊急の避難命令が発令され、斜線の範囲が無人となる予定だ」

敵言った。敵言いましたよこの人。

で、何が来るって？

「我々の担当区域は最終防衛ライン。優先順位は要人の安全確保、ついで敵戦力殲滅、それから諸君らの安全、最後に被害局限だ」

それってつまり、あたりは気にせず死んでもがんばれ、って意味ですか？

ジュウ兄さんが続ける。

「幸いここは丘の上。視線の通る高いビルや他の丘陵も確保されるし、マスコミも完全にシャットアウトされるから、基本的に遠慮は不要だ。派手にいけ」

宮藤姉妹が自分の胸を指さし、顔を見合わせた。

「あー初終、お前らは適度に加減しろ。さおりもな」

「配置は以下の通り。私とリンリン、それから篤史ちゃんと結香ちゃん、が前衛担当。宮藤姉妹、十悟とペンペンが後衛だ」

「見敵必殺、見敵必殺！」

鈴菜はノリノリ。可愛らしい女子中学生が連呼する台詞じゃありません、それ。

「で、僕は何をやれば」

「近衛兵。ゴールキーパー。人間の盾」

さおりさんが列挙した中では、最後のが一番本質に近い気がする。なんとなく。

「何を守れと？」

激しく嫌な予感。

「それはもう、言わずもがなよね」

「やっぱり」

「七夏君が責任持って連れてきなさい」

どうせそんなことだろうと。

そこに、ジュウ兄さんがいろいろのった台車を押してきた。

「はい」

篤史兄さんにゴルフバッグを渡す。

「これは撫菜の分か」

キャスターのついたケース。楽器の輸送につかわれるようなやつだ。

大きさから想定するとチェロか何かが入っていそうだが。

ただ、ペリカンケースにペンギンのステッカーはある意味ミスマッチだと思う。

「これは俺の」

ジュウ兄さん自身が取ったのは釣り竿ケース。

「あと、ほら、ナナ」

「おっと」

放つてよこしたケースを開けると、黒光りする鉄塊が二つ。どっかで見覚えのある小型の自動拳銃だ。

うわあ。

バッグ・ケース類の中身が想像できるんですけど。

「なんていうか、想像より安っぽい、ですね」

取り上げてみると異様に軽い。

「もともと生徒から取り上げたやつよ。ナナが使うのにちょうどいいと思って持ってきた。ガスも弾も十分あるから、持ってきたさい」

「ほれ、ホルスター」

「……」

あほくさ。

大規模サバイバルゲーム大会ですか。

「攻撃開始は17時前後と予知されている。16時には配置を完了しろ。また、本作戦は以後、クリケット作戦と呼称する。なお、バナナはおやつにはカウントしない。携帯電話は充電してグループモードにしておけ。以上だ」

つくづく、認識が甘かったようです。

詩紀嬢とともに屋上に陣取った僕は、双眼鏡をのぞきながら携帯に怒鳴っていた。

「何ですか、何なんですか、あれはあ！」

通学路を埋め尽くす黒い影。赤く光る目、目、目。

『半魚人』

さおりさんの説明は端的というか、身も蓋もない。

言葉による説明と状況証拠だけしか与えられなかった疑問に対する、何より直接的な物的証拠が目の前にあった。

『おいおい、まさか人間相手と思ってたわけじゃないよな?』

レンズ越しの視界の中、篤史兄さんは抜き身の日本刀を肩をすくめて見せた。

前衛の配置は校門のすぐ内側。後衛はさらに下がって玄関前。

「なんでもっと遠くでほかの人たちと一緒に迎撃しなかったんです! あんなたくさん来るなら、自衛隊に応援を頼むとか、地雷とか仕掛けて近寄せないようにするとか、もっと方法あるでしょう!」

『鬼退治の専門家が兵隊さん当てにしてどうするんだよ』

っていうか、あれ、鬼なんだ。

『正面からまっすぐ来たってことは、他の皆が上手いこと誘導してくれたってこと。まあ見てなさい』

前衛に立つ篤史兄さんの声には多少の緊張感こそあるが、余裕がない訳じゃない。さおりさんに至っては狐狩りでもやってるような調子だ。

でもあれじゃ暴動の真正面に立つようなものだ。しかも相手はいかにも話の通じなさそうな人外生命体。戦闘能力が人間を下回るとはとも思えない。

双眼鏡の倍率を上げてみる。

アンバランスなまでにでかい口と、ほとんど首のない胴体と一体化した頭部。なんとかフィッシュとかいうB級ホラー映画のパ

ケモノ魚を彷彿させる。

心臓がばくくんばくと暴れ、血の流れる音が両耳からざあざあと響いてくる。

あのいかにも固そうな鱗に刀なんて通じるんだらうか。

篤史兄さんやさおりさんはああ言うが、少なくとも僕の目には無策にしか見えない。

達人のさおりさんはともかくとして、結香さんや鈴菜が武器らしい武器も持たずにそんな連中の群れと対峙しているのだ。愛らしい顔が一瞬で食いちぎられ、頭を失った胴体がどうと倒れて魚人の群れの中に消えていく姿が容易く想像できてしまう。

距離を詰めてくる魚人どもを見ていると、ぺたり、ぺたりという足音まで聞こえてくるように感じられる。

自分のところまではまだまだ距離があるというのに。一步一步、鈴菜達に迫る様子を見ているだけでも気絶してしまいそうだ。

「なんで、なんで逃げないの!？」

ついに先頭の魚人の水かきのある手が門扉にかかり、そして容易く引きちぎった。

たちまち十体にあまる魚人が敷地内に入り込む。

「逃げてよっ! 鈴菜っ!」

『ここはリンリンにおまかせだよ、お兄ちゃん!』

真正面に立っていた鈴菜は右腕をぐるぐる振り回しながら魚人達の前へと駆け出し、

ばぐしゃっ。

木刀で割られた西瓜のように頭が砕けた。

ただし、先頭の魚人の頭の方がだ。

ちっこい拳の、いかにも素人じみた大振りパンチが、大物マグ

ロなみの頭蓋を完膚無きまでに粉砕したのだ。

筋骨隆々の大男が、大鉈か斧でも殴りつけたような破壊力。あまりにもあまりな光景に、僕の思考と同じく、後続の魚人達の足も止まる。

『おまえはもう、死んでいるう!』

頭の無くなった魚男の死体をびしっと指さして精一杯の低い声で脳天気に宣言する鈴菜は、相変わらずのちびっ子で。

「そんなんありかよ!」

『七瀬鈴菜、ジャンジャンバリバリいっきまーす!』

鈴菜は群れの中に飛び込み、暴れに暴れ始めた。

『あたたたたたたたた!』

型なんてない。映画館から出てきた子供がカンフーの真似をして手足を振り回しているのと大差ないというのに。当たるを幸い魚人をなぎ倒していく。

当然攻撃を試みる魚人もある。だが、鉤爪でかすめただけでも、しかけた魚人の方の腕が弾け飛ぶのだ。それこそ突進するダンブカーに、いや、高速回転するスクリューにでも殴りかかったかのよう。

「な、何なの、あれ?」

「さおり姉さんは『斧鉞』って呼んでたわ」

そう言ったのは詩紀嬢、いや、『樞』か。

斧鉞。つまり、斧とまさかり。そういう名前を与えられた鬼なのだろう。

二人が回復した事を喜んでばかりいたけれど、『血が出た』ってのは鬼の力が使えるって事でもあるんだ。

『『斧鉞』は武器であると同時に討伐の権限を意味するから。こ

ういう仕事にはうってつけということね」

ただ冷静に分析する樞に、ちょっといらっと来る。

「あなたのお仲間同士がああして殺し合ってるってのに、よくもそんな」

「私にそういう感覚は無いと言ったはずだけれど」

つい忘れてしまい、どうしてもヒト相手のように会話してしま
う。

なまじ詩紀嬢の姿をしているから。

やられてもやられても仲間の死体を踏み越えて突き進んでくる
魚人の群れに、さすがの鈴菜もじわじわと押され始めていた。

『リンリンつかれた。交代希望』

『よし、任せろ』

鈴菜に代わって、篤史兄さんが前に出る。

同時に襲いかかられる数を制限して、ローテーションで休息を
とりつつ敵を押しとどめる。これができるように、校門を絞り込
みに使ったのだろう。

篤史兄さんの戦い方はしごく真つ当だった。

魚人の爪をかわし、あるいは刀で弾き。斬撃をたたき込む。

さすが篤史兄さんは剣術体術ともに半端ない。鈴菜のような一
撃必殺問答無用ではないが、巧みに攻撃を回避しながら、最小限
の斬撃で確実に魚人を無力化していく。

が、たった一人自分の身を守りながらでは、あれだけの群れに
対する攻撃力としては到底十分とは言えない。門を維持しきれ
ず、次第に押し込まれてくる。いかに腕が立つても一人ではとら
えきれない魚人が、脇からすり抜けて門内に入り込みはじめる。

『何だよこの異常発生！ 日本近海のやつら全員集合か!? 大漁
だなおい!』

さしもの篤史兄さんでも苦情も言いたくならうもの。

「たんま、もうちょい、たんま」

頼みの鈴菜は大の字になって息を整えている真つ最中。

「まずい！ 抜かれる」

『ちっ。まだ早い、あれやるか!?』

あふれ出した数体の魚人達が、同時に血煙を吹き上げた。わず
かに遅れ、なます切りに刻まれた巨体がばたばたと倒れる。

篤史兄さんの背後に立った結香さんの髪が、ゆらゆらとゆれて
いた、

髪だけじゃない。全身がゆらゆらと不安定に歪んで見える。

『篤史ちゃん、一人で無理しなくていいよ』

『ナイス、それでこそゆっか！ 愛してるぞ!』

『えへへ。あ、ほらそっち』

今度は、何が起きたのか、見えた。
結香さんの髪の幾房かが急激に伸びて蛇のように魚人に飛びか
かり、網と化してとらえ、刃と化して斬りつけ、あるいは鉤爪と
なって引き裂く。

引き倒し、貫き、斬り裂く機能を備えた、射程数メートルの全
方位攻撃。

このシチュエーションで敵を押しとどめるには最適だ。

「確かに『^{かり}権』は変幻の鬼だけれど。形態保持を外部からの観測
に仮託する事で、不確定化の必要以上の波及を防ぎつつ、動的な
最適化を可能としたわけね。面白いわ」

樞はやはり完全に他人事って態度だ。

あれはきつと、篤史兄さんに教えてもらった“ちかぼーのバー”と同じような理屈なんだろう。不確定な武器は常に最適な武器に変わりうるし、不確定な構えからは常に最適な攻撃を繰り出せるということ。

結香さんは鬼使いなのかそれとも鬼憑きなのかは知らないけど。そんなものに頼って自分を不安定にするなんて想像するだに気持ち悪い。樞の言うのが本当なら、篤史兄さんあたりがちゃんと姿を覚えていてくれるのを当てにしているのかもしれないが、よっぽど相方を信頼していないとそうそうできる事じゃないだろう。

ほんと、いいコンビだと思う。

さて、さおりさんはいえ、時折塀を超えてくる魚人の始末に駆け回っているのだから。

「ふうん、姉さんは何も降ろしてないのね」

篤史兄さんが刀使ってさえ倒し切れないバケモノどもを手刀や蹴りで一撃必殺。

鈴菜や結香さんの魔術じみた戦いと比べても、ある意味むしろこっちの方が余計に非常識に感じてしまう。

ほんと、なんであんな真似が可能なんだろうか？

『リンリンふっかーっ！』

門では最初に張り切りすぎてへたっていた鈴菜が再加入。ごく短いサイクルでのローテーションが成立し始めた。

信じがたいことに、たった四人であんな群れを押し戻しはじめている。

後衛のみんなが何をできるのかは知らないけど、ここで一気に全員攻撃にできれば魚人達を潰走させられてないだろうか。

それをさおりさんに伝えようとした時、

ずしん。

甘かった。

ずしん。

『気づかれたかな。そろそろ前線を下げましょうか』

狭い門は一斉には通れず、しかも少数で真っ向からぶつかるしかない。個々に塀を越えれば各個撃破される。

さおりさんはいきなり物量戦になることを防ぐために、あえて弱点を残してそこを攻めさせ、魚人軍団の消耗を図ったのだろう。

これまで引かかっていた彼らが、それに気づいて戦法を変更してきた。要するに塀がなければいいのだから。

魚人達は一斉に体当たりをかけることで塀を押し倒しにかかってきたのだ。

ずしん。

「いけない！ 塀から離れて！」

もう数回の打撃で塀が倒されるだろう、そうすればいかに篤史兄さん達が強くても、瀑布のような魚人の群れに巻き込まれ、押し流されてしまうだろう。

『どいてろ鈴菜、俺がやる！』

『うつひゃあ、待避っ！』

篤史兄さんが地面に拳を打ち込んだのが見えた。

次の瞬間、引き倒された門扉を、塀を雷光が駆けめぐる。

おかしい色の煙があたりを覆い、蛙の断末魔のような魚人の悲

鳴がこえました。

「兄さんが『衝』を使ったのね」

門扉は金属製。扉にしてもブロックの間はたぶん鉄筋コンクリート。

群れが扉にぶつかる瞬間を狙って門扉に高電圧を打ち込み、扉に取りついた魚人全員に打撃を加えたという事なんだろう、きつと。

篤史兄さんはこの大技を出すタイミングをはかったのか。

敵を混乱させ、退却と体勢を立て直す時間を稼ぐための申し分ない一撃だった。

前衛の四人が扉を離れて後衛の近くまで下がってきた事で抵抗はなくなったはずだが、先ほどの電撃に対する警戒があるのだからうか。

門から入り込んできた魚人達は、隊列を組み横一列の前線を形成して、あたりを警戒しつつゆっくりと歩み寄ってきている。

『皆様、お見事です』

『完璧な遅滞戦術です』

『戦術はともかく、生臭いの何のつて。魚屋のゴミバケツに頭から突っ込んだみたいだ』

さすが篤史兄さん。冗談をとばす余裕がある。

『どうぞ』

『お、サンキュー』

そこに、初さんがバスタオルを手渡す。準備がいいというか、この状況でそんな事までよく気が回るものだ。

『鈴菜様、こちらに』

『むぐぐ』

終さんに頭と顔をぬぐわれながら、鈴菜は双子の姉に無言で親指を立てて見せる。

『おつかれリンリン』

『攻撃再開まで三十秒ってところね。十分ひきつけて、あとはまあ各自で上手いことやって』

そんなおおざっぱな指示を出すさおりさんに、誰も疑問を差し挟まない。無駄だと分かっているからだろう。

しかし半分非実体だった結香さんはともかく、普通に格闘戦をしながら返り血も浴びずにけろっとしているさおりさんがつくづく恐ろしい。

『さて、俺も年上らしく少しはいいところ見せておかないとな』

ジュウ兄さんは不敵に笑いつつ、映画でよく見る機関銃、M 60を手にとった。

『春眠不覚曉 処処聞啼鳥』

孟浩然なんか吟じつつ、迫り来る来る魚人の群れを前に悠々とマガジンとバッテリーを込めている。なんて違和感。

『夜来風雨声 花落知多少』

って、あれもモデルガンか。

この状況で役に立つとは到底思えないんだけど、誰も突っ込もうとしないところを見ると、あれはあれで何か弾に仕掛けとかがあるのかもしれない。

接着剤とか、目つぶしとか、そういうやつだ。

なんか急にせこくなってきたなあ。そういう微妙なところが十悟さんらしい。

ともに後衛をつとめる撫菜はいえ、膝撃ちと寝撃ちの間の
ような姿勢で、大型ケースに半ば身体を預けるようにして構えて
いる。

ケースの中身はやっぱり銃だったようだけど、あの寸詰まりな
フォルムとばかでかいブレーキと太い銃身は確か……お隣さんが
言ってたやつだ。そう。

X M 1 0 9 ペイロードライフル。

また、なんというか。

対物用重狙撃銃とちびっこい撫菜との組み合わせとは、アンバ
ランスにも程がある。

『ごー』
発砲。

一直線をなして十数体の魚人が倒れ、その背後の扉に穴が穿た
れ、扉の向こうで爆発が起こる。

？

あれって、徹甲榴弾？

「実銃!？」

なんで？

いや、実銃で正しいのか。

むしろおかしいのはジュウ兄さんの方じゃないか。

我ながら、怒濤の非常識展開に、まともな神経が麻痺してきて
いるようだった。

『?』

撫菜はしばし首をかしげていたが、
『しまった』

そう言ってひょいと眼帯をはずす。

そして今度は、右目で照準をあわせ、

『ごー』

先ほどに数倍する魚人が列をなして倒れていく。そして正門前
通りのはるか彼方で、一回り大きな体軀の（おそらく指揮官クラ
スの）魚人がザクロのように砕けたのが見えた。

『うん』

撫菜が満足げに頷く。

銃声のたび、一体の大型魚人と、射線上数十体の魚人達が戦列
から取り除かれる。

本来生き物相手に使うような銃ではないから（事実上の携帯用
半自動砲だし）、無茶苦茶な破壊力には納得できる。

しかし、撫菜程度の体格であんな大物の反動に振り回されてい
ないのはどういうわけだ。

さらに奇怪なのは、射手である撫菜からは見えていないはずの
相手を、視線を遮る多数の敵ごしに狙撃してるということ。

つまりは。

「あれも、そうなんだ？」

『^こ弧矢』だそうよ。つまり弓矢ね」

撫菜の失われた右目は、飛び道具を司るその鬼によって肩代わ
りされ、狙撃に特化した透視・千里眼を発揮するようになってい
るのだろう。とすれば、障害物の向こうの敵を倒しうるペイロー
ドライフルは、彼女の能力を最大限に生かせる武器だと言ってい
い。

しかし鈴菜といい撫菜といい、容姿と戦い方のアンバランスさ
が実にチャリカ的。今更ながらにそう感じてしまう。

この辺も含めてモデルなわけね。

撫菜が弾丸五発を撃ちきった直後。

マガジン交換の隙をカバーするかのよう、ジュウ兄さんが進み出た。

すばばばばば。

気の抜ける音とともに、敵最前列めがけてBB弾がまき散らされる。

むろんそんなもので魚人どもにダメージが与えられる筈がないのだが、しかし彼らはなぜか、数歩と歩かないうちに次々と地に突っ伏していく。

新たな魚人がそれを踏み越えていって弾をくらい、面白いぐらいにばたばたと、折り重なるって倒れる。

最初は催眠ガスでも詰めてあったかとも思ったが、ふと先ほどの漢詩が脳裏によみがえってきて、ピンと来た。

なるほど。

『巻舌』^{けんぜつ}。十悟さんの得意よ」

「要するに舌先三寸の鬼なんだね、実にジュウ兄さんらしいな」春眠曉を覚えす。

完徹に近かったはずなのに、僕の眠気の方は吹き飛んでる。普通この状況では寝られない。

プラスチック弾を媒介にして古代の詩人の言霊をぶつけられた結果として、彼らは戦闘の緊張感すら打ち消すほどの強烈な睡魔に襲われたのだ。微妙にせこい感もあるが、戦闘中に寝てしまう危険性については説明は不要だろう。

『牀前看月光 疑是地上霜 拳頭望山月 低頭思故郷』

ジュウ兄さんは今度は李白を吟ずる。
すばばばば。

弾を食らった魚人はめいめい勝手に振り向いて、全体の動きに逆らって後退を始める。

逆方向の流れ同士がぶつかりあって陣形をさらに崩す。

それでなくても連携の微妙な魚人達であるというのに、撫菜の狙撃で現場指揮官を次々と倒されている状態では混乱からの回復は難しい。比較的統制のとれた一部についても鈴菜達がきっちり押しとどめており、今や魚人達の進軍は停止していた。

『よし、最後尾が上陸したそう。川まで一直線！ 初・終、やっちゃえ！』

ジュウ兄さんの発破。

玄関口に並んで立った宮藤姉妹はうなずきあうと、例の長手袋を脱ぎ去った。

二人は向かい合ってダンスのような体勢で組み合い、校舎の方に向けて無いはずの手をのぼし、手の形をした光り輝く何かをつなぎあう。

『はるか北の門にて永劫の時経てなお死ぬることなきものよ』

おごそかに、すずやかに。紡ぎ出される呪文が綺麗なハーモニーをなす。

聞いたことのない言葉だというのに、その意味ははっきりと伝わってくる。
絡み合った手の周囲に無数のまばゆい輝きが生み出されていく。

『おっと、ここはやばい。逃げるぞゆっか』

『たいひー、たいひー!』

『『今こそ眠りを離れ我が元へとその力遣わせたまえ』』

転げるようにその場を離れる篤史兄さんや鈴菜。さおりさんさえ動きさえ幾分慌てて見える。

『『汝が司祭に仇なすものをうちかはらわせたまえ』』

呪文の完成と同時に、宮藤姉妹は互いに逆方向に体を開いて返すとともに、魚人の群れに向け、つないだ手を振り抜いた。

二人の手から打ち出された、細かな輝きで形成された炎のようなそれは、流星のごとく一直線に川へとひた走る。

魚人の群れに、生きた者にも遺骸にも同じように降り注いだ光の雨は、地に落ちるや輝く炎の絨毯と化してすべてを包み込み、焼き尽くし、蒸発させていく。

あまりにも美しく、そして凄惨な光景だった。

『……それなんてマップ兵器?』

篤史兄さんがつぶやく。

驚くとか恐れるとかすつとばして、あきれるほかない。

大型の燃料気化爆弾かちょっとした戦術核並みのエネルギーじゃなかろうか。それでいてたき火程度の熱さしか感じない。より無駄なく対象を破壊する魔術の炎といったところか。

そうか。

戦力配置も、時間稼ぎも、すべてはこの術を有効利用するための布石だったのだ。

最後尾までが一直線に並ぶまで前衛を押しとどめておき、きわめて強力な面制圧攻撃をもって多数の魚人を一気に殲滅する。

あるいは丘の上の学校も、四方に向かって配された無意味に広い直線的な坂道も。彼女たちのような人間砲台の存在を前提にし

てつくられていたのかもしれないとさえ思える。

あきれつつもいろいろ感心していたのもつかの間。

魚人を食い尽くすまで三十秒と掛からず。炎は次第に勢いを増し、さらなる破壊先を求めて加速度的に周囲へと広がりはじめた。

「まずいんでないですか?」

あの勢いだと、十五分もあれば珠坂の半分ぐらいは焼け野原に変えてしまいかねない。

『確かにまずいわ。十悟、手伝って』

『あいよ』

ぐいっ。

さおりとジュウ兄さんは、手を取り合ったまま背中合わせに立ちつくす初と終を両側からひっぱり、むりやり引き離した。

『ペンベン、リンリン!』

『よしきた!』

『はい』

さおりの合図にしたがい、待ちかまえていた鈴菜と撫菜が、二人の手袋を元通りにはめる。

途端、ああも荒れ狂っていた炎が瞬間的に消え去った。

先ほどまで炎が覆っていた範囲では、一面の舗装が綺麗に消失しており、鏡のように真っ平らな地面が露出していった。燃やしたというより、消し去ったと言った方が適切な感じだ。

宮藤姉妹はそのまま地面にべたんと座り込む。常に気を張っている彼女たちらしからぬ姿だが、あれほどの大技を放ったのだ。よほど消耗が大きいのだろう。

『も、申し訳ございません』

『私としたことが、危うく自制を失いかけた』

『手を離せなくなったんでしょ？ それも予想通りよ。きつちり目的は達したのだから現時点じゃ上出来だわ』

さおりさんの言葉には咎めるような調子はない。

『でもこれで、野放しの『北落師門』の危険さはよく分かったでしょう？ あなたたちが別々の初と終である事こそが暴走抑止の要だから、しっかり自分に自信を持つようにね』

『はい、宗家代理』

『肝に銘じます』

「はあ。なんとか、終わってくれたみたいだ」

制服の上着の下ホルスターに触れる。

こんな頼りないモデルガンに頼るような羽目にならずによかった。十悟さんのように便利な鬼を降ろせるわけでもないのだから。

結局、さおりさん達は最初から僕を戦わせるつもりなどなかったのだろう。

何も知らない僕に、斗流の全貌を特等席で見せるため。名前だけの仕事をくれたってわけだ。

「僕らとしては助かったんだけど。これじゃああの半魚人達にしてみればただの特攻、無駄死にもいいところだよ」

誰も怪我らしい怪我は負ってなさそうだ。返り血や臓物のおいが取れるまでは時間が掛かりそうだけど。

「鬼の君は、これを見ても何とも感じないんだろうね。くるる」

そう言って振り向いた時。

彼女の背後に数体の魚人が迫っているのが見えた。

別働隊!?

それじゃあ。

あの群れは全滅覚悟の高価な餌だったのか！

誰かが目的を果たせばいい。個々より群体としての発想、アリか蜂あたりのような発想だ。

「逃げる！ 詩紀さん！」

しかし。

僕の目の前で、彼女は進み出てひざまずいた魚人に手を差し出し、不器用な口づけを受けたのだった。

遅ればせながら、ようやく状況を理解する。

彼女は魚人に狙われていたわけじゃない。

魚人は彼女を迎えるために、僕らから奪還に来た。彼女こそが魚人達の正当な支配者、彼らに従える者なのだから。

「人と相容れぬものは、それなりの場所に行くべきよ」

彼女が、おごそかに口を開く。

「彼らは私を喜んで迎えてくれる。二千五百余の同胞を見殺しにした事さえ意に介さず、むしろ私のために滅びる事を名誉と思ってくれる」

「詩紀さん、僕らを捨てるの？ 裏切るの？」

そう、手ひどい裏切りだ。

「婚約者だって、否定しなかったよね？ どうでもよかったからだったの？」

「そうよ。私は鬼だから」

彼女の表情はあの笑みを貼り付けたままだ。

「お嫁さん候補なら、他を当たればより取り見取りよ。ペンペンもリンリンもナナが大好きだし。初さん終さんもいいわね。最初はとまどうかもしれないけれど、きつと光栄に思ってくれるわ。」

さすがに結香さんだけは売約済みだけど」

「はぐらかさないで！」

「人と価値観の違う鬼は、人々とは生きていけない。あなたに鬼が愛せて？ 運命をかき回しては大切な人を何人も奪い傷つけておいて、涼しい顔でいられるような生き物を、ナナは愛せるというの？」

何かがおかしかった。

僕はさっきから何をしてる？

誰に必死で話しかけてるんだ？

相手は非情な鬼の頭領、樞^{くわ}だってのに。詩紀ちゃんの意味なんてなくなってる筈なのに。

僕はどうして、詩紀ちゃんに対するように話してるのか。

……

ああ、そうか。

僕にはとうに分かってたんだ。

「愛せないよ。そんなものを好きになるわけない」

「なら……」

それ以上、自己否定の言葉と話さたくはなかった。

「だから、僕がこんなに好きになった相手が鬼の筈がない！」

「！」

「本物の鬼なら、なんと思われようと意に介さないだろ。僕の気持ちにそんなにこだわる君は人なんだ。自分を樞^{くわ}と思いこんでるだけの詩紀さんだ」

「……」

「こっちに来るんだ」

「そんなのはナナの勝手な思いこみで理屈をこねてるだけ。何の

証拠にもならないわ」

ふう。強情な人だな。

「証拠はそちらの心の中にあるんだから僕が証明する必要なんて無い。だから素直に認めればいいんだ。君は意味も分からず誰かの望みに動かされただけなのに、叶えてしまった悪意の結果を自分だけの罪として背負ってきたんだろう？ 悪意の主が良心の呵責から免れるのと引き替えにね。自分が鬼に支配されているって信じる事で、心の安定を保とうとしてもおかしくないよ」

「ナナは本当に残酷ね。それが好きな相手に言う言葉？ 自分を極悪非道の悪人だと認める、罪の意識におのきながら生きろなんて？」

「悪人？ そこがまず間違い」

彼女が怪訝そうな表情を浮かべた。

「詩紀さんに罪はないよ。能力をこえた責任を押しつけられたんだから、自分の意思で正しい選択も操作もできるわけないでしょう。バスの運転席に座らされた赤ん坊に事故の罪を問えると思う？」

「それじゃ、ナナは私を許してくれるっていうの？」

初めて見せた、泣き笑いのような表情。

「むしろ氣に病ませて悪かったと思ってる。きっと撫菜や鈴菜も、同じだと思うよ」

両手を開き、呼びかける。

「だから来い！ 詩紀ちゃん！」

どすん。

次の瞬間、僕は大切な人の心地よい重さを胸に抱き留めていた。

魚人達が僕らを取り巻いた。

明らかに彼らの態度が変わっている。

彼らにとっては主の話し相手である僕に對してもそれなりの遠慮を示してしてくれたからこそ、悠長に説得工作なんてやってられたわけだ。

いかに意思の疎通が困難な相手といっても、主を連れ帰る障害と見なされたであろう事は想像に難くない。

まずった。

とりあえず銃など抜いてみる。

小型拳銃二丁。武器はこれだけ。

これが本物のEyes on Zなら魚人の鱗を貫通できるかもしれないが、プラスチック弾しか撃てないモデルガンでは、目つぶしをくらわすのが関の山だろう（ボラみたいなまぶたがあったらアウトだ）。

しかし、彼らが銃を知っているなら、手にしているだけで牽制ぐらいにはなるかもしれない。

詩紀ちゃんは僕に抱きついたたま、身をもってかばうようにしてくれている。

「喚んでおいて殺すなんて、これは本当に私の罪ね。でもナナを失うわけにはいかないから」

「え？」

「ナナは知^いつて^いる^いは^いず^いよ、『珠^{しゅう}口』の使い方」

詩紀ちゃんの言葉によって引き出されるように、浮かんだ歌は

柿本人麻呂。

「大君は神にしませば天雲の」

前に一発。左右に二発ずつ。

そして肩越しに後ろに一発。

弾で六芒星を描く。

「雷の上にいほらせるかも」

ばちん。ばちん。ばちん。

歌に应えて僕らを包み込んだ電光の殻は都合三度光り、十体あまりいた魚人をことごとく打ち倒した。

「はあ、今度こそおわったよ」

「ほんとうにありがとう、ナナ」

顔を赤らめた彼女は初めて見る。

あの無愛想だった詩紀ちゃんが、心の枷を外したことでこんなに愛らしく笑う事ができるようになったのだから。

身体張って頑張ってよかったと思えた。

あたりは焼き魚とオゾン臭が入り交じったような臭いに包まれており、篤史兄さんの衝^{ゆづ}の時もこんなだったんだろうが、この際どうでもいい。こうしてだきしめると詩紀ちゃんはいいい匂いにするし。

「ひゅーひゅー！ ナナちん、しのりん、おしやわせに！」

「熱烈告白」

しまった！

携帯の回線開きっぱなしだったOL

このネタで一生からかわれ続けそうだ。

あれ？ 今、肉声も一緒に聞こえてこなかった？

ばたん。

案の定。ドアが開き、七瀬姉妹が姿をあらわす。

「こんにちは。おはようからおやすみまで、ナナちんの暮らしを見つめ続けるリンリンです」

それはストーリーカーといいます、鈴菜さん。

「この目ではっきりと」

右目を指さしてみせる撫菜。黄金色の虹彩と縦長の瞳孔は、明らかに人のものじゃない。

「……でも酔った」

想像するに左右の視力に差がありすぎるんだろうな。

詩紀ちゃんはずでに僕から飛び離れている。

「今のは、そう、感謝の気持ちを表現しただけ。別に他意はないわ」

そう来たか！

「ナナが私をどう思っよう、私の方からは何も言っではないな
いから」

可愛いなあこの人。

ぞろぞろ。

二人に続いて、満足げな篤史兄さん。にこにこ笑顔の結香さんが屋上に上がってくる。

申し訳なさそうな宮藤姉妹。

にやにや笑いの十悟さん。

最後に出てきたさおりさんの表情を見たとき、突っ込まずには
いられなかった。

「近くにいたんなら手かしてくださいよ！」

「愛しい七夏君の気持ちを試したくて、あわよくば自分のために

頑張る活躍が見たくて魚人を喚んだんでしょ？ 期待を無碍に
はできないわよ」

「……別に期待なんてしてなかったわ」

そういうの無駄な抵抗な気がするよ。しかも墓穴掘ってるし。

「誰も詩紀ちゃんの事だっけ言っないけど？」

「うー」

あー、ほんと可愛いなあもう。

「（＼＼）ジサクジエーン」

「意外と乙女チックなところもあるんだな」

男性陣はわりと好きなこと言っている。

「むー」

「別に非難するつもりはないわよ。結果オーライだし」

とかさおりさんは言ってるけど、きつと企んでたに違いない。

証拠はないけど、結局この人の掌で踊らされた気がする。

「ついでに実戦トレーニングで経験値稼ぎ、あと増えすぎた魚人
の間引きもできて一石三鳥ってところね」

初さん達はレベル十個ぐらいい気に上がったんじゃないかな。

ファンファーレ鳴りっぱなしな感じで。

「しっかしナナよ、詩紀が正気だっけよく分かったな」

十悟さんに肩を叩かれた。

「初さん達のアレをみてたから気づけたんですよ。力の一端を借り
ただけであなんだから、本物の鬼の頭領が顕現してて、個人
レベルの生死や怪我程度ですむはずがないでしょう？」

「さすが七夏くん。いい勘してる。確かに樞は休眠中。もしあれ
が起きてたら詩紀ちゃんをどうこうする程度じゃすんでないわ
ね。何かできるとしたら、『北落師門』を暴走させるぐらいかし

らね。それこそ列島まるまる消しにかかる勢いで」
 実際に見た感想じゃ、あのまま放っておいたら勢いだけじゃなくって本当に消しかねなかった気がする。

もちろん僕らごと。

「へえ、あの感じだと絶対混ざってるって思ってたんだけどな。演技かよ。ひでえ妹だな。ぐっ!？」

篤史兄さんの両脇腹に宮藤姉妹の肘が入る。

「あら、申し訳ございません。ほんの事故です」

「失礼いたしました」

とか言いながらぐりぐりねじ込んでるし。

このお姉さん達、やつぱり怖っ。

それにしても結香さん、相棒のピンチに気づいてないみたいだなあ（笑）

「だいたい詩紀、いつも無愛想なくせにナナ相手の時だけ態度変わらすぎだったよな」

さらに足まで踏まれているのに痛みをこらえながら突っ込む根性は立派だけど、何の意味があるんだろうか。

「相手や状況によって態度を変えるのは当たり前です。兄さんは空気読めなさすぎです」

詩紀ちゃんの仮想鬼モードは、今や篤史兄さん相手にもとけてしまっている。

そろそろ援護射撃に入ろう。赤面する彼女は可愛いけど、ちょっと可愛そうになってきた。

「読み過ぎだったんだよね、詩紀ちゃんは」

「大きな力を統べるには、仮借も斟酌も必要ないばかりか害になるものよ。でもそうした態度を取るために心を殺し続けて

いれば、人格の改変にも繋がるわ。結果としてあたかも本来の持ち主のようになるのは当然でしょうね」

ナイス弁護です、さおりさん。

「ただ詩紀ちゃんの場合は、素の自分を鬼とは別に保てる要因があったから、七夏君相手には本来の性格を出すことができたのよ」

「また遠回しな言い方して。どういう意味だよ、そりゃ」

と、十悟さんが急かす。

「そういうのに詳しい知りあいに診てもらったことがあるんだけどね。私と同じ見立てだったわ。詩紀ちゃんは特殊な多重人格なのよ」

またややこしいことを言い出した。

「つまり、私は病気だということ？」

「病気とは違うわ。いわゆる解離性同一性障害¹との差異は、記憶に途絶や混乱がなく、お互いがそれぞれの存在を認識しあっているってこと。一人で複数の役を演じるのではなくて、別々の役者がシーンごとに交代しつつ同じ役を演じるような状態を想像してもらおうと近いかな」

「わかるようなわからないような。なんでそんな奇っ怪な事になるんだ」

「わたし、わかりません」

結香さん、あきらめるの早いな。考える事は篤史さんに任せきってる感じ。

「単純よ。七夏君には魂と量子論的確率の偏りの話をした筈よね」

「脳単独での思考は偶然に支配されるけど、意思を持った魂が関与する事で初めて方向性が与えられる、って話ですね」

自分の意思で選んで行動していると思ってるだけで、実

はそんなものはないかもしれない、という気持ちの悪い話だった。

「彼女^{アリス}は並列^{マルチ}多連精^{デュオ}魂^{ソウル}って呼んでたけれど、要は複数の魂が一つの肉体と連携している状態。詩紀ちゃんはいわば二連精^{デュオ}魂^{ソウル}ね。ちなみに私はあえてセカンドコアを区別する必要があるときには、樞^ミの名代としての彼女を詩紀ちゃん、人としての彼女を美紀^ミちゃんって呼んでる」

「なるほど。他に鬼が居るのなら、残ったこっちは自分。他に自分が居るのなら、こっちは鬼。そんな感じで役割分担が決まったんだろな」

篤史さんが上手いことまとめてくれた。しかし理屈はさておいても。

「何故に『みのり』ですか？」

「そこはそれ、お約束だから。まあ、漢字は『美しい』をあててるつもりだけだね。鬼が入ってるのもどうかと思うでしょ」

「うわ」

「そりゃ冗談にならんわな」

篤史兄さんと十悟さんだけが領いてるところをみると、どうやらなんかまたマニアックなことを言っているようです。

「じゃあ、樞^ミなんて鬼が憑いたせいでその、デュアルコアになっちゃったんですか？」

とすれば、元凶はその鬼なわけけど。

「むしろ逆でしょう。斗流の始祖は双子の巫女だったそうよ。それでなきや、いくら相手が休眠状態とはいえ人の身で九頭竜なんて降ろせるはずもない。斗流の歴史上、樞^ミを使えたのはこれまで始祖だけだったんだから、二つの魂は条件であって結果じゃないと思うわよ」

と、さおりさんは言う。

「北落師門を扱えるのが私たちだけというのと同じようなものですか」

初さんが挙手して発言。

「おそろくね。それを考えると、天才的才能を秘めた六つ子とか八つ子、みたいのなら、鬼どころか名のある『外側の神』でも降ろせるかもしれないか思ったりもするけどね」

それがどんなものかは知らないが、どれほど危険なことかは想像がつく。

「まあ、実際にそんなの居たら即排除よ。人類全体の命運に影響しかねないから」

さおりさんは冗談めかして言うが、仲間であっても危険すぎるなら排除する、とそう宣言したようなものだ。

皆同じように感じたのだろう。しばし会話がとぎれるが、

「まあなんだ。さおり姉に目をつけられないよう気をつけなさいけないわけだ。詩紀の中の人も大変だな」

「中の人なんかいない」

ぶい。

新川兄妹の掛け合いに、空気がちょっと和んだ。篤史兄さんはこういうフォローもできる。かき回す方が多いけど。

「それにもしもの時はナナが守ってくれるわ。ナナは私にぞっこんだもの」

ああ、つまり今は美紀ちゃんの方か。

そんなに恥ずかしがるなら言わなきやいいのに。

詩紀ちゃんの時だと、そういう事言いたいとは思わないわけかな。

「いやあ、さおりさんに敵う気はしないから。自制してよ、えと、美紀ちゃん？」

「詩紀でいいわ。そんなの姉さんが言ってるだけだから」

「了解。でも美紀ちゃんって名前も可愛いと思うけどね」

「……たまに呼んでもいい」

みなが一斉に手を合わせた。

「「「「ごちそうさまでした」」」」

「っ！」

からかわれるの嫌がるくせに燃料投下しちゃうところ、詩紀ちゃんも結構迂闊だね。

「ナナはそう言うけど、意外といい勝負になりそうな気はしてるわ」

意外にも、さおりさんはそんな事を言い出す。

「七夏君の鬼の名『九州珠口』はマルチリンガルを意味するそうよ。『巻舌』の放つ言葉さえ呪言となるなら、天の国々のあらゆる言葉に通じた者が一流の術師でない筈がないでしょう」

そうなんだ。

無我夢中でそんなものを喚んでたのか、僕は。

「しかも五ヶ瀬七夏に『Five-seven』。そんな言葉遊びでさえ呪的回路をなして増幅効果を発揮するものなのよ。古来の儀式が多分に語呂合わせの要素を含んでいるように。そういうわけだから、五七五七七の短歌が七夏君の呪文に適しているのは説明するまでもないわね」

なんだそりゃ。マンガですか。

「出来過ぎですね」

「願いを叶える珠坂の女神に望まれたヒーローなんだから、そり

や出来過ぎに決まってるわよ。それよりも、」
さおりさんの浮かべたいやな笑顔。

「例の事故のあと、七夏君はショックで一時期失語症になってたでしょう。そのときに鬼が『憑いた』んでしょね。肉体自体ではなくて機能的な欠損についても召喚の条件を満たしうるのか、実は外傷による失語を鬼が補ってるのか。そこいらへん実に興味深いわ」

あー。

喚んだのじゃなくて、既に憑いてた。

ってことは。目をつけられたらまずいってのは他人事じゃないわけ。

「研究には協力しますから、解剖だけは勘弁してください」

「それは観察に飽きてから」

否定してください！

「誤解があるようだから言っとくけど、私だってあんたらを狩りたいなんて思っていないわよ。めんどくさいし」

ああ、言っちゃった。

さおりさんの辞書には齒に衣着せるとかいう言葉はないようだ。

しかもめんどくさいで。

「私に手間かけたくないなら、あんたらが暴走しなければすむこと。心も体もしっかり鍛えて、ゆるがない自信を身につけなさい」
揺るがない自信ねえ。この人が言うと言得力ある。

「あの、一つだけ聞いていいですか？」

「オウケイ」

「篤史兄さん？」

「グレイト」

不明瞭な発音でもごもごと英単語を発しているが、きつとなにかのネタなんだろう。無視しておく。

「篤史兄さんにしてもさおりさんにしても、よくそんなに落ち着いてられますね。詩紀ちゃんみたいに悩んだ事はないんですか？」

「それは！」

「深刻になっても始まらないもの」

「それはっ!!」

「あるがままを認める自由さ。いわゆる観自在心ってやつ。鬼とつきあっていくにはしなやかさが大切なのよ」

言葉だけ聞いていると、悟りを開いた、とでも言わんばかりだけど。本人を見ていると無神経との差は紙一重な気がする。

「それはあっっっ!!」

篤史兄さんはなぜか次第に甲高い声になっていき、

「やかましい」

さおりさんの捻りの入った掌打に吹っ飛ばされた。

「姉貴い、もうだめだあ！」

適当。ノリ。棚上げ。それはそれ、これはこれ。

だからこんな人達になるんだな。

4 / 13 金曜日

本日放送のチカリカ5最終回。

仮面をとった二人の敵は、なんとチカリカそっくりだった。

彼女たちは宇宙人に救われた本物の千佳穂と理佳穂を名乗り、

二人は死にかけていた千佳穂や理佳穂の意識をコピーして人間の真似をしている宇宙人に過ぎないと断じた。

自分が本当に千佳穂や理佳穂なのか、それとも

自己の存在に悩んで戦いに集中できない二人。しかし、その恐怖心はもう二人のチカリカにも伝染する。

どちらかの記憶が間違っている。あるいは、どちらもコピーに過ぎないのかもしれない。

四人は一端休戦することとし、まずは真実を突き止めること。

そして偽物の方が消える事を約束しあった。

そして、近くに住む幼なじみにの男の子に自分たちの正体を明かし、これまでの経緯を語って判定を委ねる。

「やっぱりあれは千佳穂と理佳穂だったのか」

少年は気づいていた。

「きつとみんな騙されてたんだね」

そして、彼はたやすく推理してのける。

宇宙人達は仲間の罪の減免と引き替えに逃亡した犯罪者の追跡を要求され、互いに相手を逃亡者と勘違いするような命令を与えられて地球へと送り込まれ、つぶし合いを演じることを期待されていたのであろうことを。

そんなのもうどうでもいいことだ。と、二組のチカリカは、少年に判決を迫る。

「二人とも千佳穂、二人とも理佳穂だよ。僕には区別がつかないし、区別をつける意味もないと思う」

口々に苦情を言う四人に、少年はひょうひょうとしたもの。

「君たちはそれぞれ別々の存在なんだから。双子が四つ子になっただけでしょ？ どっちがどっちのコピーなんて、些細な話だ

よ」

少年はさらに、宇宙人達を追放した者達との今後の接触を予想した。

五人は悪意の存在を知るものとして、地球を守るべく力を合わせることを誓い合った。

そしてそれぞれの道を進んだ彼らが、何年か後に一流の人物となって再会したところで話は終わっている。

僕と篤史兄さんは後番組紹介が流れている前で膝つき合わせていた。

「ハッピーエンド、ですよ」

「ハッピー、なんじゃないか」

問題は別のところにあった。

「それより、ナナっばいよな、あいっ」

「肯定したくありませんが、否定はしません」

無茶苦茶女の子っぽく描写されている。

「なんとなく、どこかで聞いたような話だよな」

「ええ。細かい話は全然違いますが、ニュアンス的に」

「説得シーンとか特にな」

実にいやな感じだ。

「これつくったの、先週の事件より後ってことはないですよ？」

「どんなに遅れてたとしても、少なくともシナリオに関してはありえんだろ」

あはははは。

篤史兄さんの乾いた笑い。僕もきつと同じような顔をしている

事だろう。

「さおりさんには、絶対逆らうのやめときます」

「そうしろ。俺もそうする」

4 / 16 月曜日

不発弾の爆発による、損害の復旧は着々と進んでいた。今はまだ遠回りしなきゃならないが、来月にはものとの通学路に戻るだろう。

でも僕にとってはむしろ遠回りの方がよかった。

「ふう。結構きついね」

「情けないわね、ナナ。こんな坂で息が上がるなんて」

詩紀ちゃんが腕組みして言う、容姿もあいまって結構迫力がある。

「ほら、仕方ないから手を引いてあげるわよ」

「ったく、公道で恥ずかしげもなく」

「篤史さん達には人のこと言えませんか」

なんと、ご機嫌な結香さんを肩車してたり。

「おまえらと違ってやましい気持ちはいくらもありません」

「私にもありませんからっ！」

この神がかったような完璧で冷静沈着な、でも時々迂闊で意地っ張りで恥ずかしがり屋の少女と少しでも長く並んで歩ける事を喜び。

そのチャンスをつくってくれた鬼、樞にも、少しでも感謝を捧げたのであった。

東雲家五兄弟記録簿

〜冬服眼鏡っ娘党事件〜

なぎ

普段見慣れているもののほど、変化に早く気付くことが出来ると思っている人は多いだろう、しかし、実際には自分が見慣れているものほど先入観にとらわれて変化を認識することができない。全体が見えないものであればなおさらである。

学校の正規の時間割を終わらせてからの退屈な自己学習の時間が終わるとすっかり夕方だった。寛は新緑の暖かさと、始まっていく夜を迎えるキンとした涼しさを感じながら自転車走らせていた。ふと自宅のある方に首を向けると遠目に自宅が見えた。少し前までは見えないくらいに真暗だった気がするから相当に明るくなったのだろう。その変化に口元がにやつとしながら自宅を見続けるとザラツとした感触を脳に感じた。何かが違う気がする。違う家かとよくよく見てみるが、やはり自宅である。自宅に相違ないハズなのに感じる違和感を気にしつつも、家に帰ればわかるだろうと夕闇に吸い込まれるように緩慢になる足を進ませた。

自宅に着いてみると先ほど感じたような違和感はなくなっていた。周りの家から比べると完全に取残されたような古い我が家、黒ずんだベージュの壁と塗装の剥がれ書けたトタンの屋根。台所から漏れる光が薄闇から手をさしのべている。

いつもより丁寧な納屋に自転車止めつつ、見上げてみてもいつも通りの我が家だった。

今時少なくなってきた、引き戸の玄関をカラカラという音とともに開けると、また違和感を感じた。普段は感じない臭い、香水の香りだろうか。三和土を見ると見慣れない女物の靴があった。来客が違和感の正体だったのだろうか。そうなると遠くから家を見たときに感じた違和感を感じるのはおかしい事になるが、答えが出たことで瞬間で考えを払い、そろりと玄関の床に足を下ろした。

「ただいまー」

寛は家の奥の台所に聞こえるように少し声を張って言った。自転車の数から言っても、家には母と見慣れない靴の持ち主しかないはずだった。

「おかえり」

ほぼ同時に返事が返ってくる。一つは母のもので間違いないだろうが、もう一つの返事おかえりというよりもどちらかというと「ほおかえりー」と聞こえた声の主は誰だろうか。普段こんな時間まで来客がいることは珍しいのでなれない感覚で廊下を進む。玄関と居間を仕切るふすまをかけたときにその答えが出た。

居間のテレビの前には座布団を引き、よく言えば堂々と、悪く言えばだらしなく寝ている女性がいた。姉の真由美である。体をテレビに向けたまま、首だけでふすまの開く音が下方向、つまりは僕の方を振り返っていた。口の中にはせんべいが収まっていて口から頬にかけてうにょんといった感じで伸びて完全に間抜け顔である。

「あ、寛ほおかえりいー」

口にせんべいを加えたまま、まー姉はもう一度言った。

「口に、もの入れたまま話すなよな」

「いいじゃん、寛になんて気を遣う必要ないし」

今度はしっかりとせんべいを離していた。

「帰ってたんだ」

「うん、ちよっと前に着いた」

真由美と寛は十二も歳が離れた姉弟である。そのため、真由美と寛が同じ家に住んでいたのは寛が小学校に上がるまでで、真由美は大学に入ってから長期の休み意外は実家に帰らなかった。寛は真由美の事は姉と言うよりもちよっとした親戚くらいに感じている。そんな姉が自分の家でくつろいでいることに、やっぱりこの人も兄弟なんだと考えていた。

子供の頃から年上の女子の代表だと思っていた姉は久しぶりに見てもやっぱり大人で、つやのあるダークブラウンに染まった髪は肩の上あたりでそろえてあり、振り返った顔にかかる髪が色っぽかった。時間に負けるものと装備されたファンデーションは完全武装されつつも横顔に若干の無防備な部分を残しており、白から薄黄色へのグラデーションに若干の哀愁を感じた。セルフレイムのコンタクトお休みの眼鏡から覗く瞳にはマスカラとアイシャドウが施されていて、口にくわえたせんべいと身にまとうゆるゆるのジャージとの対比で逆に魅力が増しているように感じた。

「なにじっと見てるのよ。はずかしいじゃない」

目をきつと細めて怪訝そうな顔をして真由美が言った。

「別に」

自分の妄想を見透かされたような言葉に動揺を感じながら寛はそう答えた。

「いつまでいるの」

「まだ、ひみつー」

真由美姉は昔から寛に対して秘密を作りがつた。姉の秘密はいつも結果としては悪い結果になることはなかったので、寛は真由美それ以上聞くことはしなかった。

自室に入って、小一時間くらい復習をしたり、横になって本を読んでいると、階下から呼ばれた。夕食のようだ。

リビングに入ると食卓には、真由美の他にいつのまにか帰ってきたのか、双子の妹である麻美が座っていた。

「おう、おかえり」

と麻美に声をかける。

「ただいま」

仏頂面のまま、麻美はぼそっと応じた。

双子の兄妹として育った寛と麻美は、兄妹である以上に同い年のライバルだった。小さい頃から競い合ってきたが、高校生になり別々の高校に通うようになってからは、寛は理系、麻美は文系であることもあって競い合うこともなくなってきた。最近の麻美の素っ気ない態度に寂しさを覚えつつも、兄妹ってはそのものだろう考えていた。

食卓には母、真由美、麻美、寛の四人が着いている。いつもバイトため帰りの遅い姉の美紀と父は除いての夕食になるようだ。

東雲家は食卓にそろった三人の兄弟に加えて、美紀と家を出て働いている兄である誠を加えた五人兄弟である。長女の真由美と寛と麻美の双子年の差は十二歳もあることもあり、全員がそろるのは年末年始くらいである。

食事が始まると突然、左手にお茶碗を持ったまま真由美が立ち上がった、唐突な上にマナーのなっていない姉である。

「大発表がありまーす」

いつもながら脳天気そうなのである。

「私、今日からまたこの家に戻ります。またよろしくね」

「え？」

普段は意見の合わない双子だが、こんな時は恐ろしいほどにタイミングが一致する。

「大発表過ぎるだろ。今日からだなんて」

「だいたい部屋はどうするの。また寛と同じ部屋なんて私嫌だからね」

心底嫌そうな顔で麻美が言った。そんなに嫌そうな顔をされるに困るが、寛も高校生にもなって双子とはいえ男女が同じ部屋になるのは困ると感じた。

「心配いらないわ。部屋を増やしたから」

「どこにそんな金あるんだよ」

そもそもこんなボロ家、改築したら壊れるかもしれないじゃないか。

「ん、増やした？」

ふと、寛は疑問に思った。

「うん、家守様にお願ひしての部屋の隣に部屋を増築してもらったのよ」

家守様はうちの守り神であり、普段から家族が家内安全や健康を祈っている。母が家守様の名前を挙げたと言うことは、家守様に祈っている力を使ったということだろう。確かに兄弟が大きくなってきたことで、家守様の力を使うことは少なくなってきたとい

た。寛はそれを見越して、いずれ自分のために力を使えるのではないかと考えてのだが、家を改築したとなれば、家守様の力はかなり使われてしまっただろう。

「ただ、そのまま、部屋を増やすと一階よりも二階が広くなっちゃうから、あんたたちの部屋も少しずつ狭くしてもらったわ」

寛がっかりしながらうなだれていると母が更に衝撃的な事実を伝えた。部屋を狭くだと。勝手に部屋を狭くしたということは部屋の中のものの配置が変わっている可能性がある。

「空間は有限だから、狭くするときに、ちよっと家具を動かしたわよ。真由美と二人で。おもかったわー」

「安心してね。寛のコレクションはちゃんとまとめて置いたから」

真由美が寛の一番気にしていた事を言った。寛は普通の高校生であるから、性についての興味も普通の高校生並にある。ただ、そのコレクションを親兄弟の目に付く所に置くことは出来ないで、机の引き出しの奥やベッドの収納の奥など出来るだけ探しにくい所においていたのだ。それを母親と真由美に見つけられてしまったのである。高校生にとって一番センシティブな話題を出してくるとは許せない。麻美は不潔なものを見目で見てくるし散々だ。

思い返せば、帰ってくるときに自宅を見たときに感じた違和感。真由美姉が帰ってきたことを違和感として感じたのだと思っていたが、自宅が広くなっていた事が違和感だったのだろう。部屋が増えるというありえない事態が、あまりに自然に発生したので、それに気がつかず、違和感という形で感じていたのかもしれない。

「なにとはともかく、よろこれからよろしくね」

取り繕うように真由美はいうが、だまされないぞ、返せ、俺の願いと秘蔵のお宝と尊厳。

昨今、祈りはかなうものと信じられている。人の願いを現実世界に投影するリアライザーの発明というか発見により人々の神々への信仰、願いといった力のある想いが物理世界に還元されるようになった。原理は解明されつつあるというが、僕にはよくわかっていない。説明されても理解できるものではないという事は理解できるが。リアライザーの発見当初、発見者に関連する宗教法人による、地方都市の占拠事件などもあり、リアライザーのもちろん、発見当初は宗教法人ではなく、行政機関や一般企業での応用も検討されたが、想いを集めるという部分に置いてはある種の、信仰・信奉といった宗教的な願いでなければ実現できないということが判明した。

政府は登録された宗教法人にリアライザーの使用を許可するとともに、願いの一定割合を行政目的に使用させる「宗教法人による現実化装置運用に関する法律」を制定し、その運用を開始した。様々な願いがかなえられ、現在解明されている物理法則に超えた様々な現象が観測される様になった。

寛は校舎から文化部部室棟に向かって歩いていった。

遙か昔、十五年ほど前に工業高校から普通高校に変わった工業高校の時には活気に満ちていただろう、木工や鉄工、機械と言った技術を教えていた建物は今も残っていて部活動の部室として利用されている。広くて大きな作業部屋は運動部の道具置き場として、手狭な準備室は文化部の部室としてあてがわれている。そんな

な文化部部室棟の中の一つ、最近建てられた新校舎によって、日陰になってしまった部分に我が冬服眼鏡っ娘党の部室がある。

鋼製のドアを力を込めて開けると、部屋の中から蒸し暑い空気が流れてくる。元々遮熱などは考えていない上に長年の劣化で通気性の良くなった部室だが、春から初夏に変わりつつある季節の日差しは部屋を天然のサウナにしてみようのには十分なようだ。た。

広くない部室を見渡すと、以前校長室で使っていたと言われる古い応接セットのソファにぐったりと腰をかけて、シャツの裾を持ち上げて下敷きであおぐ男子がいた。服眼鏡っ娘党の二人しかない部員の一人、山本修だった。

「遅えよ。暑くて死ぬかと思ったぞ」

顔をこっちに向けるのもだるいという様子で、下敷きをあおぎつつけながら言った。

「いつ来るなんて決めてないだろ。それに暑いなら窓を開ければいいじゃないか」

寛は長年の埃がサッシに詰まっちゃまっている上に、車輪が欠けているのか重くてなかなか動かないサッシをふんぬと力を入れて開ける。いくら力を入れても手の平ぐらいしか開かないサッシだったが、締め切っているよりはマシで、外の涼しい空気が吹き込んだ。

「その窓を開けるのはお前の仕事だしな。それにそろそろ来るんじゃないかと思ってんだ」

外からの涼しい風を感じるために、修はぐったりとした姿勢から体を起こした。

応接セット周りには金属製の書類キャビネットが所狭しと置いて

であり、長年の活動による無数の資料が木の年輪の様に積み重なっている。

部室の奥を見ると埃だらけの部室にぼっかりと穴が開いたように塵一つない空間があつて、そこにはトルソーにかけられて大事そうにセーラー服が置いてある。それも冬服のセーラー服である。これは我が冬服眼鏡っ娘党のご神体である。このご神体は冬服眼鏡っ娘党の誕生には欠かせないものである。

時は十年ほど前、当時の生徒会長だった、寛の兄誠が突然「女子の制服をセーラー服、それも冬服に限定する。同時に眼鏡の装着を義務化する」と言い出したことに始まる。男子でありながら、女子の制服を着こなすという奇特な生徒であつた誠には男女を問わず信奉者が多く、無謀極まりないアイデアにも関わらず生徒達の支持を集めていった。しかし、生徒達の支持にもかかわらず、教職員やPTAの役員達には当然聞き入れられず全く無視された。誠はこの事態にも全くひるまず、新たなアイデアでこの製作を実現することにした。生徒たちの圧倒的な支持の元で誠は学校内に宗教法人を設立し、生徒たちの願いの力によって、政策を実現することにしたのであるこれが「冬服眼鏡っ娘党」の始まりである。

生徒会長は「冬服眼鏡っ娘党」に集まった、願いの力によって「冬服眼鏡っ娘」の制服化に成功した。その後、願いの力によってかたつたとはいえ、事態を良く思っていなかった教職員達が制服をブレザーに変更するまではその効力は維持された。

というわけで、今では完全に形骸化している宗教団体であるが一度認定された宗教法人やご神体をむげにするわけにもいかず、学内に宗教団体があることによって、生徒の願いを集め困った生

徒がいれば助けるという互助会的な使い方も出来ることもあつて、明確な支持者がいなくても関わらず今でも宗教法人「冬服眼鏡っ娘党」は維持されていた。

宗教法人と言っても、高校にある以上普通の文化系の部活と活動にそうかわりはない。むしろルーティン的な作業が多いのでバイトみたいなものである。毎日のご神体の清掃（ご神体は当時の生徒会長つまり誠が着ていたセーラー服である）、願い事の確認を行い、かなえた方が良くと思われる願いの調査、生徒会からの要望の確認などである。

つまりは完全に雑用なので、好きこのんで活動に参加する人は会務である。寛も入学したての春に担任に兄が作った団代なんだから責任を持つて守れなどと説得されなければ、党に入ることはなかっただろう。修も担任に説得されて入ったと寛は聞いていた。後輩の一、二年生もいることはいるが当番と定例の打ち合わせがなければ部室に来ることもない。今日は寛と修の当番なので、寛と修の他には来ない。

ルーティンの作業を追えて、応接セットのソファでだらけていると、部室のガラスが突然叩かれた。

「おい、東雲いるかー」

教師と思われる声に驚きながら、寛は重いガラス戸を開けた。

「あ、宮村先生。どうしたんですか。こんな所まで」

「実は東雲、というより冬服眼鏡っ娘党にお願いがあつてな」

「お願いですが？ 中であかがいますのでおかけください」

寛はソファを勧めながら考えていた。宮村先生は寛のクラスの担任で、三十代前半若めの先生の中ではわりと熱い先生だと言わ

れている。そんな宮村先生が「冬服眼鏡っ娘党」になんの用があるのだろうか。そのお願いが五人兄弟たちに関係があるなんてとうてい想像できなかった。

ほんメイー Fukapon

1 転落した彼女

「あー、もうっ、なんで雨降るんだよっ」

夕刻になり降り出した雨は、強まるばかり。

「こんなことなら適当な傘を拝借してくるんだったな」

走る彼の制服はすでにずぶ濡れで、走ることにはもう意味がない状況だ。

「ん？ 何してるんだ？」

しかし彼が歩みを緩めたのは、自身の状況に気付いたからではない。

「おい、そんなところにいたら風邪引くぞ」

帰り道にある小さな公園。

そのブランコに、少女がちょこんと座っていた。

「聞こえてんのか？ 傘もなしに何やってるんだ？」

「うるさい。何してたっていいでしょ」

心配を口にした彼を、少女は一蹴した。

（うっわー、可愛くねえな）

白いブラウス越しに透ける肩のストラップを見るに、体軀は幼いが、中学生か高校生と言ったところだろうか。

「そりゃそうだけど。風邪は引きたくないだろ？ 帰った方がいいぞ」

「あんたこそ帰るなさいよっ。——えっ!？」

「せ、せんせっ!？」

顔を上げた少女も、対峙した彼も、あからさまに驚いていた。濡れた黒髪が顔やら首やらにまとわりついた少女を。

すっかり重たくなったブレザーを纏う彼を。

二人は知っていた。

「ま、松田くん^{まつだ}っ、何をやってるんですか？」

「何って、それは俺の科白だから。何やってるんですか？」

再び俯いた少女は、雨音にかき消されそうな声で答えた。

「……家出」

「はあ？」

「聞こえなかったの？ 家出、家出よおっ!」

足下の泥水をびちゃびちゃと蹴上げながら、あらん限りの声で答える少女。

しかし少女は、本当の少女ではない。

「いや、聞こえてますけど。家出って、子どもじゃないんですから」

彼の担任であり、十分立派な大人である。

「うー、正確には追い出されたんだよう……」

それでも彼女は見事な膨れっ面で、明後日の方を向き呟いた。

「はいはい、何があったのか知りませんが、早く帰ってくださいね」

「やだ。帰らない」

「ホントに風邪引きますよ？」

「いいもん、私なんかいなかったってみんな困らないし」

教え子たる彼は呆れ果て、土砂降りの中にも忘れることも忘れた。だ。

「子どもじゃないんですから……」

「子ども子ども言うな。紬^{つむぎ}は大人だもんっ!」

「いや、その態度が――」

子どもなんですよと言いかけたとき、彼の目に細腕が映った。
(ほら、そんなんじゃ風邪引きますよ……)

ピトツとブラウスが張り付き、ブランコの鎖を小さく振るわしている。

「まあ、とにかく。うち近いんで、ほら、行きますよ」

「……仕方ないから、行つてあげる」

カタンと音を立ててブランコから降りる。

重く濡れた服で、二人は足早に公園を去った。

「ただいまー。姉さんいるー?」

玄関から家の中に向かつて、彼、松田光太は叫んだ。が、全く
応答はない。

「珍しいなあ。この時間にいないなんて……」

光太が首を傾げている間にも、彼と、隣の風間紬からは、ピチャピチャポタポタと雨のしずくが落ち続けている。

「えーっと、とりあえず、シャワー浴びましょうか。こっちは」

靴を脱ぎ廊下に出ると、彼は手を差し出した。

「ありがと。優しいね」

「ずぶ濡れのお子様相手に冷たくできないでしょう?」

「うー、お子様って言うなあ」

手を取った指先は冷え切っており、早くシャワーに思うも。
彼女は片足を上げようとして、再び、パンプスの中に戻した。

「どうしたんですか?」

「床、濡れちゃうよ?」

足下の水たまりを見て、自分の状況に気付いたらしい。

「気にしなくていいです。俺が上がった時点で濡れてますから」
「……ごめんね」

下りた許可にしゅんとしながら、今度こそ片足ずつ、廊下へと上がる。

光太は握った手をそのままに、風呂場まで案内した。

「風呂場、ここです。あんまり綺麗じゃないのは勘弁つてことで」

脱衣所のドアを開け、彼女を招き入れると。

繋いでいた手を離して、風呂場の中を指差した。

「えーっと、操作はわかりますよね? 普通の給湯器ですから」

操作パネルを見ながら、紬はこくんこくんと頷いている。

「それじゃ、お先にどうぞ。あ、服はその辺に置いてください。
洗濯しちゃうんで」

彼女の反応を見て光太は踵を返し、何とはなしに脱衣所を出る。つもりだったが。

右腕がどうも、後ろに引つ張られる。

「……何か、わかりませんでした?」

彼は上半身を捻り、視界の下寄りにある紬を確認すると、ふる
ふると首を横に振っている。

(ん? 何だ?)

小首を傾げ心中を表すと、腕を引つ張る彼女は答えた。

「一緒に入ろ」

それはつまり、一緒にシャワーを浴びようという女の子からの
提案。

濡れた瞳で、上目遣いで……。

尤も、ずぶ濡れで、とても低い身長で、その容姿は自然なもの
でしかないのだが。

「え、えと、あの、先生、何を――」

ここまで疾しい気持ちは一切なかった彼だが、状況と合わせて心境も一変、鼓動は唐突に早まった。

とは言え、そんな素振りを見せるなど格好悪い。無意識に取り繕い、身体が勝手に平静を装う。

「いや、俺は、あとでいいですから」

「ううん、一緒に入る、ね？」

くいつくいつと腕を引つ張り誘う彼女に、早くも理性が負けそうなのは、健全な男子高校生としてやむを得ないところだろう。

（ちよ、ちよと、これって、うあ、考えてみれば今こつて二人きり？ 付いてきたのつてそゆこと？ 据え膳ってヤツなのか？ そうなのか？）

思考の大半は、おかしくなりつつあった。

それでももう一步とどまるのが、男、松田光太である。

「いや、ホント。先生、早く入らないと風邪引いちゃいますよ？」

日頃のやる気なさげな態度も、こんなときには落ち着いて見えるものだ。

とは言え、体内を駆け上がるリビドーに働きかけるのは、容易なことだった。

「うん、でも、それは松田くんもだよ？ 風邪引いたら大変だから、一緒にシャワー浴びよう？」

……むしろ容易に、治まった。

（そうだよなー。夢みたいなこと起こるわけないよなー。だいたにお子様先生だしなー）

毎日顔を合わせている相手。言葉通りが真意と、酌めないわけがない。

「……そうだな。でも、心配いらないから。それにまずいだろう？ 男女で一緒とか」

彼は多少肩を落としながらも、もはや気にすることなく断る理由を告げた。

しかし、彼女はまだ諦めていないらしい。親切もいつの間にか押し売りだ。

「どーせ紬はお子様でしょ？ いいじゃない、一緒だつて」

「うあ、先生ずるっ！ そこでそれ言うか？」

「ふーん、大人をバカにするからだだよつ。でもホントに、一緒にでもいいんだよ？ 紬、気にしないし」

「お子様相手に欲情したとあつちや、俺が気にする」

「うー、ならいいもん。風邪引いちゃえーつ」

紬はふいつと後ろを向き、ブラウスのボタンを外し出した。

それを見て光太は、小さく笑顔を作つて脱衣所を出た。

（もう機嫌が直るとか、ホント、子どもっぽいよなあ）

公園での紬を思い出しながら、扉の向こうの様子を窺う。

——ボタン

浴室の扉が閉じた音を確認すると、再び脱衣所に入り、衣服を拾い上げた。

（やっぱりなあ。女の子なら普通、たたむだろ？）

——シャワー……

（見ちゃまずかったかな、これ。パッド厚いなあ）

磨りガラス調の扉一枚隔てシャワーの音を聞きながら、光太は淡々洗濯を始めるも。はたと気付いた。

（あ。うち、乾燥機ないな。とりあえず、替えの服探すか……。普通の、あつたかなあ……。）

程なくして浴室から上がった袖を迎えたのは、綺麗にたたまれたバスタオル。

「んーと、ねーねー、このタオル使ってもいいのぉー？」

「どうぞ。終わったら声かけてください。服、渡すんで」

「はい」

（ふふうん、袖ってば大切にされてるう）

彼の配慮にご満悦で、お顔もすっかり湯上がり美人。

ひょこひょこ身体をあらかた拭いて、胸のところでバスタオルを巻くと、光太に向けてドアをノックした。

「お洋服ちょうだい」

「あ、はい」

彼はカチャリとドアハンドルを下げ、脱衣所で予想通りに上機嫌の袖に、着替えを渡した。

「うち乾燥機ないんで、今、外で乾かしてきます。それまで、ブラウスとスカート、あと気にならないければパンツまでは使えそうなのが見つかったんで。着てもらえませんか」

綺麗にたたまれた洋服を受け取ると、一番の上のショーツに、まだタグが付いていることに気付いた。

「これ、新品だよ？……もしかして、変な趣味とかある？あ、使用済みの方が怪しいか」

「ないない。それ、姉さんの。タグ切る鉄は……つとこれです、はい」

彼女らしい思も気にせぬ素直な質問に、慣れっこの光太はあっさりと答えた。

慣れっこと言うより、別の心配が頭の大半を占めていたが故か

も知れないが。

（んー、あのブラウス、微妙なだけどなあ。まあ、何とかなるだろ）

渡した洋服に思いを巡らせ彼が突っ立っている中、彼女は早速行動開始。

手にしていた着替えを無頓着に落として、綺麗な折り目を台無しにすると、ショーツだけ引き上げてタグを切る。

「ん、鉄ありがと」

「どういたしまして」

光太に鉄を返した右手を引き戻すと、流れるように胸元で止めたバスタオルを外す。

——ばさっ

当然の音を立てて、バスタオルが落ちる。

落ちる。

落ちた。

「ちょ、あの、せんせつ」

光太は啞然、後ろを向くことすら忘れ。

しかし袖は然もありなんという顔でいた。

「なーに？」

前屈みでショーツに左足を通しながら、こっちを向く袖。

「普通、男の前で裸にならないだろ……」

彼はようやくと思取り戻し一八〇度回転して、背中越しに言った。

「そうだねー。でも、お子様の裸じゃ、どーだっていいでしょ」

「それ、本気で言ってる？」

おそらくは本気だ。

察するに容易なだけに、彼は早くも溜息をつきそうな表情。

「んー、そだねー」

そんな背中越しの表情など知るよしもなく、紬は相変わらずマイペースだった。

「……先生、年齢で言ったら大人でしょ？」

「年齢で言ったら、去年十の位も変わっちゃったおばさんどもん。やっぱりどーでもいーかなー」

本当にどうでもよさげに、隠そうともせず着替えを続けている。

ショーツをはき終えると、今度はブラウスに袖を通して。無防備とはこのことかという絵だ。

「はあ……。先生はまだ全然若いですし、可愛いですから。少しは自覚してください」

「あ、今、可愛いって言った？ あららー、松田くんってば先生のこと好きになっちゃう？」

自分ではお子様だおばさんだと卑下しながらも、やっぱり可愛いと言われると嬉しいのだろう。彼女は素直に頬を染め、きちゃと喜んでいる。

喜び方がまた子どもっぽいから、彼としては全く動じる余地がない。振り返ればそこに、着替え中の女の子が、自分に心を開いて存在しているのに。全く、心は揺れない。

それどころか、これ以上付き合うのも面倒だと思え、適当にあしらってこの場を離れた。

「……はいいい。じゃあ着替えたら、あっちのリビングに来てくださいね」

「ふふーん、照れちゃって可愛いわ」

（照れてるんじゃないかって、呆れてるんだっての……）

その心の声に偽りはなかったが、穏やかに微笑まざるを得ないのも、また偽りのないことだった。

光太がコインランドリーから戻ると、玄関には濡れた靴が増えていた。

（姉さん、帰ってきたのか）

だからどうと言うこともなく状況を認識しながら、紬を待たせていたリビングに入り。

「ただいま。乾きましたよーってえつ、姉さんっ、何やってんだよっ！」

「んあー？ あ、お帰り」

「お帰りじゃねえだろっ、それは何だ、それは」

ソファに座っているはずの紬を見て、光太は驚かざるを、そして頭を痛めざるを得なかった。

なぜなら、彼女の隣には光太の姉、幸子^{さちこ}がいたから。もっと言ええ。

「エプロンドレスよ？ 知ってるでしょ？」

幸子が紬に、それを着せていたからである。

もはや幸子に何を言っても無駄であろうと、光太は彼女をパスし、エプロンを結んでもらっている紬に直接言い開く。

「ごめん、先生。姉さん、この手の趣味が行き過ぎて……」
すっかり勢いを失った声を紬に送ると、あっさりと返事が返ってきた。

そう、実に、あっさりと。

「ううん、全然いいよ。だって、これ、可愛いもんっ」

幸子の手を離れた紬はくると顔を向けて、キラキラの笑顔。

(おいおい、どういことだよ……)

まさかの事態に再び頭を抱えるも、紬も幸子も全く気にしていないようだ。好き勝手に話を続けている。

「うんうん、可愛いですよ、紬さん。さっすがは私の義妹!」

「えと、あのー、その、義妹とゆーことはー」

「光太の彼女ですもの。『義理の妹』はまだ早いかも知れませんが、妹みたいに可愛がつちゃうわ!」

「きやは、やっぱりそう見えます? 見えます?」

(先生も喜んでいるのか……。ああ、この人は、そういう人かもな……)

紬が恋人扱いされているのは本意なことに違いなからうが、彼にとつて、それはまだ取るに足らない問題だ。

しかし本当に取るに足らないと言い切れるのか、風向きは変わりつつあった。

「見えますよお。恋人でもなきや、下着を預けたりなんてできませんよねえ?」

「はい。それに、初めて、その、裸を見せた男の人なの……」

「あらまつ、そうです? 光太、大切にしないさいよ?」

消え入りそうな声を出して俯く紬の肩を抱き、厳しい視線を送る幸子。

その視線の先の彼も、俯きがちである。と言うより、項垂れがちである。

「……お芝居はその辺にしてくれ。先生はとりあえず、メイド服脱いで、自分の服着て。はい、これ服」

「きやつ、『脱いで』なんて。お義姉様の前で……」

「誤解するな」

演技とは思えないレベルで頬を赤らめる彼女も一蹴。

「誤解はあなたでしよう? 光太。紬さんが着ているのはメイド服じゃないわ。エプロンドレスよ」

「それ、同じだろ……」

引き続き結託している幸子も一蹴。したつもりであつたが。

やれやれと溜息をつきながら、幸子が蹴り返してくるではないか。

「何を言ってるの! メイド服はメイドさんの着るものよ? 恋人をメイド呼ばわりするなんて素敵だわあ。光太もようやつと、

コスプレに目覚めたのね。姉さん嬉しいっ」

「……ん? メイド服? メイドさん? そっか」

紬は何かをひらめいたように、小さくパンと両手を合わせた。

(はあ、またらくでもないこと言うつもりだな)

光太は次の一言を予感して、しばらく放っておく方が得策だったかと後悔し始めていた。

しかし放たれた一言は、彼の予感など周回遅れにしまった。

「紬、メイドになります! 紬は今日から、松田くんのメイドです!」

2 彼女は邪魔者?

「メイドと言つても、やることないなあ」

光太の部屋でうろうろするのは、紺色のワンピースに白のエプロン、まさにメイドの制服を着込んだ紬である。

「やることないんじゃないかって、やれることないんだろ?」

ご主人様にされた光太はベッドに座り、目の前のメイドもどきを疎ましげにも眺めていた。

「そ、そんなことないもんつ。紬、実は凄いいんだから!」

「確かに、晩飯の食いつぶりは凄かったな」

紬の「メイドになります」宣言に対し、やはりと言うべき肯定を示したのは幸子だった。

破天荒な幸子にとって、「メイドになります」宣言は大変に美味だ。その上さらに同棲とあつては、断る理由など全て排除。紬に一発許可を出し、早速夕食をともしにしていた。

「ぶー、松田くんの意地悪」

「『ご主人様』じゃなかったのか?」

「ちよつと間違えちゃっただけだよつ。紬のご主人様は包容力が足りないな」

（はあ、姉さんのメイド教育って何やったんだよ……）

紬以上にノリノリだった幸子は、紬の願いを叶えてやるという大義名分でみっちり一時間のメイド教育を施していた。しかし、戻ってきた紬は、この有様だ。

「でもね、つむぎはそんなごしゅじんさまがだいすきな。だから、がんばりますね」

「いや、がんばるな。棒読みが凄く嫌な予感……」

光太は溜息も保留して、紬を凝視。一挙手一投足見逃さぬ意気で警戒態勢に入る。

「つむぎははじめてですけど、ごしゅじんさまのことをおもつて、うまくいくようどりよくします」

彼の警戒域にもお構いなしに、一步、また一步と、紬は近づいていく。

「待て、何をやるつもりか言ってからにしろ」

迎え撃つ光太は、座った状態のままながら、わずかに上半身を前傾させ身構えている。

端から見たら、何を子ども相手にと言いたくなるような状況だが、相手は半端ではない。

（姉さん直伝だ、絶対とんでもないことするぞ）

「ご主人様つ」

（えっ?）

油断した。紬の抑揚が戻った科白に、彼はつい、油断した。

「えいつ!」

接触まであと一步という厳戒態勢の中、彼女は彼の首をめがけて、思いつきりジャンプ。

「ちょ、うあつ」

——ぼふつ

狙い通り命中した勢い余って、紬はそのまま、光太をベッドに押し倒した。

「何やって——」

「しーっ、紬に任せてください」

突然の強行を問いただそうとする彼の口を、紬の人差し指が塞いだ。

気付けば組み敷くように、紬は四つん這いで光太の上位にいる。

「はいはい、もう、何でも好きなことしてくれ……」

「たつくさん、ご奉仕しますからねつ」

彼女の強い眼光を見て、彼は諦めるしかないと思ったのだろう。もはや警戒することもばからしく、溜息混じりに瞼を閉じる。

（メイドねえ。……ん? 姉さんの言うメイドって、まさか、お

いつ)

彼は慌てて目を見開き、彼女を制止しようとするも、遅かった。

「まー——」

——ちゅっ

瞬間、世界は静止した。

彼にとって目を開いたことは、不幸だったのかも知れない。

(俺、今、キスしてる、んだよね……)

瞳を閉じた、見慣れた顔が、ゼロ距離に存在していた。

顔を振り払えば、両腕で押し戻せば、状況を終わらせることができる。

しかし、それは許されなかった。

カノジョが先に、状況を終わらせたから——

「やほー、光太あー、遊びに来たよー、お？」

第三者の登場に、二人は静かに、視線だけを声のする方へと向ける。

「……光太、それ、今、何やってるのかな？」

(いや、何も、やってないよ)

光太の言い訳は、声にもならない。

今この部屋で、カノジョの許可なくできることは、ただ一つしかないだろう。

(俺、なんであのとき……)

後悔だけである。

しかし今なお、囚われずに自由な発言をするものが一名。

「あ、林さんだー。あのね、紬、今日から松田くんのメイドさんになったのー」

紬がケロリと吐いた言葉に、部屋の空気は和ら……ぐはずもなく。

カノジョの圧政を強める結果となるだけだった。

「光太っ！ ちょっとそこに座りなさい。先生も！」

そしてカノジョの前に、二人はおとなしく正座せざるを得なかった。

(ヤバいなあ、あー、俺何やってんだろ)

光太は絶望の淵にあるような、生気の失われた顔をして。

「はーい」

紬はおそらく事態を理解できていないのだろう、相変わらずの笑顔で。

カノジョが話し出すのを待つ。

そしてキツとした視線を光太に送りつつ、カノジョは切り出した。その話は、意外な、二人どちらにとっても意外な話だった。

「モテない光太のことだから、迫られたら拒まないだろうとは思ってたわ。浮気ってほどでもなさそうだし、今回は特別、許しあげる」

(助かったあ。俺、もう絶対こんなことしないって誓う)

声にこそ出さぬが、表情どころか、身体全体の緊張が解け、光太は明らかに安堵していた。

しかしその隣は、逆に身体に力が入り、膝をついたまま身を乗り出すほどだ。

「ええっ？ ねえ、ひよつとして、林さんって松田くんの彼女？」

「そうですよ。私、林響子^{きょうこ}は、その松田光太の彼女、恋人です。

人の恋人に手を出さないでください。と言うか、その歳で高校生に手を出すって犯罪じゃないんですか？」

「うう……。ごめんなさいです。でもでもお……」

響子の冷え切った上から目線に、ここまでケロツとしていた紬が突然萎縮気味。発言からも、彼女らしい勢いが失われている。

もはや勝者がどちらかは明らかな状況。だとしても、全力でつぶしに行くのが響子という少女らしい。

「だいたいなんですか、その格好。コスプレで教え子を誘惑ですか？」

淫乱教師とでも罵らんばかりに嫌味たつぷりのトーンで、響子は責める手を緩めない。

しかし、格好を責めたのは、誤りだったのかも知れない。紬も一生懸命に反論を始めた。

「ち、違うもんっ！ これは、メイド服です！ 紬はメイドなのです！ 松田くんがご主人様なのです！」

「はあ？ 何それ。ご主人様とメイドって、イメクラかつての。変態っ！」

「うーっ、変態じゃないもん！ イメクラじゃ……イメクラって何？」

「え、えと、イメクラ、イメクラね。えーっ……」

喧嘩を始めるかと思えば、紬の疑問で勢いはボツキリ。その上、吹っつけた響子の方が狼狽している。

（俺が悪いんだけど……、これで収まってくれば……）
微妙な立場故どちらの味方もできない光太にも、案外早く事際の収束が見えてきた。

そのときだ。

「あらあら、響子ちゃんったら蒲魚ぶっちゃって。仕方ありませんねえ、お姉さんが代わりに説明してあげましょう」

バーンと登場したのは事態の根源、幸子だった。

「響子ちゃん、ちょっと来てちょうだい」

引っかけ回しに來たのかと思われた幸子だが、事情を説明したからと、響子連れて出て行ってしまった。

となると、部屋に残されたのは。

「……ごめんね、キスは、よくなかったよね」

絨毯の上にべたんと座る紬と。

「いいよ、別に。過ぎたことだし」

ベッドの上で仰向けになる光太と。

響子が出て行ってから、緊張だけじゃなく、いろんな糸が緩んでしまい、二人は力なく話している。

「あのね、松田くんね、聞いて欲しいことがあるの」

「……何？」

「追いつかれたって言ったじゃない？ ……戻るには、ある『課題』をクリアしないとイケないの」

「……課題、って？」

「それはね、言えないんだけど……」

「そっか。できそうなのか？」

変化した声音に光太は身体を起こしたが、彼女の表情は見えない。けれども、次の瞬間に上げられた顔は、憂いを含みながらも笑顔だった。

「心配してくれるんだ？」

「まあ、な。すげー泣いてたし」

「ありがと。優しいね、松田くんは」

涙多めでキラキラした瞳が彼を捉える。

「別にそんなことは……」

つい逸らしてしまう彼の目は、どこを見るときもなく泳いでいる。

「でね、その課題のために、メイドになろうって思っただけ」

「なら、がんばれよ」

照れている自分自身に耐えられず、光太は再び、ベッドに倒れ込んだ。

「うん、でも、失敗しちゃったね」

紬はまだ、光太の顔があつた位置を見つめ、話し続けている。けれども見られなくなれば、知らず知らずに表情の影が濃くなってしまう。

「……響子のことなら、気にしないでいいから。俺の問題だし」

「ううん。それもそうだけど、さっきの、その、キス、松田くんに幸せになつてもらおうって、お姉さんに教えてもらったのに……。私なんかの、嫌だったよね……」

「ちよ、ちよっと待て。姉さんに教えてもらったって言ったよな？」

紬の科白に、光太は慌てて上体を起こし、勢いそのままに問う。

紬としては予想外だったのだろう、目を見開きながら答えた。

「えっ? あ、うん。優しく教えてくれたよ」

再確認の問いに、予想通りの答えが返ってきた。

（はあ、姉さんか……。何考えてんだよ……）

ついつい顔を顰めながら、溜息を吐くことが止められない。

目を伏せる彼を見て、一方の紬は、どうしたものかとうろたえ始めた。

（えと、あの……。紬、いけないこと言っちゃった?）

彼女の落ち着かない挙動に、彼も察したのだろう。

そもそも紬は悪くない。と言うか、この場で辛い処遇を受けるべきではない。光太は矛先を向けまいと、努めて明るく。

「先生は全然悪くないから。メイド、続けてもいいぞ」

「いいの?」

「ああ、何だ、やりたいんだろ?」

「うんっ! 紬、メイドやりたいっ! ありがとつ、ご主人様っ!」

「じゃあ、俺は響子に謝って、いさせてもらえるよう頼んでくる」

自分の言葉一つで、目の前の人が晴れやかな笑顔になる。

誰だつて嫌な気はしないだろう。もちろん光太も少し嬉しくなり、足軽にベッドを降りようとした。

そのとき、部屋のドアが開いた。

「その必要はないわ」

「響子……」

戻ってきた彼女に対し、光太の心は反射的に、渋い反応を示す。

見られたまを言えば、浮気の現場を押さえられたようなものだった。大味な彼女とて、気にしないわけもなく、気にしても欲しい。そんな気持ちは無意識のうちに、彼の挙動と思考を支配した。

しかし、現実思考を越える。さっきも、今も。

「話は聞いたから。メイドでも何でも好きにしないさい」

「やたっ! ありがとつ、林さん!」

「ごめんっ、あれは、その……で、えええっ!? いいの?」

光太に引き続き、響子にも許可をもらい、飛び跳ねて喜ぶ紬。

他方、光太は責められる想定のままに反応してしまい、意外な

現実に対応しきれなかった。

しかし彼女は一枚上手で、そんな彼を予想していたのかも知れない。冷やかに言い返すようなこともなく、あっさりと先導した。

「ええ。さっきのことだって事故だったんでしょ？」

「あ、ああ、事故、事故だった」

「事故を責めるほど、子どもじゃないわ。でも、二つ、条件がある。聞いてくれる？」

「わかった。条件って何だ？」

彼女の敷いたレールにも気付かず、光太はスポツと畏にかかった。

にやり。そんな音が聞こえてきそうな不敵な笑みで、響子は言い放つ。

「一つは、今ここで、私にキスなさい」

「きよ、響子、お前何を……。先生見てるんだぞ？」

落ち着いた口調だったが、少なくとも光太にとって、とんでもない話だった。当然の驚きを見せたつもり光太だったが、この場ではまるで異端のよう。

「だからどうかしたの？」

響子は努めて、無事を装っているのだろうか。

（そんなはずない……）

「そうだよお。私は先生じゃなくて、メイドなんだからあ。あ、これからは『紬』って呼び捨てにしてよねっ」

紬は努めて、脳気を装っているのだろうか。

（いくら何でも、先生もわかってるだろ……）

二人とも、心中は穏やかでも、晴れやかでもない。そのはずな

のに、現実はずっと続いた。

「とにかく、私は、今、キスして欲しいの」

「いや、でも、はじ——」

「いいから。何も言わずに、キスしなさい」

切り札とも言うべき制止は振り切られ、光太にはあとがなくなった。

（俺だって、別に、嫌なわけじゃないけど……）

釈然としない思いを抱いたまま、彼は、一歩二歩と歩み寄り、わずかに身を屈める。

——……

顔を離し。目を開け、笑顔を視認する前に。

彼女の声が、聞こえる。

「んー、なんか気持ちが入ってないけど、ま、いつか。変に気持ち入れられても、らしくないしね」

キスのあと、彼を前に照れている。そんな状況であれば光太の科白も変わったろうが、幸か不幸か、今はそんな状況にない。

「ひどい言われようだな……」

光太が肩を落とす中、響子は待つことなく次の条件を提示した。

「さて、もう一つだけ。私もここで暮らすから」

刹那、光太はまた、頭を抱える羽目になる。

「……はあ？ 何だって？」

彼の聞き返した意味を、頭痛を、彼女は理解していないらしいが。

「聞こえなかったの？ 今日から私も、ここで暮らすって言うてるの」

「い、いや、そこもそうだけど。私『も』って……？」

「だって、先生も暮らすんでしょ？」

「『紬』ですーっ。ご主人様の恋人なのですから、響子様も呼び捨てにしてください」

彼の聞き返した意味を、頭痛を、彼女も理解していないらしいが。

「あ、そうですね。紬も、この部屋で暮らすんでしょ？」

「……いつの間に決まった？ 誰が決めた」

「幸子姉」

「だよな……。逆らえないよな……」

「うんっ」

「はいっ」

事は光太にとって重大で、頭痛を催すに十分だった。

冷静になって考えれば好転するわけでもなからうが、今はとにかく、この、よくわからない場から逃げ出すことを選んだ。

「……俺、ちよつと出てくる。とゆか、今は一人になりたい」

「うんっ」

「はいっ」

明るく元氣な二人の返事。屈託や表裏がない故か、それとも、隠すためだろうか。

彼として返事の具合に違和感を感じたが、深く考える余裕もなく、今夜からの同居人を残して部屋を出た。

直後、違和感の正体が、彼のいない部屋で露呈した。

「ごめんなさい。怒ってます、よね……？」

ベッドに並んで座り、自分の膝小僧に問うかのように、紬は小さく言った。

「はい」

凜と響く一言は、部屋の空気を、彼女の心中と同化させる。

「初めて、だったんですよ？」

「はい。いけませんか？」

「そんなことは……。私も……」

「でも、感謝もします。一緒に暮らせるなんて、夢みたいですから」

「そ、そうですね。今更だけど、紬もドキドキしてきちゃった……」

互いに瞳だけを動かして、交わす視線。

うつすらとこぼれる笑みには、それぞれの想いが詰まっている。

3 彼女の望み

「おはよう、光太」

「おはよう……」

「土曜だつてのに早いじゃない？」

「まあ……」

光太がダイニングに降りると、幸子が朝食中だった。

目の前の目玉焼きに醤油をかけながら、にやりと、向かいに座った弟の顔を伺っている。

「ひとつ顔を見るに、眠れなかったのね？」

「誰のせいだと思ってるんだよ……」

昨晚、案の定、響子と幸子が揃って「同じベッドで寝る」などと言い出したので、光太はむろん猛反対したが。

「どうだったの？ 女の子二人と寝る、ピンク色の経験は？」
敵軍には幸子も加勢し、完敗。

「どうもこうもあるかよ」

「欲望を制するというのは、大変なことよねえ」

「あのなあ……」

結局、三人は狭いからと同衾にならなかったのは幸いだった。
が。彼の一夜は、最悪の血色に現れていた。

「ところで、あの二人は？」

「……よく寝てる」

「へえ。響子ちゃんとはともかく、紬さんも大したものね」

感心した風な口調だが、箸を全く止めないところを見るに、想定通りなのかも知れない。

しかし光太はそこまで察せず、ありがちな「もしも」を口にする。

「俺が変な気起こしたらどうするつもりだったんだよ？」

「響子ちゃんはそれを望むでしょう？ 紬さんも、案外、ねえ？」

（はあ。姉さん、頭の中がちよっとおかしいからなあ）

聞くだけ無駄だったなと光太は心の中で溜息をつき、辟易とした。

「ごちそうさま。二人を起こしてきてちょうだい。せっかくのお休みだもの、有意義に使わないとね」

幸子は箸を置くと、キラッと瞳を輝かせた。

「そう、だな……。はああ……」

企みを隠し切れていない笑顔に、光太は一段と深く、溜息をついた。

一方、お寝坊さんの二人も目を覚まし始めていた。

「ふあーあ、あ、もうこんな時間……」

枕元の携帯をひたたくり、響子は時間を確認した。もう九時を過ぎていた。

「もう起きなくちゃ……ん？」

ゆっくり上体を起こそうとするも、なぜか、持ち上がらない。

視線を横に向けてと――

「うあつ。ちよと、せんせ、なんで抱きついてるんですかつ」

「ふやあうー、もう少し寝かせてですよー」

それはもうしつかりと、紬が響子に、横からしがみついていた。

「はあ。もう、寝ほけないでくださいっ」

「んあ？ あ……、林さん、おはよ……」

彼女は目を半分開くと、声のする方を見て眠たい反応をする。

そしてまた目を閉じて、可愛い寝息を……という状況にもう一喝。

「だーからー、その手、離してくださいよー」

「んー？ あ、ごめん……。ふみやう、今、何時い？」

「九時十分ですよ」

それでもまだ目覚めきらない眼で問う紬に、響子はと言うこともなく答えると。

「……えーっ！」

いきなりアクセル全開の鋭い声が飛んできた。

「なっ、ちよちよと、いきなり大きい声で何ですか？」

「なんで早く起こしてくれなかったの！」

どうやら予定外に寝坊したらしい。

彼女は驚く響子など気にもせず、ひょいっとベッドから飛び降

りた。

足下には先ほどまで光太が寝ていた布団。もし彼がいたら、命は危なかったかも知れない。

「だ、だって、今日、土曜ですよ?」

「だからだよ。これから遊園地行くんだからあ」

「はあ……」

くるつと振り向き今日の予定を訴える紬。一方、ベッドに取り残された響子は、理解も取り残され気味だった。一拍置いて気付く。

「つてまさか、それ、光太とじゃないですよね?」

「そだよ? ご主人様と、響子様と、行くのー」

「なんで先生が光太と……えっ? 私も?」

まさかという疑いから、予期せぬ驚きに変わる響子の前で、紬はネグリジェの裾をひらひらさせて笑っている。

「そうですよ。ふっふーん、遊園地デート、憧れでしょ?」

「うっ……、それは否定しませんけど……」

響子はベッドの上に乗ったまま、言いくいことを隠せぬ表情で反応していた。

「観覧車でキスして、夜は初めての……なんて、ねえ?」

「なな何言ってるんですか? 別にそんなこと考えてなんか」

「今時キスも、その先もまだ、なんてねえ。子どもじゃないんだしねえ?」

「キスは昨日しましたよっ! だいたい、先生だって初めてって言うってじゃないですか!」

「私はいいんだもん」

悪戯つばさ満点で転がり続けていた紬の声。

しかし突然、変調を来した。

「ご主人様を幸せにするのが、メイドの仕事だから……」

「……先生?」

隙あらば言い返してやろうと思っていた響子が心配するほどの、わかりやすい変化だったはずだが。

「ん? あ、気にしないで。それに『先生』じゃなくて『紬』だよ」

次の一言では、もうすっかり元通り。

(確かに今、おかしかったよね……?)

——コンコン

響子が不思議に思っていると、思考を打ち切るように部屋をのドアが叩かれる。

「はーい」

寂然としない彼女の代わりに、紬がドアを開けた。

「おはよ。ご飯、できてるから」

「はーい。響子様っ、行こっ」

返事をした紬が響子の方を向いたので、光太もつられて響子の方を向くと。

彼はすぐさま視線を外した。

「……響子、ボタン」

「えっ? あっ、ごめんっ——」

彼の言葉の意味を、響子はすぐに理解した。

派手に外れた、パジャマのボタン。曝された素肌。

慌てて前を合わせてなお、視線を外して頬を赤らめる二人。

気まずい空気を読んで不満に思うものが一人。

「えー。ご主人様、紬のときと反応が違いますー。特別扱いよくないですー」

頬を膨らませる彼女の瞳には、悪戯心が戻っている。それが悪戯で済まされるのか、考えてはいなかったが。

「……ふうん、いつの間に見たのかしらねえ？」

「ち、違うつ、誤解だつ、あれはたまたま」

「たまたま見たのね？ ……まあ、いいけど」

うろたえる光太をあつさりと許した響子を見ながら、紬はやっぱり笑顔。

（ふうん、今日は素敵な一日になりそう）

笑顔の先にも、笑顔があった。

（特別扱い、嬉しかったし……ね）

長く伸びた影を背に、紬は今も、光太の腕を抱いている。

「遊園地、みんなで来た方が楽しいね」

響子はどうに怒る気をなくしており、今や楽しみに彼女の隣を歩いていた。

「紬、よく来るの？」

「うん、よく来るよ」

光太を引っ張る彼女に、二人とも何となく違和感を感じていたが、これで納得。

「へえ、意外のような、想像通りのような」

「あー、それって子どもっぽいとか言いたいんでしょお？」

「あたり」

「うー」

まだまだ多くの人がある園内で、紬はどこかを目指している。

最初のうちは「どこ行くの？」って聞いていたが、あまりに迷いなく引っ張っていくものだから、すぐにお任せ状態になっていた。

た。

「先に言っちゃうけど、いつもは一人で来てるの」

「言わなくてもいいのに……」

察した響子は若干曇ったが、紬は相変わらずだ。

「心配しすぎだよ。紬の趣味だから、一人でも来たいの」

「ああ、なるほど。一人で旅行みたいなもんだね」

「そうそう」

響子と紬はまるで姉妹みたいだ。仲睦まじく腕を組んでいるはずの光太は、連れて歩かれてる犬のよう。

そう見えるにはやはり理由があるわけ。

「そうか？ 俺には単なる寂しいお婆さんとか」

「……ご主人様は、少し、素直すぎます、ねっ！」

「痛つ、ちょ、腕つねるなあつ」

「光太が悪い。反省なさい」

「普通助けるところだろ。紬、痛い、痛いつて」

今日は一日中、こんな関係だった。

「遊園地にいるとみんな楽しそうで、見ても楽しいんだよ？」

「んー、私は『一人って寂しい？』とか思っちゃう」

「そこは、考え方一つ、かな。ま、響子様にはご主人様がいるしね」

「……そうだといいですけど」

「そうするのが、ここからのイベントだよ？」

紬は光太の腕を解放し、トンと、響子に押して渡した。

「夕日の差す観覧車の中で――。憧れのシチュエーションだもんね？ 私にはなかったけど」

「えっ？ 紬っ」

「いいのいいの、私は下で待つてるから」

突然のことにキョトンとしている響子を背にして、小さく手を振りながら。

紬は観覧車乗り場へと続く階段を、一人、降りていった。

「お幸せに。なんて、言い訳っぽいかな？」

独りごちて見上げたイルミネーションが、わずかに滲んで見えた。

「なんか紬に悪いことしちゃったよね……」

「二人きりなんて、今更なんだけどな」

（……これだから私が苦勞するのよ）

内心溜息をついた響子だが、そんな後ろ向きなことは言っただけでない。

紬が気を遣ってくれていることには気付いていた。だからと言うわけではないが、彼女の気遣いを理由に勢いが付くなら、それでもいい。

「ねえ、隣座ってもいい？」

「ああ、好きにしろ」

「ありがと。……っと」

ゴンドラの中で席を移ると、響子はくっつと、身体を右に倒した。

「一度聞きたかったんだけどさ」

「何？」

頭上の声に、響子は答える。

「こういうの、好きなの？」

「こういうのって？ 観覧車のこと？」

「それもあるけど……」

光太は左肩の重さを気にして、車窓の外に投げ出した視線を動かせないでいる。

「……こうやって、くっついたりすること？」

照れていることなどとお互にお見通し。わざとらしく問い返しながら、両手で彼に触れた。

「ああ。……こういうの、嫌いなのかと思ってた」

「好きだよ。年中べたべたしたいとは思わないけどさ、手を繋いだり、肩を寄せたり、……キスしたり、したいって思う」

「そっか。なら、これからはそうするから」

「うん。……変に優しいんだよね、光太は。でも好きだよ、そーゆーの」

——ちゅ

「うわっ、な、何をっ」

「ふふーん、やつとこっち向いたーっ」

左頬を押さえながら響子に向けた笑顔は、夕日よりも真っ赤な色。

大慌ての光太から見える笑顔は、案外しれっとしていたりする。

「……………」

「照れない照れない。私たちは恋人同士なんだし？ キスの一つや二つ当たり前だよ？」

「そういう問題かよ……」

顔こそ向けたものの、目なんか当然合わせられず。

響子がどんな顔をしているのか、彼には見る余裕もなければ、考える余裕もないだろう。

「そういう問題。ところでさ、今夜はどうするの？」

光太の慌てぶりをいいことに、思いきって胸を押し当てる。

彼の胸にむにゅつと、慣れないけどわかりやすい感覚が生ずる。

「っ、それ、は、さ……」

「あのー。なんかエッチなこと考えてるみたいだけどっ。そうじやなくて、紬だよ？」

あまりに予想通りの反応に笑うのを堪えながら、彼女はひよいつと間合いを取った。

「あ、ああ、紬な。……どうするんだ？ 聞いてみないことには……」

「いいよ、泊めてあげて」

「でも……」

「気にしないで。紬、帰れないんでしょ？ なら、泊めてあげなよ」

「いいのか？」

重ねて聞く彼は、驚いたような、申し訳ないような。

響子をそうさせるに十分な表情だった。

「何を今更……。あつ、隣でエッチなことしちゃうつてのもいいかも？」

彼女はついに、思いつきり抱きついて。

「うあつ、何してんだよっ」

「えー、光太は私と、したくないの？」

「まあ、その……」

「なんてね。いいよ、別に。急がなくて。……男の子は、そうもいかないのかな？」

「そ、そうだな……」

——ちゅ

「なあっ！」

「素直な子にはご褒美！ ……大丈夫、嫌とか怖いとかじゃない

から。ただ、今は、他に大切なことがあるだけ。そうでしょ？」

「……こうもうまく恩を売られちゃ、追い出せないしな」

「だよねえ。お子様の皮を被った何とやら、だよ。さ、降りよ」

「ああ、迎えに行くか」

ゴンドラのドアが開く。

二人は繋いだ手をそのままに、紬を捜しに歩き出した。

「どこ行つたんだ？」

「すぐ見つかるかと思つたんだけど。電話してみるね」

しばらくしても響子は携帯電話を耳に当てたまま、ふるふると首を振っている。

どうやら、電話に出ないらしい。

「つたく、迷子じゃないだろうな？」

光太は軽口を叩きながらも、響子の挙動を見張っていると、その向こうに、見慣れぬ状況があつた。

「響子、あれ……」

「ん？ 何？」

電話機をそのままに、光太が指差した方を見ると。

人混みの中にできた人集り、その向こうに見える紬らしき存在。

あろう事か、ストレッチャーに乗せられ運ばれているではないか。

「何ぼさつとしてんのよっ、行くわよっ」

「あ、ああ、そうだな」

響子は一目散に走り出す。

光太はワntenボ遅れながら彼女の後を追った。

「すみませーん、どいてくださーい。その子の家族ですー」

「おい、その子の家族だつてよ、通してやれ」
「ありがとうございます。通してくださいー」

「あー待つて、一緒に乗せてあげてー」

集まる人をかき分け、通り道を作ってもらい、ついには紬の元に到達すると。

「済みません、私たち、その子の家族なんです。乗せてください」

「わかりました。どうぞ」

制服姿の男性に許可を取ると、響子は身軽に、救急車の中へと乗り込んだ。

「光太、手出して」

「あ、ああ」

息を切らしながら追いついてきた光太が引つ張り上げられた直後。

——ボタン

後部ハッチは閉じられ、「シートベルトしてください」という救急隊員の声とともに、サイレンを鳴らして車は走り出した。

「あの、済みません……」

同乗したはいいものの、状況のわかっていない響子たちが恐る恐る隊員に声をかけたとき。

「あ……きょう……い……の……?」

「大丈夫ですよ。ご家族の方が来てくださってます」

か細いながらも聞こえた紬の声に、とにかく、無事なんだと二人は胸を撫で押した。

「もう、心配したよ……」

「はあ、よかった……」

4 彼女だつて女の子

「ドジなメイドでめんね」

少し長かった検査も終わり、紬は今、二人の目の前に笑顔でいる。

「びっくりしたよお、どこも悪くないって?」

「うん、大丈夫だろうって。でも、今日一日は安静だけだね」

特に症状はなくとも、頭を打ったのだ。医者にはベッドの上でおとなしくしていると言われている。

「子どもを、助けたんだって?」

「そうなの。二人を乗せたあと、乗り場から落ちる子どもを見つけたちゃって。つい受け止めに走っちゃった。この身体じゃ無理なのにね」

自嘲気味の笑いには、安堵が混じっている。

「少しは自分を大切にしろよ」

彼女はきっと、子どもが助かってよかったとだけ思っているのだろう。

それは決して悪いことではないが、彼女を心配する理由でもあった。

「そうだね。ずぶ濡れで私を助けてくれた人も、風邪引かないように気を付けてよ?」

「はいはい。冗談言えるんなら、もう大丈夫だな」

「そりやもう。でも私は怪我人だからあ、王子様のキスとか、必要かなあ?」

紬は顔を小さく上げる。

すると案の定、光太は落ち着いて、冷たい言葉を返してきた。

「……冗談も過ぎると可愛くないぞ」

「ふふつ、いいよ？ 今日ぐらいいは貧乏してあげる」

目を瞑っているけれども、ベッドサイドの様子は手に取るようにわかる。

響子の言葉に、光太は慌てて言い返すだろう。

「おい響子、何だよそれ」

「メイドは大切にしないとねえ？」

「知るかつ。ちよつと出てくる」

彼の足音が遠ざかつていくのを確認しながら、紬は目を開けた。

「ふふーん、照れちゃつて。行つてらっしゃーい」

足早に病室を出て行く彼を見送り、響子が再び、ベッドの方を向くと。

視線を合わせた紬が、言う。

「……響子ちゃんつて、呼んでいいかな？」

「んー、響子、でいいですよ」

能う限り、けれども自然な範囲で、彼女は明るく振る舞った。

紬の表情が、それを求めていたから。

「……響子、ごめんね」

「なんで謝るんですか？」

感覚が告げた通りに暗い話題になりそうだったけれども、紬はまだ、穏やかな笑顔だ。

「だって、大切なデート、台無しにしちゃったから……」

「そんなことありませんよ」

「ううん、いいの。失敗は、失敗だから……」

「……課題、つてヤツですか？」

「……気付いてたんだ」

「はい、何となく。光太は気付いてなかったみたいだけど。あ、でもだからって、話に乗ったわけじゃありませんよ。観覧車でキスするのは憧れでしたし、できましたし。全然、台無しなんてことなかったです」

どこまでわかつて慰めてくれるんだろうと、涙を止めるのが精一杯の紬に対して。

響子は踏み込むたびに、無意識の笑顔を増していった。

「でも、本当なら、今頃……」

「そうですね」

「……ごめん」

涙が混じる彼女の声に、上機嫌な声が被さる。

「今頃、一緒にご飯食べて、今日は紬とお風呂入ろうかなつて、思っていました」

「えっ……？」

ポフツとベッドの端に腰掛けた響子は、足をパタパタさせて、虚空を見つめて。

「まだ、時間かかると思います。今までも長かったんです。光太も私も、案外ロマンチック重視ですから。それとも臆病、なのかな」

「……ありがと……」

「何泣いてるんですか。やりたい盛りにお預けてひどいですよね、ぐらい言っておけば、気が楽になります？」

「うん……。ありがとうね……」

あまりに嬉しそうに紬が泣くものだから、響子までもらい泣きしそうになる。

顔がわずかに上向いているから、まだ、涙はこぼれない。でも

もう限界だから。

トンとベッドを滑り降りて、病室を出て行こうとしたとき。

「なあんだ、元氣そうじゃない?」

光太とともに入ってきたのは、長身の女性。

よく知った声に、二人とも、驚きながらも会釈した。

しかしその光景を目の当たりにした、光太の方は驚かざるを得なかった。

「えっ? 母さん、紬……じゃなくて、風間先生のこと知ってるの……?」

「ええ、よく知ってるわ」

それを聞いて、光太と同様に響子も驚き。

「紬と幸子おばさんって知り合いなの?」

「……ふええっ? 『母さん』 ってえ、えっ? アイアイ、ご主人様のお母さん?」

さらには、紬も驚いていた。

「ふうん、ご主人様、ねえ」

「あ、そ、それはこっちの話……」

つついっ出てしまった昨日からの口癖を言い訳しながらも、目はまん丸のまま。三人の中でも特に、紬は泡を吹いたようだった。

そんなこともお構いなく、むしろ、そうなることを予見していたかのように平然と、突然の訪問者は話を続けている。

「あとで聞かせてもらうからね。あ、そうそう、^{あいず}相沢は旧姓。今は^{まつだ}松田愛なの。あだ名はアイアイのまま残っちゃったけどね」

「……二人って、どういう関係なんですか?」

「今は秘密」

避けたい質問にも愛は動じることがない。

尤もそれは三人にとつて意外でもなんでもなく、彼女らしいと言える行動だった。

「悪いんだけど二人とも、少し席を外してくれる?」

「ああ……」

「はい……」

母親、あるいは現恋人元友達の母親、お願いを断ることはそうそうない。いつも通りだ。

けれども。

「いい子いい子。そうそう、昨日のことは幸子から聞いてるから。しばらく、一緒に暮らしたらいいわ」

「えっ……?」

「楽しいでしょ? そういうのも。さ、今はお外行つてなさい」
突飛な提案に対しては、どうしたって。

二人ともあつけにとられ、病室を出て行つた。

その後ろ姿に、愛は満足げに微笑み。ベッドの上の紬は、逆に表情をこわばらせた。

「どこまで、ご存じだったのですか」

「そうねえ。何一つ知らなかった、かな」

線が細いながらも凛とした声に対し、安穩と、あつけらかんとした声が返される。

「本当ですか?」

「本当。ねえ、ちよつと耳貸して。——私の裏稼業、光太は知らないから。下手に干渉なんてできっこないわ」

「それじゃあ……」

「そう、たまたま。もしくは、あなたがよほどの幸運か、もしくは不運か」

愛は「わかってくれた？」とウインクをして、ベッドサイドの丸椅子に腰掛ける。

視線の外れたこの機に、紬は強すぎた眼光を伏せた。

「幸運だった、と思います」

「そう？」

「はい。光太さんは、その、とても優しくしてくれました……」

「別にお世辞はいいのよ、それとも……？」

「お世辞ではありません。私にチャンスもくれました」

紬の回答に、愛は肩を落とす。

（紬はきつと、自分の失敗しか頭にないのね）

含みを持たせた言葉に気付かなかったことに、その余裕のなさに、彼女は少し残念と思い。同時に紬の処遇は、もう心に決めていた。

「けれども、失敗した？」

「はい……。やはり、しばらくは戻れません。それに、アイアイの家族だとわかつては……」

「あなたの助けた子、それにあの子の両親は、きつと一生、あなたに感謝するわ」

「……でも」

「私たちの仕事は『運も実力のうち』よ。過程はどうあれ、あなたが人を幸せにしたことは明らかでしょう？」

「ありがとうございます……」

（やつぱり、まじめ過ぎちゃうかな）

愛は決心を変えることなく、腰を上げ、言い切る。

「とは言え、諸刃の剣なのが、紬ちゃんのいけないところよねえ」

「……済みません」

「あのねえ、何が悪いかわかって謝ってるんでしょね？」

「はい、それは、二人の一日を、こんなことに……」

「違うわ。あなたの介入で、響子ちゃんを悲しませるかも知れないってことよ」

にやりと、いつも以上にわかりやすい含み笑いを近づけて、紬の頭を優しく撫でた。

「えっ？」

「それ以上は、自分で考えなさい。さっきも言ったけど、しばらく、一緒に暮らしていいから」

「それって……」

「紬ちゃんは小さいうちから仕事ばかりだったから、ね。この辺で恋でも、経験したら？」

「こ、恋って、そんな、紬がご主人様にいつ？」

紬が真っ赤に染まったときには、もう、愛は廊下の方へと歩き出していた。

「あらあら、光太ったら、そーゆーのが好きなの？ 変態さん、隠れてないで出てきなさい」

「……気付いてたのかあ」

廊下からひよこつと顔を出した光太と響子を、同じように撫でると。

「当然。じゃあ私は仕事に戻るから。響子ちゃん、がんばってね」

「あ、はいっ！」

誰よりも悪戯っぽい笑顔で、去っていった。

彼女の言葉を、少なくとも響子だけは、よく理解していた。だから早速。

「さてと、って、こらそこおっ！ なんで手を繋いでるのよっ」

「えっ？　だって、紬が……」

「病床のメイドがご主人様にぬくもりを求めているだけです」

「んなもん求めるなあつ」

無意識のうちに恋人とより甘ったるいことをしている二人を引き離そうとするが。

「響子、怪我人なんだから優しくしてやれよ……」

「あーもうっ、光太も少しは気付きなさいよっ」

敵も然る者であろうか。それとも、これこそ運も実力のうちか。紬は恥ずかしげもなく、光太の首にぶら下がっている。

「大丈夫です。私が気付けてあげます」

「ああつ、そっちは気付かないでっ」

大騒ぎのベッドで、彼女たちの長い夜が始まった。

2009-11-15/TKY
will be released

**次のテーマは「買収」
参加者募集中なの**

締め切りは前日
(と言いつつ当日まで待つよ!)

mCMX 4

<http://www.projectkaigo.org/>

難解辛苦 テーマが悪いと思いました

春屋アロツ

三回目にて初参加です。テーマ見た瞬間に居酒屋でダベってる五人が思い浮かんだので書いてみたら、そのうち二人しか出てきませんでした。……あれ？

<http://third.system.cx/>

Lagado

幼少の頃、百貨店屋上の遊具スペースで開催された「〇〇レンジャーショー」とかで、5人組の戦隊のうち2～3人しか登場しないことに純真なる疑問を覚えたものだ。あれは時間でも脚本でもなく、予算の問題か。

<http://www.k3.dion.ne.jp/~lagado/>

川鵜鶏肋

長かった。楽勝だと思ったのに。第一稿あがったのが締め切り日の朝。誤字脱字その他ミスには是非目をつぶっていただきたく。5ですが7でもあり、なぜか双子祭り、そして全開です。意味なく細かい設定や妙なこだわりがたくさん詰まっていますのでいろいろ推理してみてください。指定キャラ、今回は無理だと思ってたんですが……

なぎ

例によって未完という酷い有様ですが、文章を書くことに少しずつ慣れてきたような気がします。この原稿の残りの部分は夏コミまでに上げるようにします。テーマに絡めるのが面倒だったので五人兄弟という安直な設定になりました、代わりにオプショナルな設定のお姉さんを登場させました。なかなかいいキャラなのでこれからも登場させたいですね。

Fukapon

何を書きたかったのかわからん……。と気付いた時点で書き直しが当然ですが、そんな時間はありません。てことで押し通してみました。今回も年齢高めの構成ですが、紬の口りっぽさのおかげでいつも通り私らしくなっております。あーゆー子がいたら可愛いなあって思うんですけど、いませんかね。いなぎゃ私になるしかないよね。

<http://www.fukapon.com/>

レイアウト

今回は入稿早かったですねえ。19時には揃っていました。この企画の趣旨を理解していただけているのだろうか。とか己の首を絞めるようなことは言わないことにしています。

印刷・製本

ページ数多すぎ！ 嬉しいけど大変！ その辺の複合機じゃ製本できないんだもん。

<http://www.projectkaigo.org/>

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 3
five

2009年 5 月31日 初 版 発 行
2009年 8 月16日 第 2 版発行

発行所 まにふいくみやはか
 <http://www.projectkaigo.org/>

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2009 春屋アロツ, 川鵜鶏肋, なぎ, Lagado, Fukapon,
まにふいくみやはか

この本は Creative Commons「表示 2.1 日本」ライセンスに従い頒布されます。
詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/> をご覧ください。

